

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(174)

南九州西回り自動車道建設(薩摩川内都IC～高江IC間)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(XXXIV)

やま に た
山仁田遺跡

(薩摩川内市青山町)

2012年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



川内・隈之城道路のルート上に並ぶ山仁田遺跡他 3 遺跡

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴って、平成21年度から22年度にかけ実施した薩摩川内市青山町に所在する山仁田遺跡の発掘調査の記録です。

山仁田遺跡は縄文時代早期、中世から近世にかけての遺跡です。縄文時代早期については押型文土器や複柄の石匙等の遺物が出土しました。中世から近世については、道跡、竪穴建物跡、掘立柱建物跡等が検出され、その周辺で青磁や土師器等の遺物も出土しました。なかでも、粘土張りがみられる残りの良い4基の炉跡と、中世の溜池を近世になって水田として利用したことが分かる溜池・水田遺構が検出されました。これらは、この地域の当時の人々の生活を知るうえで貴重な資料です。

本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々を目にとまり、県内各地にある埋蔵文化財に対する関心や理解が深まり、文化財の保護・活用につながることを願っております。

最後に、調査にあたりご協力をいただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所、薩摩川内市教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺 田 仁 志

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまにたいせき							
書名	山仁田遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道建設(薩摩川内都IC～高江IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXXIV							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第174集							
編集者名	彌榮久志・光永誠							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811 FAX0995-48-5821							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまにたいせき 山仁田遺跡	かごしまけん 鹿児島県 さつませんだいし 薩摩川内市 あおやまちょう 青山町	46215	6-148-0	31°	130°	平成21年度 2009.01.05～ 2009.01.28	228㎡	南九州西回り自動車道建設による記録保存調査
				47′	17′	平成22年度 2010.05.10～ 2010.09.28	13,872㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山仁田遺跡	散布地	縄文			押型文土器, 石鏃 石皿, 石匙, 磨石 スクレイパー 使用痕剥片, 石核			
	集落	中世～近世	炉跡4, 竪穴建物跡, 道跡, 石組遺構, 掘立柱建物跡3, 溜池遺構, 水田遺構, 山仁田溜池, 近世土坑		土師器, 須恵器 瓦質土器, 青磁, 白磁			
要約	<p>山仁田遺跡は、縄文時代早期の遺物、中世・近世の遺構や遺物が発見された複合遺跡である。遺跡の指定範囲の多くの部分が宅地と重なり、包含層が攪乱を受けていた。</p> <p>縄文時代早期では石鏃やスクレイパー、石皿などの石器や押型文土器が出土し、当時の狩猟・採集生活が見られる。中世から近世においては炉跡・竪穴建物跡・道跡・石組遺構・掘立柱建物跡・溜池遺構・水田遺構や近世土坑が検出された。遺構と併せて青磁や土師器等も出土している。この地域の当時の人々の生活を理解する貴重な資料である。</p> <p>周辺の霜月田遺跡、都原遺跡、上新田遺跡、山口遺跡、堀之内遺跡、川骨遺跡等の遺跡との関連性を深めていくことにより多くの情報を与えてくれることを期待させる遺跡である。</p>							



山仁田遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴う山仁田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県薩摩川内市青山町 4096 番地ほかに所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査事業は、平成 21 年度から平成 22 年度に実施し、整理・報告書作成事業は、平成 23 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表、図面の遺物番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡記号は「山仁」である。
- 7 挿図の縮尺は各図面に示した。
- 8 山仁田遺跡で用いたレベル数値は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所の作成した現況計画図中のセンター杭 No.431 に基づく標高である。
- 9 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、各年度の調査担当者が行った。
- 10 遺構図、遺物分布図の作成及びトレースは、整理作業員の協力を得て、平成 23 年度の担当職員が行った。
- 11 出土遺物の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て、平成 23 年度の担当職員が行った。
- 12 出土遺物の写真は本センター職員が行った。
- 13 本報告にかかる自然科学分析は、放射性炭素年代測定を（株）加速器分析研究所に委託した。
- 14 執筆分担は以下の通りである。
第 1・2 章 光永誠 第 3 章 彌榮久志・光永誠 第 5 章 彌榮久志・光永誠
- 15 本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、適宜、展示・活用をはかる予定である。

凡 例

- 1 基準方位は磁北である。
- 2 使用した土色は『新版標準土色帖 2004年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。ただし、陶磁器の胎土の色調や釉調については、『標準土色帖』を基準としながら、一般的な色調感も加味して表現した。
- 3 遺構・遺物実測図の縮尺は、挿図中に記した。

- 4 本書で用いる炉跡の表現については、次のとおりである。



- 5 本書の土器・土師器観察表における「胎土」の項目については、肉眼観察を行い、特に多く含まれる鉱物に「○」をつけた。その他については詳細を備考に記した。また、土器の表現については、次のとおりである。



- 6 本書で用いる陶磁器についての基本的な名称、及び表現方法は次のとおりである。

【名称】 A 口唇部

B 口縁部

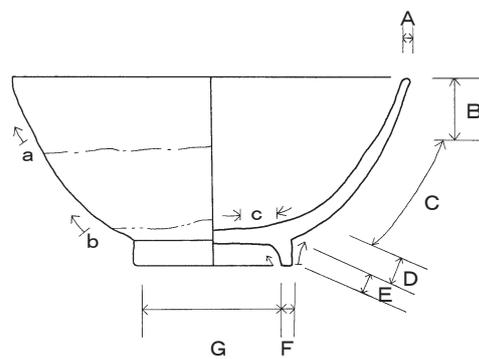
C 体部

D 腰部

E 高台

F 畳付

G 高台内面・天井



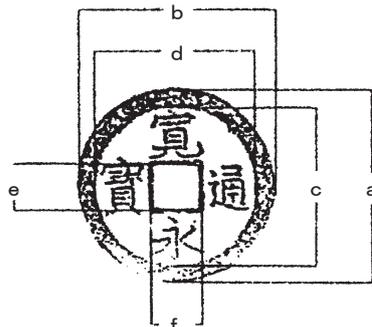
【表現】 a 一次施釉ライン

b 二次施釉ライン

c 見込み蛇ノ目釉剥ぎ部

- 7 古銭の観測は次のとおりである。

また、時期は初鑄年代である。



目 次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 平成21年度の調査	1
第3節 平成22年度の調査	2
第4節 報告書作成作業	5
第5節 川内隈之城道路建設に伴う各遺跡の概要	7

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	11

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法	19
第2節 層序	21
第3節 調査の成果	25

1 縄文時代

(1) 遺物出土状況	25
(2) 出土遺物	
ア 土器	26
イ 石器	28

2 中世・近世

(1) 遺構	
ア I・II地区	
(ア) 炉跡	42
(イ) 竪穴建物跡	48
(ウ) 道跡	48
(エ) 石組遺構	49
(オ) 掘立柱建物跡	51
(カ) 近世土坑	57
(キ) 山仁田溜池	57

イ III地区

溜池遺構・水田遺構	59
-----------	----

(2) 遺物

ア I地区	62
イ II地区	71
ウ III地区	72
エ IV地区	81

第4章 自然科学分析	91
------------	----

第5章 総括	96
--------	----

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図	薩摩川内都 IC ～高江 IC 間遺跡位置	9
第 2 図	遺跡周辺表層地質	12
第 3 図	遺跡周辺土壌	13
第 4 図	周辺遺跡地図	16
第 5 図	地形図及びトレンチ配置	20
第 6 図	基本土層	21
第 7 図	C ～ E - 1・2 区東西方向土層	22
第 8 図	D ～ E - 2 ～ 4 区南北方向土層	23
第 9 図	H - 22・23 第 11 トレンチ西側土層	24
第 10 図	縄文時代の出土遺物分布	25
第 11 図	縄文時代出土遺物 土器	27
第 12 図	縄文時代出土遺物 石器(1)	29
第 13 図	縄文時代出土遺物 石器(2)	31
第 14 図	縄文時代出土遺物 石器(3)	32
第 15 図	縄文時代出土遺物 石器(4)	34
第 16 図	縄文時代出土遺物 石器(5)	35
第 17 図	縄文時代出土遺物 石器(6)	37
第 18 図	縄文時代出土遺物 石器(7)	38
第 19 図	縄文時代出土遺物 石器(8)	39
第 20 図	調査地区と中世遺構位置	43
第 21 図	1 号炉跡	44
第 22 図	2 号炉跡	45
第 23 図	3・4 号炉跡と出土遺物	47
第 24 図	竪穴建物跡	49
第 25 図	道跡	50
第 26 図	石組遺構	51
第 27 図	掘立柱建物跡柱穴位置	53
第 28 図	1 号掘立柱建物跡	54
第 29 図	2 号掘立柱建物跡	55
第 30 図	3 号掘立柱建物跡	56
第 31 図	近世土坑	57
第 32 図	山仁田溜池の範囲	58
第 33 図	水田遺構土層	60

第 34 図	溜池遺構および水田遺構	61
第 35 図	I 地区出土遺物(1) 土師器 (埴・坏)	63
第 36 図	I 地区出土遺物(2) 瓦質土器 (播鉢・火舎)	64
第 37 図	I 地区出土遺物(3) 青磁 (碗・皿)	66
第 38 図	I 地区出土遺物(4) 染付・唐津・薩摩焼	68
第 39 図	I 地区出土遺物(5) 窯道具	69
第 40 図	I 地区出土遺物(6) 石器	70
第 41 図	I 地区出土遺物(7) 古銭	71
第 42 図	II 地区出土遺物 土師器・白磁	71
第 43 図	III 地区出土遺物(1) I 層出土	73
第 44 図	III 地区出土遺物(2) II 層出土	75
第 45 図	III 地区出土遺物(3) II 層出土	77
第 46 図	III 地区出土遺物(4) 水田 e 層	79
第 47 図	III 地区出土遺物(5) 水田 f・g 層	80
第 48 図	IV 地区分布図	81
第 49 図	IV 地区出土遺物(1) 土師器	82
第 50 図	IV 地区出土遺物(2) 須恵器・瓦質土器	84
第 51 図	IV 地区出土遺物(3) 磁器・陶器・轆の羽口・石鍋	85
第 52 図	遺跡の残存状況	99

表 目 次

表 1	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表 (川内隈之城道路)	8
表 2	周辺遺跡地名表	17
表 3	縄文時代出土土器観察表	40
表 4	縄文時代出土石器観察表	40・41
表 5	石組遺構観察表	51
表 6	1号掘立柱建物跡観察表	54
表 7	2号掘立柱建物跡観察表	55
表 8	3号掘立柱建物跡観察表	56
表 9	土師器観察表	86・87
表 10	瓦質土器・須恵器観察表	87
表 11	銅銭・鉄銭観察表	87
表 12	青磁観察表	88・89
表 13	白磁・磁器観察表	89
表 14	染付観察表	89・90
表 15	陶器観察表	90

図 版 目 次

図版 1	南方より遺跡を望む遠景 真上より遺跡を望む全景	101
図版 2	北側から県道周辺を望む近景 県道より北側を望む近景	102
図版 3	県道より南側を望む近景 県道より南側谷部を望む近景	103
図版 4	縄文土器出土状況 1 縄文土器出土状況 2	104
図版 5	1号(上)・2号(下) 炉跡検出状況	105
図版 6	1号炉跡半截状況 1号炉跡完掘状況	106
図版 7	1号炉跡の竈部 1号炉跡の煙道孔	107
図版 8	2号炉跡 焚き口方向より 2号炉跡 竈方向より	108
図版 9	2号炉跡の竈部 2号炉跡の半截状況	109
図版 10	3号(左)・4号(右) 炉跡検出状況 3号炉跡完掘状況	110
図版 11	4号炉跡半截状況 4号炉跡完掘状況	111
図版 12	3号(左)・4号(右) 炉跡半截状況 竪穴建物跡検出状況	112
図版 13	竪穴建物跡掘り下げ状況 竪穴建物跡完掘状況	113
図版 14	石組遺構検出状況と地層 石組遺構検出状況	114
図版 15	道跡完掘状況東側(高位置)より 焼土を含む道跡硬化面	115
図版 16	柱穴検出状況(D-4区) 柱穴検出状況(C-5区)	116
図版 17	ピット89と青磁碗検出状況 ピット89断面と青磁碗出土状況	117
図版 18	溜池遺構検出状況(中世) 溜池遺構淵部検出状況(中世)	118
図版 19	溜池遺構底部(中世) 溜池遺構中央部近く(中世)	119
図版 20	水田遺構の検出状況(近世) 水田層断面状況(近世)	120
図版 21	水田畦石組(近世) 水田面と畦道石組(近世)	121
図版 22	近世土坑検出状況 近世水田と畦(7T)	122
図版 23	池底の泥炭と礫層(7T) 池の2段底縁(17T) 池の沈殿層と近世畦盛土(7T) 池の北縁(4T) 池の南縁(24T) 池の北西縁(5T)	123
図版 24	池底と北東縁(1T) 池の北縁(19T) 池の沈殿層(13T) 池の南東縁(旧14T) 池の北東縁(18T) 池の南東沈殿層(旧13T)	124
図版 25	縄文時代出土遺物(1)	125
図版 26	縄文時代出土遺物(2)	126
図版 27	縄文時代出土遺物(3)	127
図版 28	縄文時代出土遺物(4)	128
図版 29	中・近世出土遺物(1)	129
図版 30	中・近世出土遺物(2)	130
図版 31	中・近世出土遺物(3)	131
図版 32	中・近世出土遺物(4)	132

图版 33	中·近世出土遺物	(5)	133
图版 34	中·近世出土遺物	(6)	134
图版 35	中·近世出土遺物	(7)	135
图版 36	中·近世出土遺物	(8)	136
图版 37	中·近世出土遺物	(9)	137
图版 38	中·近世出土遺物	(10)	138

第 1 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下鹿児島国道事務所）は、南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）に照会した。この計画に伴い、県文化財課が平成 18 年 6 月に計画路線の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、7 か所の遺物散布地及び発掘調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、鹿児島国道事務所・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）の三者の協議に基づき、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、鹿児島国道事務所と鹿児島県教育委員会との間で委託契約が結ばれ、事業着手前に発掘調査を実施することになった。

これを受けて、平成 19 年度から計画的かつ継続的に各遺跡の発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は県埋文センターが実施した。

本書で報告する遺跡は 7 か所の遺跡のうち、山仁田遺跡の 1 遺跡である。

第 2 節 平成 21 年度の調査

1 調査概要

発掘調査は平成 22 年 1 月 5 日～平成 22 年 1 月 28 日に行った。調査面積は 228㎡である。調査の結果、縄文時代早期、中世～近世に相当する遺物、及び近世に相当する水田遺構が確認された。遺物の多くは調査範囲の境界線にあたる東端の台地縁辺部で出土する傾向がみられた。

2 調査体制

事業主体

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所

調査主体

鹿児島県教育委員会

企画・調整

鹿児島県教育庁文化財課

調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	山 下 吉 美
調査企画	〃	次 長 兼 総 務 課 長	齊 藤 守 重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青 崎 和 憲
	〃	調 査 第 二 課 長	彌 榮 久 志
	〃	主 任 文 化 財 主 事 兼 調査第二課第二調査係長	富 田 逸 郎
調査担当	〃	文 化 財 主 事	抜 水 茂 樹

	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	田 畑 哲 治
	〃	文 化 財 主 事	市 村 哲 二
事務担当	〃	総 務 係 長	紙 屋 伸 一
	〃	主 査	鳥 越 寛 晴

3 調査経過（日誌抄より）

平成 22 年 1 月 5 日～1 月 8 日

駐車場の整備や除草など遺跡周辺の環境整備を行う。調査は第 1～第 4 トレンチを設定し、表土剥ぎを行い、掘り下げていくところから始める。第 1 トレンチを完掘後、包含層の深さと旧地形を確認し、写真撮影を行い、トレンチ配置図を作成する。

平成 22 年 1 月 12 日～15 日

第 5、第 6 トレンチを設定し、第 2～第 6 トレンチの掘り下げを行う。第 2 トレンチを完掘後、包含層の深さと旧地形を確認し、写真撮影を行い、トレンチ配置図を作成する。

降雪のため、2 日間、作業を中止する。

平成 23 年 1 月 18 日～22 日

第 7～第 10 トレンチを設定し、第 3～第 10 トレンチの掘り下げを行う。第 5、第 8、第 10 トレンチを完掘後、包含層の深さと旧地形を確認し、写真撮影を行い、トレンチ配置図を作成する。第 6 トレンチの壁部分から土師器の埴底部が出土した。第 4 トレンチでは土師器片が出土し、第 7、9 トレンチでも土師器片が出土したため、第 4、第 7、第 9 トレンチをつなげる形で拡張した。その結果、第 7 トレンチ拡張部において滑石製の石鍋の口縁部と土師器のほぼ完形に近い杯が、第 9 トレンチ拡張部から中世の時期と思われる白磁片や近世以降の染付片などが出土した。

平成 23 年 1 月 25 日～1 月 28 日

第 11～第 15 トレンチを設定し、掘り下げを行う。第 11～第 15 トレンチを完掘後、包含層の深さと旧地形を確認し、写真撮影を行い、トレンチ配置図を作成する。第 3 トレンチでは、近世から近代にかけての水田跡と見られる遺構が検出された。写真撮影を行い、遺物を取り上げ、遺物出土状況図を作成する。

第 3 節 平成 22 年度の調査

1 調査概要

21 年度の調査の結果をふまえ、平成 22 年 5 月 6 日～9 月 28 日の期間に本調査を実施した。その結果、縄文時代早期、中世から近世にかけての遺構・遺物が出土した。調査の経過については日誌抄をもってかえる。

2 調査体制

事業主体 国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	山下 吉 美
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中 明 成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	中村 耕 治
	〃	調査第二課長	井ノ上 秀 文
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	鶴田 静 彦
	〃	文化財主事	抜水 茂 樹
調査担当	〃	文化財主事	光 永 誠
	〃	文化財調査員	花田 寛 典
事務担当	〃	総務係長	大園 祥 子
	〃	専 門 員	鳥越 寛 晴

3 調査経過（日誌抄より）

平成 22 年 5 月

事務所を設置し、備品を搬入する。幅杭を確認し縄張りを行う。グリット設定のためのセンター杭を探す。除草などの作業環境の整備を行う。C・F-5～8区の調査から始める。重機で表土を剥ぎ、その後、第1トレンチから第3トレンチを設定し調査を行う。周辺の多くの部分が宅地造成を受けていることを確認する。C・D-2～5区内の包含層の残りの状況を確認するために、第3トレンチを拡張し、第4トレンチ、第5トレンチを設定し調査を行う。第5トレンチ内のC-5・6区で1号炉跡を検出する。1号炉跡の検出状況を写真撮影し、周辺を拡張調査する。第1トレンチから第3トレンチの写真撮影を行い、配置図を作成する。第4トレンチを掘り下げ、土層を確認する。ベルトを設定して周辺の全面調査を行う。C・D-11区の調査のため、第6トレンチを設定し調査を行う。

平成 22 年 6 月

第3トレンチを掘り下げ下層確認を行う。C～F-1～5区のⅡ層掘り下げを行う。D-3区で集石遺構を検出し、写真撮影や実測を行う。C-5区で2号炉跡を検出し、写真撮影や実測を行う。梅雨に入り実測が困難な状況になり、雨対策をとり、1号・2号炉跡の実測を一旦中断する。C・D-11区に設定した第6トレンチの調査を行う。C～F-9～11区に第7トレンチを設定後、調査を始め、現代の水田跡を検出する。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。C・D-14～17区を調査のため、第8トレンチを設定する。表土の下に水性堆積層が広がっていることを確認する。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。H・I-17・18区の調査を行うために、第9トレンチを設定し調査を行う。梅雨に入り、水が湧いてきたためⅢ地区の調査を一旦中断する。C～H-20～23区を調査するため、第10～12トレンチを設定し調査を行う。第10トレンチを完掘する。表土の下に水性堆積層や基盤層を確認する。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。E～G-2～5区を調査するため、第13～16・18・19トレンチを設定する。各トレンチとも完掘する。造成の状況や包含層の有無、周辺の土層の様子について理解を深める。写真撮

影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。D・E-8・9区を調査するため、第17トレンチを設定し掘り下げる。近世以降の造成の跡を確認する。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。G・H-2～4区の調査のため、第20トレンチを設定し掘り下げる。旧地形の斜面の状況を確認する。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。E・G-13・14区の調査のため、第22トレンチを設定し掘り下げる。

平成22年7月

梅雨が明け、1・2号炉跡の検出作業を再開し、写真撮影、実測を行う。G・H-2～4区の第21トレンチの調査を行う。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。E・G-13・14区の第22トレンチを拡張調査したところ、3号・4号炉跡を検出する。C～E-1～4区の全面調査を行う。E-2区で押型文土器が出土し、写真撮影を行う。C・E-1・2区で中世の道跡を検出する。C-2区で竪穴建物跡を検出する。C～E-1～7区のⅢ～Ⅴ層の掘り下げ、ピットを多数検出する。D-2区より、ホルンヘルスのスクレイパーと安山岩のスクレイパーが出土する。C～E-3～6区のⅣ層コンター図を作成する。C～H-20～23区の第11・12・23トレンチを人力で表土を剥いだところすぐに地山が出てくる状況である。(F～H-20～23区の範囲は宅地造成のため、包含層の上部が削られていることが分かる。)第23トレンチを写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。H・I-17・18区の第9トレンチの調査を再開し、近現代の水田跡を検出し、写真撮影を行う。C・D-11区に設定した第6トレンチを完掘、写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。(地層からラミナ現象が観察でき、周辺地形の理解が深まる。)D・E-21・22に設定した第12トレンチを完掘し、写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。(D～F-20～22区の範囲は宅地造成のため、包含層の上部が削られていることが分かる。)E・G-13・14区の第22トレンチの北側半分を写真撮影し、トレンチ配置図を作成し一部埋め戻しを行う。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。(G～I-2～4区の範囲は宅地造成のため、包含層の上部が削られていることが分かる。)E～H-12・13の調査のため、24トレンチを設定し掘り下げる。C・D-1～3区とC・D-2～4区の遺物を取り上げる。

平成22年8月

1号・2号炉跡の燃焼部の調査を行う。C～E-1～7区のⅠ～Ⅳ層の調査を行う。C～E-1～4区の土層図を実測する。C-2区で検出された竪穴建物跡の床面検出状況を写真撮影し実測を行う。C～E-1・2区で中世の道跡を検出し、写真撮影、実測を行う。D-1区で道跡の硬化面に焼土跡を検出し、写真撮影、実測を行う。道跡周辺の地形図を作成する。H・I-17・18区より中世の水田遺構を検出する。滑石や青磁等の遺物が出土する。G・H-17～19区を重機による表土剥ぎを行い、調査範囲を拡張する。E・F-14・15区の調査を進める。3号炉跡、4号炉跡の検出作業、写真撮影、実測を行う。C～E-1～7区のピット群の検出作業、半裁、写真撮影、実測を行う。D-3区から溝状遺構を検出し、写真撮影、実測を行う。G～I-17～19区のⅠ～Ⅲ層調査を行い、中・近世の水田を検出する。G～I-14区のⅠ～Ⅲ層の調査を行い、遺構がないことを確認する。E～G-11・12区のⅠ～Ⅳ層の調査、写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。E～H-12・13区の第24トレンチを完掘する。水性堆積の状況を確認する。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。H-22・23区の第11トレンチの土層図を実測し、埋め戻す。

造成による包含層の削平の状況や斜面の土層断面を確認する。C・D-1～3区の遺物を取り上げる。

平成22年9月

3号炉跡、4号炉跡の検出作業、写真撮影、実測を行う。D・E-8・9区の第17トレンチを完掘する。写真撮影後、トレンチ配置図を作成し埋め戻す。H・I-17・18区より検出された中・近世の水田遺構を調査し、写真撮影、実測を行う。C-2区で検出された竪穴建物跡の床面検出状況、完掘状況を写真撮影し実測を行う。C～E-1・2区のⅡ～Ⅳ層の調査をする。D-2・3区の土層図を実測する。C～E-1～7区のⅢ～Ⅴ層を調査する。ピット群の位置図を作成し、周辺の地形図を実測する。ピット89から青磁が出土する。写真撮影、半裁、実測を行う。G～I-17～19区水田遺構から溝跡1条を検出する。土師器や青磁、滑石等の遺物も出土する。写真撮影・実測を行う。C・D-2～3区とG・H-17・18区、E-2区の遺物を取り上げる。C・D-2・3区にトレンチを入れ、下層確認を行う。配置図を実測し、埋め戻す。調査終了に向け、調査区内を一部埋め戻す。調査終了日はプレハブ周辺の環境整備と撤収作業を行う。

第4節 報告書作成作業

1 調査概要

報告書作成作業は、平成23年4月7日～平成24年3月30日まで、鹿児島県立埋蔵文化財センターにて行った。

2 調査体制

作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	寺 田 仁 志
作成企画	〃	次 長 兼 総 務 課 長	田 中 明 成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井 ノ 上 秀 文
	〃	調 査 第 二 課 長	富 田 逸 郎
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	鶴 田 静 彦
作成担当	〃	文 化 財 主 事	彌 榮 久 志
	〃	文 化 財 主 事	光 永 誠
事務担当	〃	総 務 係 長	大 園 祥 子
	〃	主 事	岡 村 信 吾

報告書作成指導委員会 平成23年11月22日（火）

報告書作成検討委員会 平成23年11月29日（火）

3 調査経過（日誌抄より）

- 4月 注記，遺物選別・分類作業，遺物接合作業・復元作業，石器実測，原稿執筆
- 5月 土器実測，石器実測，石器トレース，遺構トレース，レイアウト，原稿執筆
- 6月 土器トレース，拓本作成，原稿執筆
- 7月 遺物接合作業・復元作業，土器実測，拓本作成，土器トレース，遺構トレース，分布図作成，レイアウト，原稿執筆
- 8月 復元作業，原稿執筆
- 9月 レイアウト，原稿執筆
- 10月 写真撮影，原稿執筆
- 11月 レイアウト，原稿執筆
- 12月 レイアウト，原稿執筆，原稿チェック
- 1月 校正，図面整理，写真整理，遺物整理
- 2月 校正，遺物整理・収納
- 3月 校正，納品，遺物整理・収納



接合作業



注記 実測 トレース



復元作業



拓本作成

第5節 川内隈之城道路建設に伴う各遺跡の概要

南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴い、県文化財課が行った埋蔵文化財の分布調査の結果、遺物散布地及び発掘調査の必要なことが判明した地点は以下の7か所である。

- 1 山口遺跡……薩摩川内市都町、標高約50mの丘陵地に位置する。旧石器時代の遺物が出土したほか、縄文時代早期の塞ノ神式土器、磨石、石鏃、古墳時代の成川式土器、中世の青磁、白磁が出土した。また古代の柱穴や焼土域が検出された。
- 2 山仁田遺跡……薩摩川内市青山町の平地に位置する。遺跡の標高は約27mで、川内川の支流である隈之城川中流域の左岸の微高地上に立地し、河床からの比高差は約5～10mである。中世の土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋、近世の染付や薩摩焼が出土した。
- 3 堀之内遺跡……薩摩川内市青山町、標高約50mに所在する。旧石器時代の剥片尖頭器、縄文時代早期から晩期にかけての土器、石匙、石皿、磨石や石鏃が出土した。古墳時代の散石遺構、焼土域も検出され、同時代の成川式土器が出土している。古代の柱穴、溝が検出された。また土師器や須恵器も出土している。中世では、柱穴などの遺構や青磁、白磁が出土している。
- 4 上新田遺跡……薩摩川内市青山町の平地に所在する。標高は約34mで、川内川の支流である木場谷川中流域の左岸の傾斜面上に立地する。縄文時代の中原式土器、黒川式土器、磨製石斧、弥生時代の入来式土器、須玖式土器、黒髪式土器、竪穴住居跡、古墳時代の成川式土器、古代の土師器、石垣や掘立柱建物跡が出土した。
- 5 川幡遺跡……薩摩川内市宮里町に所在する。標高約12～20mの丘陵地の北斜面に立地している。土師器や須恵器が出土した。また、近世に棚田や畑として利用されていた時に構築されたと思われる石垣が良好な状態で残っていた。
- 6 西之城遺跡……薩摩川内市高江町に所在する。標高約6mの微高地上に立地している。周辺には宅地や水田、畑が広がっている。中近世の土師器や青磁、白磁のほか、石臼が出土した。
- 7 川骨遺跡……薩摩川内市高江町に所在する。標高約3～4mの川内川下流左岸の低地に立地し、遺跡の東側には猫岳があり、周辺には宅地並びに水田や畑が広がっている。弥生時代後期から古墳時代の土器、古代の人面墨書のほか、中世から近世の遺物が出土した。遺構は、弥生時代後期から古墳時代13か所の土器集中、古代から近世の掘立柱建物跡、近世から近代の鍛冶炉跡、溝跡、水田遺構などが検出された。

表 1 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表（川内隈之城道路）

番号	遺跡名	所在地	調査対象面積 (m ²)	調査期間	時代	概要
1	山口	薩摩川内市 都町	15,200 (調査中)	H21.11~22.3 H22. 5~23.2	旧石器 縄文 古墳 古代 中世~近世	細石刃核, 細石刃 集石, 落し穴, 前平式土器, 吉田式土器, 石坂式土器 手向山式土器, 塞ノ神A式土器, 山形押型文土器, 阿 高式土器, 市来式土器, 石鏃, 敲石, 磨石, 石皿, 石匙, スクレイパー 成川式土器 土師器 掘立柱建物跡, 土坑, 鍛冶炉, 残滓遺構, 焼土遺構, 畠 畝溝遺構, 土師器, 青磁, 白磁, 鉄滓, 墨書土器, 土錘, 染付, 天目, 小玉, 唐津焼
2	山仁田	薩摩川内市 青山町	14,100	H22. 1 H22. 5~22.9	縄文 中世~近世	押型文土器, 石鏃, 石匙, 敲石, 石皿 掘立柱建物跡, 炉跡, 石組遺構, 道跡, 柱穴, 竪穴建物 跡, 溜池遺構, 水田遺構, 土師器, 白磁, 青磁, 青花, 石 鍋, 天目, 瓦質土器, 輪の羽口, 染付, 薩摩焼, 窯道具 (本報告書)
3	堀之内	薩摩川内市 青山町	9,700 (調査中)	H21.12~22.1 H22.10~23.2	旧石器 縄文 弥生 古墳 古代~中世 近世	剥片尖頭器 集石, 吉田式土器, 条痕文土器, 曾畑式土器, 剥片尖頭 器, 石鏃, 石斧, 石匙, 磨石, 磨製石斧, 台石, 砥石, スク レイパー 黒髪式土器 土坑, 成川式土器 掘立柱建物跡, 落し穴, 溝状遺構, 土師器, 須恵器, 青 磁, 白磁, 青花 染付, 薩摩焼
4	上新田	薩摩川内市 青山町	5,800	H21.11~22.2 H22. 5~ 22.9	縄文 弥生 古代~中世 近世	集石, 前平式土器, 吉田式土器, 石坂式土器, 政所式土 器, 中原式土器, 松山式土器, 黒川式土器, 石鏃, 磨石, 敲石, 石皿 竪穴住居跡, 入来式土器, 黒髪式土器, 須玖式土器, 磨 製石鏃, 磨製石斧, 砥石, 石皿 掘立柱建物跡, 土坑, 石列, 溝跡, 土師器, 須恵器, 紡錘 車(石製・土製), 耳皿 古道跡, 陶磁器, 古銭
5	川 幡	薩摩川内市 宮里町	4,500	H21. 2 H21.11	古代 近世	土師器, 須恵器 棚田石垣
6	西之城	薩摩川内市 高江町	7,000	H21. 2・3	中世~近世	中世土師器, 輸入陶磁器(白磁・青磁・青花) 瓦質土器(播鉢, 火鉢), 石臼, 簪
7	川 骨	薩摩川内市 高江町	12,800	H19. 9・10 H20.5~21.3	弥生~古墳 古代 中世~近世	土器集中, 成川式土器 畝間状遺構, 人面墨書土器, 土師器, 須恵器, 瓦 掘立柱建物跡, 溝状遺構, 鍛冶炉跡, 水田遺構, 井戸 跡, 土坑, 石垣, 青磁, 白磁, 青花, 染付, 肥前系陶磁器, 薩摩焼, 鉄滓, 羽口, 埴塼, 瓦質土器, 瓦, 砥石



第1図 薩摩川内都IC～高江IC間遺跡位置

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1 薩摩川内市の地形

薩摩川内市は、平成16年10月12日に川内市・樋脇町・入来町・東郷町・祁答院町・里村・上甌村・下甌村・鹿島村の1市4町4村が合併してできた総面積68,350km²の市である。鹿児島県の北西部、北緯31度49分、東経130度19分に位置し、東シナ海に面し、北では阿久根市、南ではいちき串木野市・鹿児島市に接している。川内川が市域を貫流し、古代以来陸上・水上交通の要所であり、現在も北薩地方の経済・商業の中心地である。

薩摩川内市は北部に出水山地、東部に上床山地、南部に高江山地・冠岳山地と三方を山地で囲まれた盆地状の地形をなしている。そして、中央部に熊本県白髪岳に源を発し、九州でも有数の長流である川内川とその支流によって形成された沖積平野が広がる。この沖積平野は川内平野、川内盆地と呼ばれ、山地・台地が多く平野の少ない南九州において、大口盆地、出水平野、肝属平野などと肩を並べる穀倉地帯である。また、川内川は下流で大きく川幅を広げ、河口の両岸には川内砂丘を発達させている。川内川の下流域の地質は、おおむね安山岩であるが、旧石器時代（約1万年以前）に始良カルデラから噴出した火砕流によって造られたシラス台地が散在している。権現原台地や国分寺台地のような平野を取り巻くように発達している低いシラス台地は宅地や畑地として利用されている。そのようなシラス台地は、河川による浸食のため、狭小な谷底平野が発達するとともに、台地の縁辺部はシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し、急崖をなして沖積平野へと移行する。

川内川の両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約8kmに渡って自然堤防が形成され、自然堤防が最も発達した大小路町、向田町周辺は現在の薩摩川内市街地の中心部である。過去の発掘調査では、自然堤防上で多くの遺跡が発見され、古代以来人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。この付近の沖積平野では、高城川、平佐川、隈之城川などの支流によって、狭小な谷底平野が発達している。この中の1つに隈之城町、宮崎町、百次町に広がる隈之城平野がある。この平野は、薩摩川内市の南部に位置し、東を権現原大地、西を高江山地から延びる平ノ山などの平坦な台地に挟まれ南北に長く、川内川方向へ開けている。隈之城川の支流である百次川や勝目川、木場谷川が流れ、薩摩川内市の中でも有数の米所となっている。平野を望む周辺の高台には旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が発見されており、山仁田遺跡もその中の1つである。

2 遺跡周辺の地形

山仁田遺跡は隈之城平野の西端の薩摩川内市青山町に位置する。遺跡の標高は約27mで、川内川の支流で隈之城川のさらに支流である木場谷川左岸の微高地上に立地し、河床からの標高差は約5～10mである。

遺跡の北側は谷間になっており、沖積平野が広がり水田や田畑として利用されている。その北には陸上自衛隊川内演習場のある山地が広がり、山地を越えると宮里町の集落や川内川、薩摩川内市街地に達する。遺跡の南側は、沖積平野が広がり水田として利用されている。その南は高江山地と

なっている。山地の始まりの部分に山口遺跡、霜月田遺跡が位置している。遺跡の東側には、すぐそばを木場谷川が流れている。川を越えると沖積平野となっており、水田や田畑として利用されている。平野部に「南城」・「麦城」という別名を持つ総徳城跡、山地部に都城が位置し、中世の城に関する遺跡が集中している。都城跡の一部の都原遺跡は平成12・14年度に調査が行われている。遺跡の西側は沖積平野が広がり、その西は平原山に向けて山地となっている。

第2節 歴史的環境

薩摩川内市は肥沃な川内平野を有し、交通の要所でもあるために古代以来北薩地域において、政治、文化、経済の中心地であった。

川内市教育委員会が1988年から1990年に行った分布調査では、旧石器時代から江戸時代の遺跡が約180か所確認され、途切れることなく古代人の足跡をたどることができる地である。

旧石器時代

薩摩川内市は、馬立遺跡において県内で初めて旧石器時代の尖頭器が発見され、本県における旧石器時代研究の出発点となった地域である。これまでの発掘調査では、成岡遺跡、上野城・大原野遺跡、前畑遺跡から剥片尖頭器、ナイフ型石器、細石刃などが発見された。中でも、成岡遺跡・西ノ平遺跡からは、南九州特有の加治屋園型細石核が出土している。

縄文時代

縄文時代になると、西海岸を介した交流の活発さを示す遺物が多く、多くの遺跡で発見されている。前畑遺跡では中九州系の土器である中原式土器や、北陸地域に特徴的な新崎式土器が出土し、縄文時代早期にかなり広範囲な交流があったことが分かってきた。

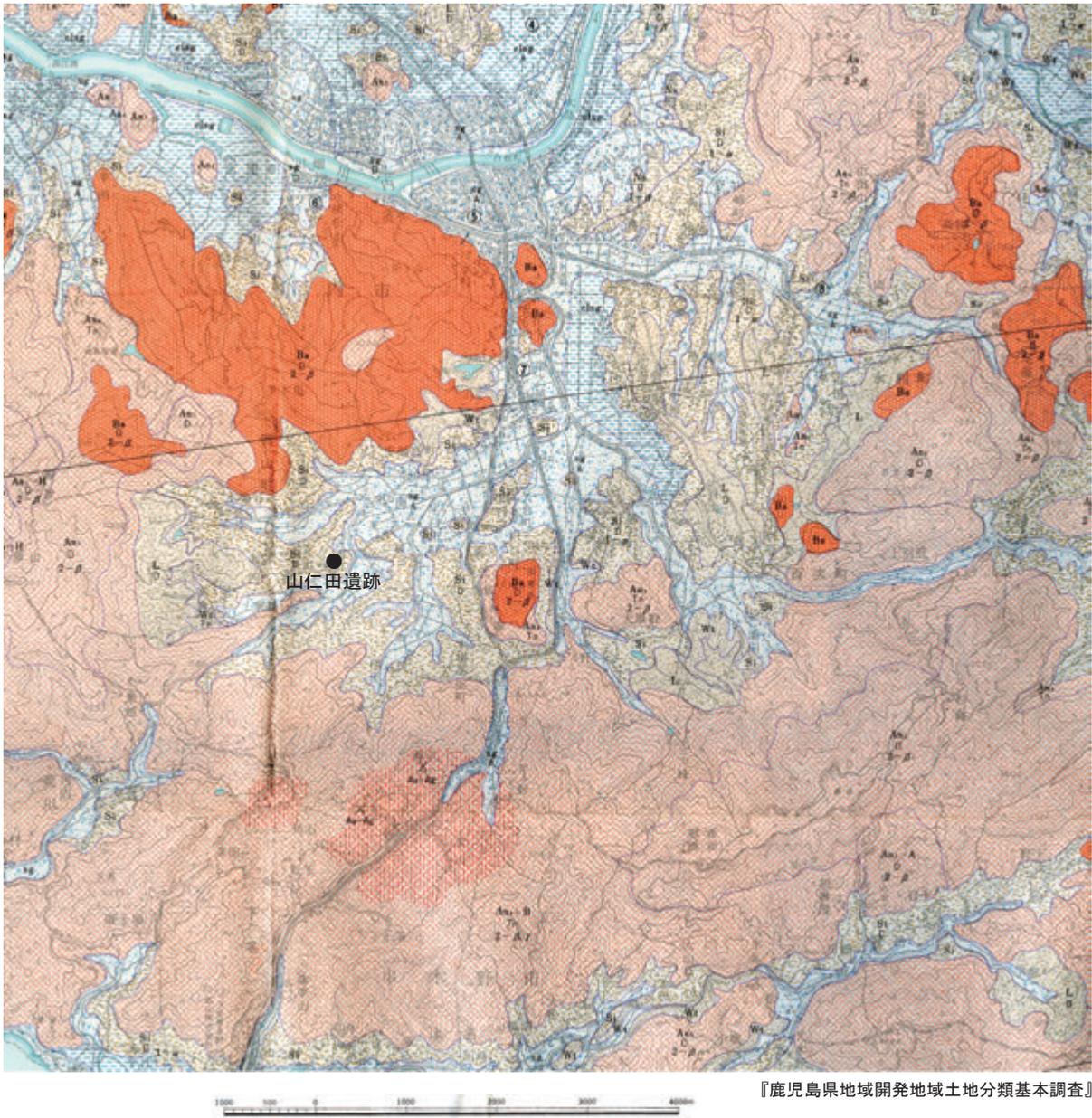
縄文時代前期は百次町大原野遺跡、前畑遺跡で轟B式土器が出土しているのみであるが、縄文時代後期になると遺跡数が増加してくる。代表的な遺跡として土坑墓や骨角器が発見された陽成町麦之浦貝塚や百次町楠元遺跡がある。両遺跡とも在地の土器である市来式土器に伴って、多くの鐘崎式土器や北久根山式土器が出土しており、東シナ海に面する川内の地理的特徴をよく反映している。上野城遺跡でも市来式土器が出土し、川内平野における縄文時代の様相が徐々にわかってきている。また、川骨遺跡の川砂堆積層からは縄文時代後期の土器が出土している。

縄文時代晩期になると遺跡数は減少するものの、城上町計志加里遺跡では黒川式土器と縄文晩期の壺型土器が出土しており、弥生時代を担う人々の存在を確認することができる。

弥生時代

弥生時代になると、川内川下流域の平野部や沼沢地が新たな生産拠点として成立してくる。以前から、外川江遺跡の後期の大型甕や内行花文鏡、麦之浦貝塚の後漢鏡、若宮遺跡出土の石包丁・石鎌等は知られ、この地域の重要性については指摘されていたが、楠元遺跡、京田遺跡、大島遺跡、川骨遺跡等の調査成果はその指摘や重要性を具体的に示すこととなった。

楠元遺跡では、弥生時代終末の集落跡と、それに隣接する低地に水田跡が発見されている。また、京田遺跡の下層からは、弥生時代中期後半の水田跡が発見され、黒髪式土器が出土した。この時代の南九州の水田は伝播以来、自然の沼沢地等を利用した湿田が一般的とされる。発見された水田も湿田で、地形に左右され不定型で小規模の水田跡が確認されている。これらの遺構に伴って、京田



凡例 Legend

未固結堆積物
Unconsolidated sediments

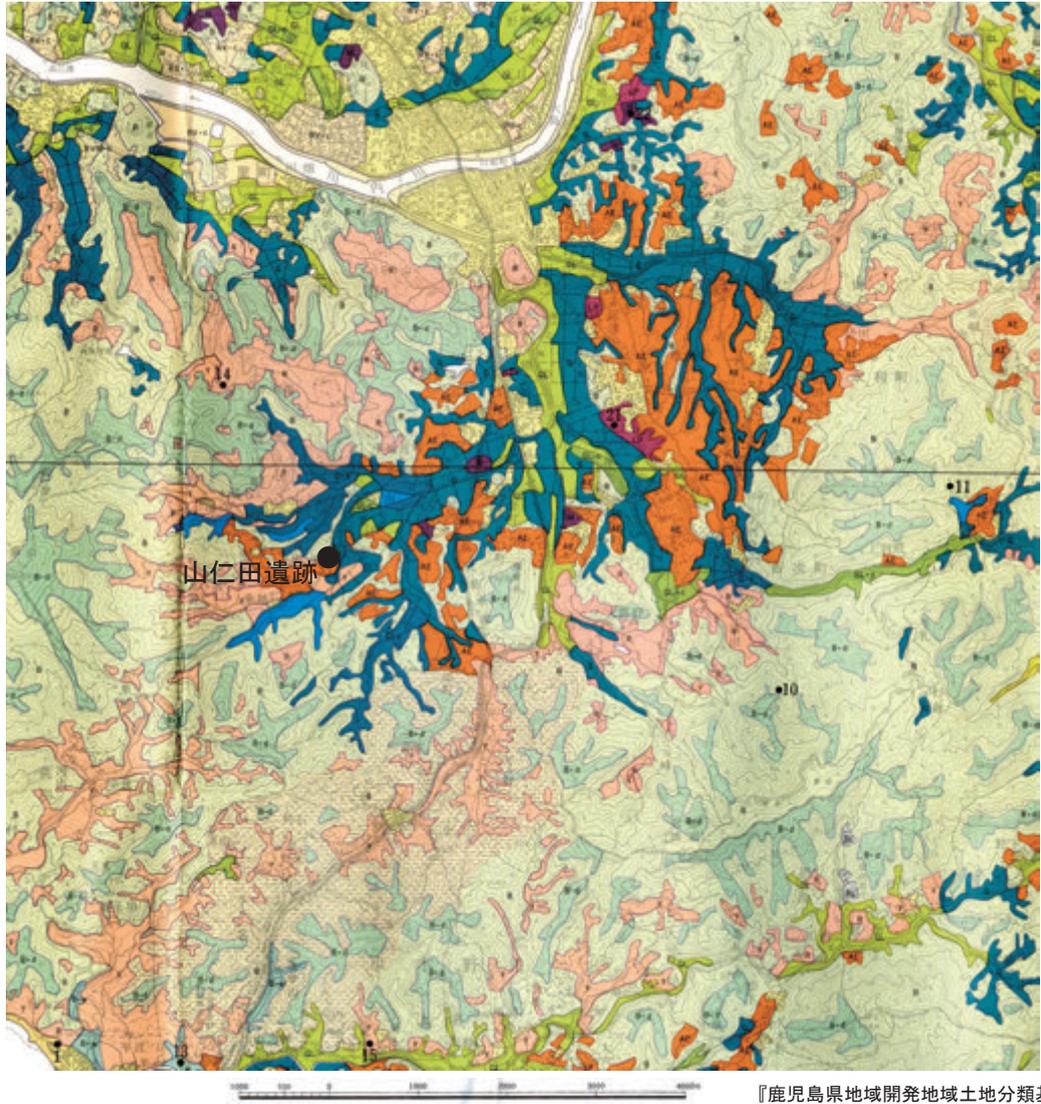
-  粘土・砂・礫
Clay, sand and gravel
-  砂
Sand
-  砂・礫
Sand and gravel

火山性岩石
Volcanic rocks

-  凝灰岩・凝灰質頁岩
Tuff, tuffaceous shale

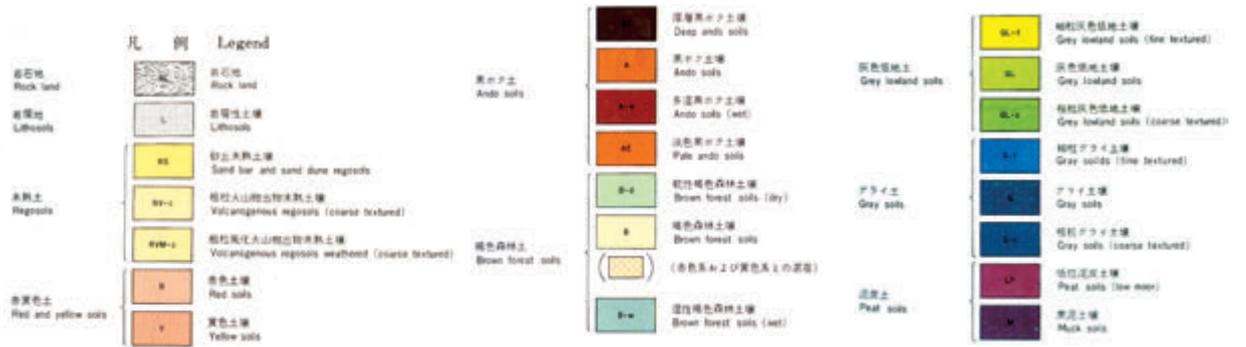
-  L ローム
Loam
-  Na 二次シラス
"Niji Shirasu"
-  Si シラス
Shirasu
-  Wt 溶結凝灰岩
Welded tuff
-  Ry 流紋岩質岩石
Rhyolitic rocks
-  An-s 安山岩質岩石 (L: 溶岩 Lava B: 凝灰角礫岩
Tuff-breccia H: 角閃石安山岩 Holshblend
andesite A: 集塊岩 Agglomerate)
-  Ba 玄武岩質岩石
Basaltic rocks

第2図 遺跡周辺表層地質



『鹿児島県地域開発地域土地分類基本調査』

土層断面図



第3図 遺跡周辺土壌

遺跡と楠元遺跡からは、木製鋤や木製鍬の農具を中心に豊富な木製品が発見されている。柄は、南九州弥生時代の伝統をそのまま継承した曲柄と膝柄である。鍬には、平鍬・三叉鍬・横鍬があり、鋤は組み合わせ式で、木製品もあることから、遺跡内で農具の生産・加工も行われていたと考えられる。また、京田遺跡では網杵、楠元遺跡では丸木弓・容器も発見され、生産活動の一端を覗かせている。発見された種子のDNA分析の結果、熱帯ジャポニカとコムギが検出され、稲作の起源や生業を解明する手がかりを提供している。

これら弥生時代の遺跡の調査は川内地域における稲作の広がりを示すだけでなく、南九州における稲作文化の解明に繋がる重要な発見となった。大島遺跡からは水田跡は検出されていないが、石包丁が出土しており、水稲稲作を生業とする生活を営んでいたことがわかる。また、弥生時代前期から終末にかけての土器や、須玖式系土器、黒髪式系土器などが出土しており、他地域との活発な交流や川内川流域の弥生土器の型式変化を知ることのできる重要な資料である。中期以降は遺跡数が増え、前述のとおり五代町外川江遺跡では弥生時代後期の内行花文鏡が、麦之浦貝塚では後漢鏡片が出土し、青銅器文化の定着しない南九州弥生社会の中では特異な地域である。

古墳時代

川内平野と肝属平野一帯は、高塚を築造しない本県の中で古墳文化が波及し、定着する注目すべき地域である。特に川内平野は在地性の強い地下式板石積石室と畿内系の高塚古墳が重複し、古墳文化周辺部の様相をよく現している。高塚古墳としては陵墓に指定されている可愛山稜がある。川内川河口の船間島古墳は竪穴式石室構造の円墳、河口5 km上流の御釣場古墳では石蓋土坑墓と箱式石棺墓が残されている。横岡古墳は、10基の地下式板石積石室墓群と土坑墓群がある古墳として知られており、地下式板石積石室墓から副葬品として蛇行剣が出土している。また、平成21年には天辰町で竪穴式石室をもつ天辰寺前古墳が発見され注目されている。大島遺跡では、大刀・剣・金環が副葬された土坑墓が検出されている。

弥生時代に引き続き、楠元遺跡では古墳時代においても水田が造られる。しかし、弥生時代の自然地形利用型の水田とは異なり、灌漑施設を備えた水利管理型水田である。古墳時代の集落については調査例が少ないが、成岡遺跡では19基、麦之浦貝塚では16基の竪穴住居跡が発見されている。

古代

大宝元年(701年)に大宝律令が制定され、それに伴って702年には御陵下町・国分寺町に薩摩国府が置かれ、さらに奈良時代末には薩摩国分寺が建立され、この地は薩摩国における政治・文化の拠点となった。数回にわたる国分寺跡の発掘調査によって、寺域、伽藍配置や平安時代と鎌倉時代の再建を経た事実が判明し、大和川原寺式伽藍配置であることも明らかにされた。また、国分寺跡の北方約1 kmの地点で国分寺創建時の瓦などを焼いたロストル式瓦窯の形態をもつ鶴峯窯跡が発見された。

2002年度に発掘調査が行われた京田遺跡は、薩摩国分寺跡が立地する台地に隣接する低湿地に立地している。調査では、告知札と呼ばれている木簡が県内で初めて出土した。木簡には「嘉祥三年」(西暦850年)という年紀が記され、その内容は、郡司から在地の有力者に水田の差し押さえを告知する記述であった。古代の地方行政のあり方や、土地支配を考える上で重要な発見となった。また、川骨遺跡で出土した墨書土器も9世紀第三四半期に相当するものであると考えられ、同時代

における祭祀の様相の一端を垣間見ることができる。

薩摩国分寺跡と川内川の間位置する大島遺跡は、越州窯系青磁や緑釉陶器、風字二面硯、石帯が出土している。また、国分寺台地から谷を一つ挟んだ台地上に立地する計志加里遺跡では、方形周溝墓や道跡が発見され、両遺跡とも薩摩国府と関係の深い遺跡であると考えられる。

そのほか、西ノ平遺跡からは、土師器や須恵器のほかに硯・墨書土器・刻書土器・焼塩土器・帯金具などが出土しており、役所的な性格をもつ遺跡であると考えられる。鍛冶屋馬場遺跡は、10世紀頃に鍛冶を専門に行う人々が生活していた遺跡である。古代に始まった鍛冶は中世から近世にかけても引き続き行われており、川内川を利用した鉄生産の場であった。

蔵骨器を使用した墓制としては、土師器を使用した屋形原遺跡、須恵器を使用した都原遺跡などがあり、中には、越ノ巣遺跡でみられるような火葬墓もみられる。

中世

鎌倉時代から室町時代にかけては、島津氏、渋谷氏などの下向してきた鎌倉武士に、在地領主である武光氏、薩摩氏を加え川内は領地支配をめぐる争いが絶えることがなかった。これらの諸氏は南北朝の動乱を挟んで激しく争い、それに伴って、碓山城や二福城（隈之城）、高江城、百次城など多くの山城が築かれた。山仁田遺跡の周辺でも、時代不詳ではあるが、総徳城や都城など城跡があり、二福城の支城という説もある。

二福城は鎌倉時代建久9年（1198年）薩摩太郎忠友の居城である。それから後、応永26年（1419年）永利城で破れた総州家島津忠朝は二福城に入った。その後を追ってきた入来院氏の援軍奥州家島津久豊はその子忠国をして忠朝を攻めさせた。抵抗すること2年に及んだが、忠朝は己の系統の滅びることを憂えて降伏した。その後、入来院氏の支配することになったが、元亀元年（1570）入来院重嗣はこの地を奥州島津貴久に献じている。

上野氏の居城である上野城跡の調査では、多くの掘立柱建物跡や方形竪穴建物跡、畠跡、土坑墓などが検出され、白磁や青磁なども出土している。また、土坑の中からは木の実やオオムギ・コムギ・イネが発見されており、当時の人々の食生活の一端を垣間見ることができる。

これらの戦乱は戦国時代末期の元亀元年（1570年）に島津氏による三州統一と同時に終息を向かえる。その後、天正15年（1587年）豊臣秀吉の島津追討に伴い、平佐城において激しい戦いが繰り広げられた。秀吉軍が薩摩攻めの際に、猫岳をはじめとして周辺の山などに塁を築き数万の大軍を配置したと言われており、猫岳や猪子岳の頂上には現在も塁跡が残っている。この戦いは、豊臣側と島津側の和睦によって終わりをむかえ、大小路町太平寺には和睦石が残されている。このような争乱の歴史も川内の地理的な重要性を示している。

近世

藩政時代には商業が発達し、中心地の向田町は水陸交通の要衝として賑わった。川内川河口の久見崎には、船手奉行所が置かれ、藩の造船所があった。当時は朝鮮の役の際、薩軍が船出した港として有名である。この役で夫を亡くした婦人によって始められたと伝えられる盆踊り「想夫恋」は、県の無形民族文化財に指定されている。

天明年間（1781～88年）には伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いている。平佐焼と呼ばれるこの磁器は、県内各地に流通し、隆盛を誇った。近年の調査で、作業小屋や石垣、窯の形態



第4図 周辺遺跡地図

表2 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	山仁田	薩摩川内市青山町山仁田	台地	縄文・中世～近世	縄文土器, 土師器, 青磁, 白磁, 滑石製石銅, 薩摩焼	平成21・22年度調査 本報告書
2	総徳城跡	薩摩川内市都町麦・灰原・門前・屋敷田	丘陵	不詳	堀切跡	別称「南城」「麦城」
3	都原	薩摩川内市都町都原・山口	台地	縄文(早)～近世	蔵骨器埋納遺構, 溝状遺構, 土器, 須恵器, 陶磁器	平成12・14年調査
4	山口	薩摩川内市都町山口	台地	縄文～中世	磨石, 石鏃, 成川式土器, 青磁, 白磁	平成21～23年度調査
5	霜月田	薩摩川内市都町霜月田	台地	旧石器～近世	竪穴建物跡, 掘立柱建物跡, 土器, 土師器, 陶磁器	平成12・15年調査
6	藪田	薩摩川内市青山町藪田・藪内	丘陵	古墳～室町	土器, 青磁, 陶器	
7	床並	薩摩川内市青山町床並・岡峯	台地	古墳～室町	土器, 陶器	
8	堀之内	薩摩川内市青山町堀之内・焼居	丘陵斜面	縄文～中世	剥片尖頭器, 石皿, 成川式土器, 土師器, 須恵器, 青磁, 白磁	平成21～23年度調査
9	上新田	薩摩川内市青山町上新田	丘陵端	縄文～中世	磨製石斧, 縄文土器, 弥生土器, 成川式土器, 土師器	平成21・22年度調査
10	麦	薩摩川内市都町麦	低地	縄文～中世		
11	木場原B	薩摩川内市木場茶屋木場原	台地	縄文～室町	石鏃, 土器, 内黒土師器	
12	蕨迫	薩摩川内市木場茶屋蕨迫	台地	古墳～室町	土器, 陶器	
13	木場原A	薩摩川内市木場茶屋木場原	台地	縄文～平安	石鏃, 土器, 内黒土師器	
14	瀬戸山	薩摩川内市木場茶屋町瀬戸山	台地	古墳～近世	土師器, 須恵器, 青磁	
15	四反畑	薩摩川内市尾白江町四反畑	微高地	平安～室町	内黒土師器, 青磁, 染付	
16	集	薩摩川内市中福良町集	台地	縄文～中世	土器, 陶器, 黒曜石	
17	立石B	薩摩川内市中福良町立石	段丘	縄文～中世	土器, 石鏃, 黒曜石	
18	立石A	薩摩川内市中福良町立石	丘陵	縄文～中世	土器, 内黒土師器, 青磁	
19	成岡	薩摩川内市中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	土器, 須恵器, 青磁, (細石刃)	昭和55～59年調査
20	西ノ平	薩摩川内市中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土器, 土師器, 青磁, (細石刃核)	昭和55～59年調査
21	上ノ原	薩摩川内市中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器, 須恵器, 青磁, 染付	昭和55年調査
22	西ノ口	薩摩川内市隈之城町西ノ口	台地	古墳	土器	
23	湯之谷	薩摩川内市隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
24	川 幡	薩摩川内市宮里町川畑	丘陵斜面	古代・近世	土師器, 須恵器, 陶磁器	平成20・21年度調査
25	堀ノ内	薩摩川内市宮里町堀ノ内	微高地	古墳～室町	土器, 須恵器, 青磁, 染付	
26	宮田	薩摩川内市宮里町宮田	微高地	古墳	土器, 須恵器	
27	日吉	薩摩川内市宮里町日吉	微高地	古墳	土器, 須恵器	

が明らかになっている。そのほかに、近世、近代の鍛冶遺跡として古原遺跡、鍛冶屋馬場遺跡がある。このように川内川は、平佐焼きや鍛冶などの生産に関わる原料の搬入と製品の搬出に積極的に利用され、古来より商工業の発展に大きな役割を担ってきた。霜月田遺跡、都原遺跡の南部に位置する木場茶屋町には、藩政時代に藩主が参勤交代などで東上する際の休憩所（茶屋）が置かれた。また、隈之城郷には郷土集落である麓が形成された。両遺跡付近に2007年3月には、南九州西回り自動車道の薩摩川内都インターが完成している。

江戸の藩政期に入ってから溜池の開発が本格化していることが、水神碑から読み取ることができる。山仁田遺跡周辺にも「山仁田溜池」と呼ばれる溜池があったようである。開発年代は不明であるが、4反3畝の溜池面積があり、1町の広さの灌漑面積があったと記録に残っている。現在は廃池になっている。

引用参考文献

- | | | |
|----------------|------|---|
| 鹿児島県教育委員会 | 1975 | 『薩摩国府跡・国分寺跡』 |
| 〃 | 1983 | 「成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』28 |
| 〃 | 1984 | 「外川江遺跡・横岡古墳」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』30 |
| 〃 | 2005 | 『先史・古代の鹿児島（資料編）』 |
| 〃 | 2006 | 『先史・古代の鹿児島（通史編）』 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2002 | 「計志加里遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』38 |
| 〃 | 2002 | 「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39 |
| 〃 | 2003 | 「楠元・城下遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』57 |
| 〃 | 2004 | 「上野城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』68 |
| 〃 | 2005 | 「大島遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』80 |
| 〃 | 2005 | 「京田遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』81 |
| 〃 | 2008 | 「霜月田遺跡・都原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』131 |
| 〃 | 2011 | 「川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』165 |
| 川内市教育委員会 | 1991 | 『麦之浦貝塚』 |
| 〃 | 1991 | 「御釣場古墳（2号墓）」『川内市埋蔵文化財調査報告書』1 |
| 〃 | 1992 | 「川内市文化財基礎調査報告書（埋蔵文化財）」『川内市埋蔵文化財報告書』2 |
| 川内郷土史編纂委員会 | 1975 | 『川内市史 上巻』 |
| 川内市歴史資料館 | 1985 | 『川内市文化財要覧』 |
| 川内郷土史編さん委員会 | 1976 | 『川内の溜池』 |
| 鹿児島県企画部開発課 | 1974 | 『鹿児島地域開発地域土地分類基本調査 川内』 |

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

平成21年度の調査期間は、平成22年1月5日から平成22年1月28日までの実働17日間である。調査対象面積14,100㎡の内の250㎡を調査した。未買収地が多く、制限された中での調査であった。約2～3m幅のトレンチを15か所設定し、遺物包含層の深さ等を確認し、工程の見直しを行った。各トレンチは人力で掘り下げ、一部に重機を使用した。(第5図中の数字だけで書かれているトレンチが、平成21年度の調査時に確認したものである。)遺物の取り上げは道路建設用のセンター杭No.438, 439を基準にして行った。第1, 2, 5, 8, 10～15トレンチでは、包含層の深さを確認した。遺物の出土が確認された第4, 7, 9トレンチは連結して拡張した。(Ⅳ地区)その結果、第7トレンチ拡張部において滑石製石鍋の口縁部とほぼ完形に近い土師器の坏が、また、第9トレンチ拡張部から中世の時期と思われる白磁片や近世以降の染付などが出土した。いずれの遺物も、調査範囲の境界線にあたる東端の台地縁辺部で多く出土する傾向がみられた。

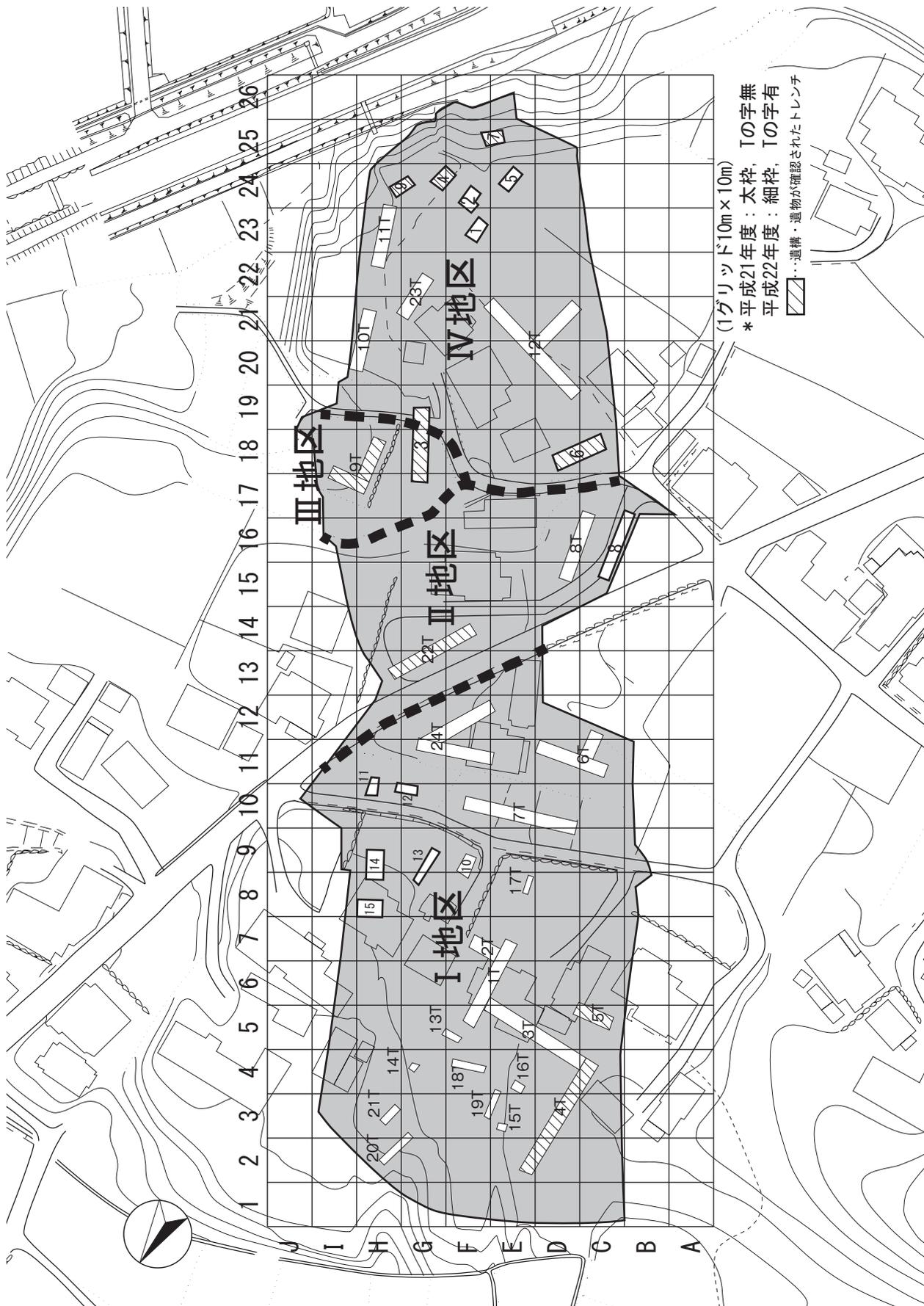
平成22年度の調査期間は、平成22年5月6日から平成23年9月28日までの実働80日間で、延べの作業員数は2,950名である。調査対象面積14,100㎡の内の13,850㎡を調査した。調査に先立ち道路建設用センター杭No.431とNo.434を基準として10m間隔の区画を設定し、南西から北東へA, B, C, D・・・, 北西から南東へ1, 2, 3, 4・・・と呼称した。(第5図)調査はまず調査区内の草払いや危険物の除去等の環境整備から行った。その後、約2～3m幅の先行トレンチを24か所設定し、遺物包含層の有無や広がりを確認した。(第5図中の数字と「T」で書かれているトレンチが平成22年度の調査時に確認したものである。)その後、表土を重機で剥いだ後、人力で掘り下げ調査を行った。第5, 22トレンチから炉跡、第9トレンチから溜池・水田跡の遺構を検出し、第4, 5, 9, 22トレンチから遺物が出土した。

2 遺構の認定と検出方法

精査作業を経て検出されたピットは、形態を実測し、半截や立ち割により埋土を確認し、柱穴か、樹根かを判断した。柱穴の可能性があると判断した場合は、断面図を記録した。溜池遺構については、土手部分の検出や周辺の地形、出土遺物から判断した。水田遺構についてはグライ化した土や溝、出土遺物、石畳の状況から判断した。いずれも出土遺物の取り上げや調査状況の撮影、土層断面実測等を遺構の残存状況に応じて行った。

3 整理作業の方法

遺物の水洗いは主として発掘調査現場で行った。注記は、注記記号「山仁」を頭に、包含層資料は続けて「区」、「層」、「遺物番号」の順で記入した。遺物接合は、土器類・陶磁器・須恵器に関して行った。



第5図 地形図及びトレンチ配置

第2節 層序

調査をもとに確認した基本的な層序は基本土層1と基本土層2のとおりである。基本土層1はI・II・IV地区の基本層序を表している。基本土層2はIII地区の基本層序を表している。

1 基本土層1

基本的な層位を遺跡北西部のC～E-1～7区を基準にし、基本土層1のようにまとめた。ただし、各土層の堆積状況は必ずしも安定しておらず、地点によっては1つの層が全く見られない場所や、第I層の下位に水成堆積による砂層が見られる場所もあった。

第I層は、表土である。

第II層は、腐植の入る黒褐色土で古代から近世の遺物包含層である。

第III層は、アカホヤ火山灰の堆積層で、二次堆積のIII a層とパミスを含む一次堆積のIII b層に分けられる。

第IV層は、縄文時代早期の包含層であり、ごく一部に確認できる。

第V層は、白色および暗紫色風化土で、主に調査区北半分に広がっている。

第VI層は、シラスの二次堆積であり、標高の高いところに一部残存している。

第VII層は、この地域の基盤層を形成する約5cm～15cm程度の安山岩風化礫を多く含む安山岩風化土層である。

2 基本土層2

中近世の溜池遺構と思われたIII地区(G～I-17～19区)はa～hに分層することができた。a、b層は基本土層1の第I層に、c～g層は第II層に、h層は第III層に比定される。

c層は、グライ化しており、炭化物と軽石が少量混じる沈殿層。近世から近代の遺物包含層。

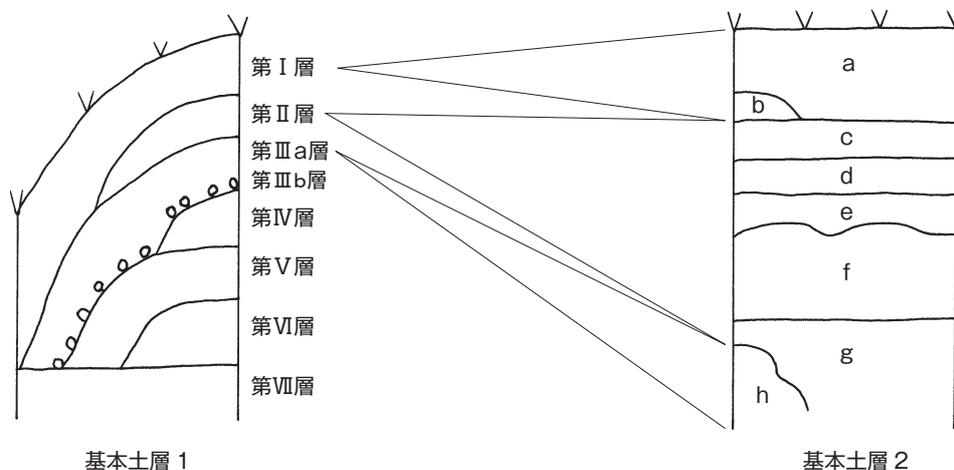
d層は、鉄分とマンガンの沈殿により黒色土や赤色土が多い沈殿層。中世から近世の遺物包含層。

e層は、小さな炭化物が多く見られる沈殿層。中世から近世の遺物包含層。下面で鉄分やマンガンの沈殿が一部確認された。

f層は、中世の溜池遺構に溜まったにぶい褐色の沈殿層。中世の遺物包含層。

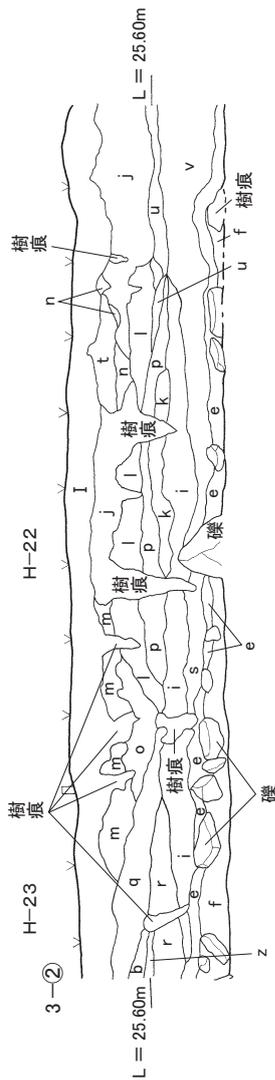
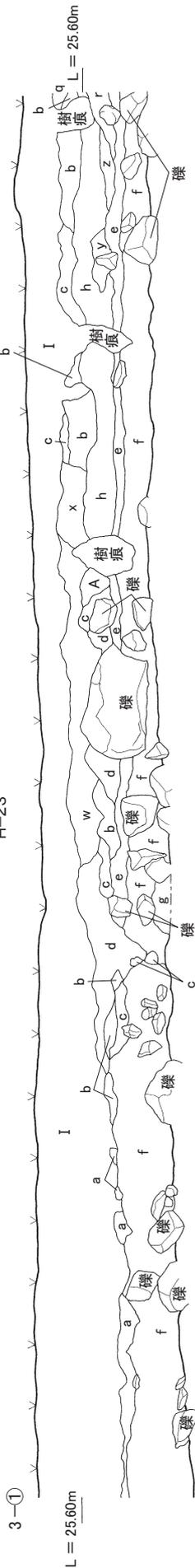
g層は、礫を含む暗茶褐色層。

h層は、基本土層1の第III a層に該当する。

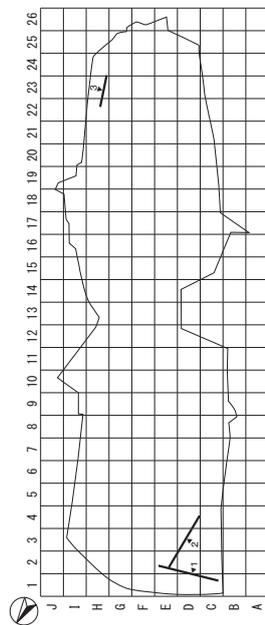


第6図 基本土層

H-23



- a 黄褐色砂質土
- b 青灰色粗砂層
- c 黄褐色粗砂層
- d 茶褐色粘質土
- e 茶褐色粘質土礫層
- f 混褐色粘質土礫層
- g 混淡褐色シルト礫層
- h 黄灰色砂層
- i 暗青灰色粗砂層
- j 黄茶褐色ローム質土
- k 乳茶褐色混質土
- l 黄褐色ローム混り砂層
- m 茶褐色ローム質土
- n 淡黄白色ローム質土
- o 濁黄褐色ローム質土
- p 青灰色砂層
- q 黄褐色砂層
- r 黄灰色粘砂層
- s 黄褐色小礫混り粗砂層
- t 黄褐色粗粒砂層
- u 茶褐色混砂土
- v 黄褐色砂層
- w 暗黄褐色砂質土
- x 淡黄褐色ローム質土
- y 暗茶褐色粗砂層
- z 褐色ローム質土
- A 淡黄褐色ローム質土



第9図 H-22・23 第11トレンチ西側土層

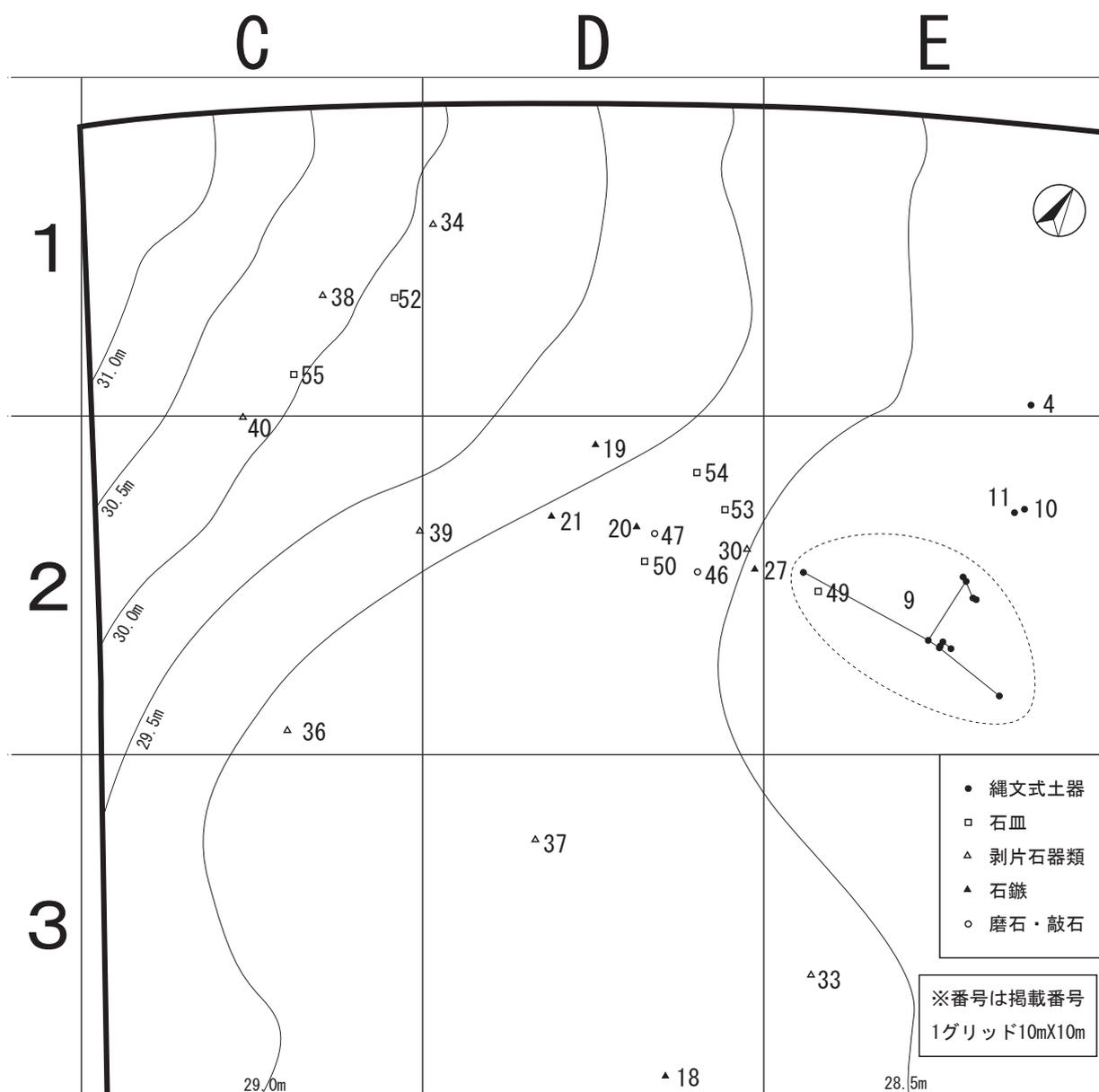
第3節 調査の成果

1 縄文時代

(1) 遺物出土状況

この時代の遺物はC～E-1・2区を中心に列状に出土した。当時に近い地形としては、西から東に舌状の尾根がみられ、その高低差は30mで約2mの傾斜である。その尾根の南側には緩やかな谷状地形がみられる。遺物は、尾根部の一部C・D-1・2区とE-2区に空白地帯がみられ、空白地帯の高台に石皿と磨石、下段に石皿と磨石類、土器が出土した。この空白地帯は地形がやや平坦になっており注目される。剥片石器類は、尾根部と緩やかな谷部に列状にもみられる。C・D-2・3区の谷部出土のものは尾根部からの流れ込みと思われる。

なお、この地域は円筒形の貝殻文土器や押型文土器が出土しているので、時期は縄文早期である。



第10図 縄文時代の出土遺物分布

(2) 出土遺物

ア 土器(1～17)(第11図)

1は口縁部がやや内側に内彎した深鉢である。口唇部は内側に段をもち口唇端部に貝殻腹縁部による刻み目を施している。口縁部の外面にはやや斜位に貝殻腹縁部による連続刺突文を施している。外面の器面調整は貝殻条痕で内面はナデ調整である。色調は暗赤茶褐色で、焼成は硬質で良い。2は深鉢の胴部である。1と同様薄手で器面調整は外面が斜位の貝殻条痕で内面は横位である。色調は赤茶褐色で、焼成は硬質で良い。3は口唇部がやや欠損した口縁部で、厚手の深鉢である。文様は外面に貝殻腹縁部による縦位の連続刺突文を2段に施している。器面調整は外面が粗いナデで、内面が丁寧なナデである。色調は口縁部外面が暗茶褐色で他は基本的に黄茶褐色である。焼成は硬質で良い。4は深鉢の胴部である。外面には貝殻腹縁部による綾杉状の器面調整があり、内面の調整はヨコナデである。色調は赤茶褐色で、焼成は硬質で良い。5は厚手のやや球状を呈した胴部である。外面には貝殻腹縁部による綾杉状の器面調整があり、内面の調整はヨコナデである。色調は外面が暗赤茶褐色で、内面が茶褐色である。焼成は硬質で良い。6は厚手の深鉢の胴部である。外面には貝殻腹縁部による綾杉状の器面調整があり、内面の調整は斜位の貝殻条痕である。色調は黄茶褐色で、焼成は硬質で良い。7は無文の深鉢胴部である。器面調整は両面ともヨコナデである。色調は茶褐色で、焼成は硬質で良い。8は無文の深鉢胴部である。器面調整は外面がタテナデで内面がヨコナデである。色調は茶褐色で、焼成は硬質で良い。9はバケツ形をした器形で、口縁部が直線的に立ち上がり胴部でやや膨らみ口縁部でやや締まっている。外面が全面に格子目状の押型文を斜位に施している。原体は約4cm幅のもので10区画方眼の刻目がみられる。口縁端部は平坦にした面取の器面調整をし、内面の器面調整はヨコナデである。色調は外面が基本的に暗茶褐色で部分的に黒色斑もみられる。内面は概ね明茶褐色である。焼成は硬質で良い。10は外反する深鉢の口縁部である。口唇部は肥厚し断面三角形を呈する。文様は口唇部に綾杉状の沈線を回し、頸部には横位の連点と沈線を施している。器面調整はヨコナデである。胎土は黒色で、焼成は良い。11は縦位に突帯を付けた深鉢の頸部である。突帯には方形の押圧痕と横位の沈線が施され、外器面にも円形の連点文と横位の沈線文がみられる。器面調整はヨコナデで、胎土は灰色である。焼成は良い。12は薄手の深鉢で、部位は外に開く底部近くである。器面調整は外面が貝殻腹縁部によるヨコナデで、内面はヘラ状施文具によるヨコナデである。色調は外面が明茶褐色で、内面が黒色である。13は頸部で「く」の字に折れる器形をもつ深鉢である。なお、頸部から肩部にかけては外側に膨らみをもつ。文様は口唇部に刻み目を施している程度で、外面には無い。器面調整は内外面ナデであるが煮沸などによる器面剥離がみられる。色調は内面が茶褐色で、外面が赤茶褐色である。

14は底部で平底である。この平底には内面には輪状に溝があり、胴部の接合面とみられる。色調は外面が茶褐色で、内面が灰茶褐色である。焼成は早期の土器に近く硬質で良い。15は薄手の深鉢の胴部である。器面調整はナデで、焼成はやや軟質である。色調は赤茶褐色である。16は平底の底部である。この平底は胴部に埋め込んだ土器の作りで、内側に補充貼り付け粘土がみられる。また、底の外面には網代の圧痕がみられる。色調は暗黄茶褐色で、焼成は良い。

17は平底の底部である。この底部は円盤状の粘土板に胴部を重ねて接合している作りである。内面は黒色で、研磨状に器面調整している。外面は茶褐色でナデ調整である。焼成は良い。



第 11 図 縄文時代出土遺物 土器

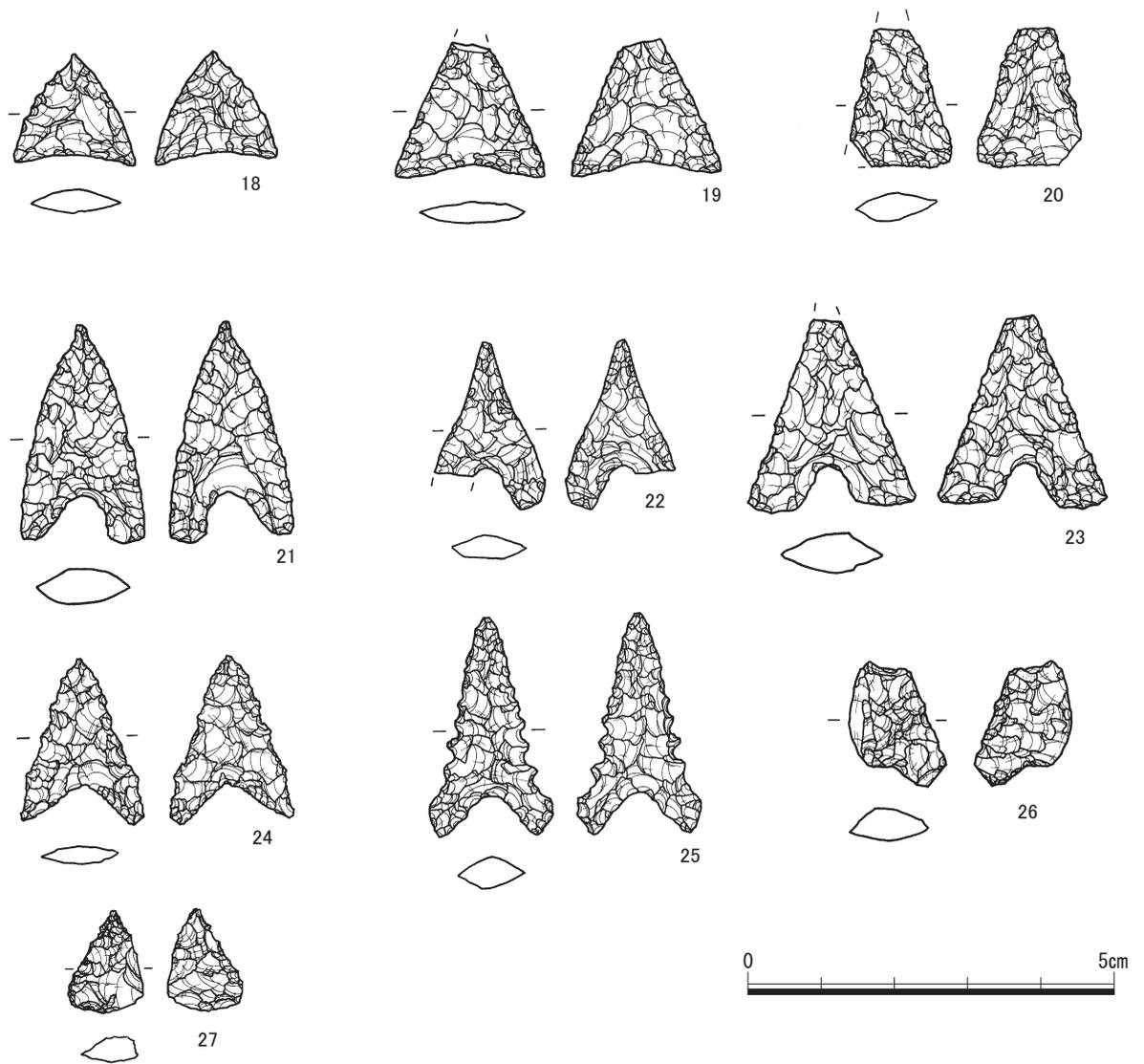
イ 石器 (18～56) (第12図～第19図)

石器は石鏃, 石匙, スクレイパー, 調整痕のある剥片, 使用痕のある剥片, 残核, 礫器, 磨石, 敲石, 石皿等が出土している。

18～27は石鏃である。18は扁平剥片を使用したものである。形態は正三角形を呈し, 底辺が平基式の分類に入る範疇である。側辺の2辺は弧状に, 先頭部は突起状に剥離されている。主要剥離面側は微細に調整され, 背面側は低い稜があり, 広い剥離面がみられる。石材は緻密性のある灰黒色の安山岩である。19は扁平剥片を使用したものである。形態は正三角形を呈し, 底辺が平基式の分類に入る範疇である。側辺の2辺は直線状に, 先頭部は欠損している。主要剥離面側及び背面側は低い稜があり, 広い剥離面がみられる。石材は緻密性のある灰黒色の安山岩である。20は扁平剥片を使用したものである。形態は二等辺三角形を呈し, 底辺が平基式の分類に入る範疇である。側辺の2辺は直線状に, 先頭部と脚部は一部欠損されている。主要剥離面側及び背面側は低い稜があり, 縦長の剥離面がみられる。石材はチャートである。

21は厚手の剥片を使用したものである。形態は二等辺三角形を呈し, 底辺がU字形に挟られた凹基式の分類に入る範疇である。側辺の2辺は弧状に, 先頭部は突起状に剥離されている。背面側は微細に調整され, 主要剥離面側の挟り部には広い剥離面がみられる。石材は赤色をした鉄石英である。この鉄石英は本遺跡の南側にそびえる旧串木野市との境になる冠岳山系に金鉱山があり, 鉄石英も多くみられるので, ここが原産地と思われる。

22は扁平剥片を使用したものである。形態は二等辺三角形を呈し, 底辺がU字形に挟られた凹基式の分類に入る範疇である。側辺の2辺は彎状で, 先頭部は長い尖状に剥離されている。主要剥離面側は微細に調整され, 背面側は低い稜があり, 広い剥離面がみられる。石材は黒曜石で, 原産地は灰黒色流紋岩に近い針尾系と思われる。23は厚手の剥片を使用したものである。形態は二等辺三角形を呈し, 底辺がU字形に挟られた凹基式の分類に入る範疇である。側辺の2辺は直線状で, 先頭部は欠損されている。主要剥離面側及び背面側は微細に調整され, 背面側は低い稜がある。石材はやや粗めで白茶色の岩片不純物を含んだ安山岩である。24は扁平剥片を使用したものである。形態は二等辺三角形を呈し, 底辺がV字形に挟られた凹式である。主要剥離面及び背面の調整剥離はやや粗く, 側辺の2辺は直線状であるが凹凸状に剥離されている。石材は灰黒色流紋岩に近い黒曜石で, 原産地は針尾系と思われる。25は厚みのある剥片を使用している。形態は二等辺三角形を呈し, 底辺がV字形に挟られた凹基式の範疇に入る。この石鏃の特徴は, 長軸で, 細身である。整形は側辺2辺の中央部に鋸歯状の調整剥離されている。石材は灰黒色の流紋岩に近い黒曜石で, 針尾系と思われる。26は厚手の剥片を使用したものである。形態は片方の脚と先頭部が欠損しているが, 二等辺三角形を呈したと思われる。底辺がU字形に挟られた凹基式の分類に入る範疇である。側辺の1辺は直線状である。主要剥離面側及び背面側は微細に調整されている。石材は濃い黒色のガラス質で灰色の岩片不純物を含んだ黒曜石である。この黒曜石は色と不純物からみると, 本遺跡から約10km離れた同じ薩摩川内市内(旧樋脇町)の上牛鼻産と思われる。27は厚手の剥片を使用したものである。形態は二等辺三角形を呈し, 側辺の2辺は直線状で, 脚部は欠損されている。主要剥離面側及び背面側は微細に調整され, 背面側は低い稜がある。石材は半透明の黒茶色の中に白色の不純物を含んだ黒曜石である。この黒曜石は半透明の黒茶色からみると桑ノ木津留産と思われる。



第 12 図 縄文時代出土遺物 石器(1)

28・29 は石匙である。

28 は摘み部が 3 か所あるもので珍しいタイプである。形状は横型石匙で幅 6.7cm, 高さ 3cm, 厚み 7～3mm である。内, 摘み部が 7mm, 5mm, 6mm である。製作としては横剥ぎ剥片を使用している。背部は縦方向 2 回, 横方向 1 回の剥離面がみられ, 腹部は主要剥離面の縦方向 1 回で剥ぎ落としている。調整剥離面は頭部の摘み部周辺と下辺の刃部にある。摘み部と上辺は上に行くに従って薄く交互剥離で作っている。下辺は厚みがあり, 刃部は交互剥離で作っている。また, 側辺には自然面が残し, その部分に調整剥離を入れ先端を鋭利にして角状部を作っている。この角状部においてはドリルの先端部としての使用も考えられる。石材は安山岩 (サヌカイト?) である。29 は横型の石匙である。作りとしては雑で未製品の可能性も考えられる。製作の特徴は厚みのある腹部の主要剥離面の打点側を刃部にし, 摘み部は薄い剥片先端部で作っている。刃部は下辺の斜行した直線部と摘み部と肩部に片刃剥離で作っている。背部は概ね 3 回で剥いでいる面がみられる。石材はチャートである。

30～36はスクレイパーである。

30は背面の調整剥離と腹部のバルブ残りからみて削器と思われる。形状は自然面が側面に残り、背部は約3回の剥離で作成、腹部は1回の主要剥離面を使用している。頭部の摘み部は背面の一部を剥離し、肩部をブランディングで行っている。下辺の刃部は交互剥離で作られている。石材は灰色の不純物がみられる安山岩と思われる。

31は縦剥ぎの横辺を刃部にしたものである。この石器は背部を概ね4回の剥離で丸みを作り、腹部は1回の主要剥離面で形を作っている。刃部は薄くなっている部分を剥離して作っている。側面は、刃潰しのブランディングがみられる。用途としては搔器（エンドスクレイパー）が考えられる。石材は黒色に灰色の不純物が混じった上牛鼻産の黒曜石である。32は原石の小礫を1回で縦剥ぎをし、その主要剥離面を腹部としている。石器は自然面側を背部にし、腹面を剥離して刃部を作っている。用途としては搔器（エンドスクレイパー）が考えられる。石材は筋のある黒色で、灰色の不純物が混じっており、上牛鼻産の黒曜石と考えられる。

33は背部を2回剥いで作り、腹部は主要剥離面を1回で作っている。刃部は側辺を剥離し、片刃を作っている。石材は気泡と筋がみられる上牛鼻産の流紋岩と思われる。34の形状は原石の小礫を背面側で4回、腹部の主要剥離面は1回剥いだ剥片を使用したもので、自然面側を指当て面にし、剥片端部を刃部とした剥器と思われる。石材は黒色で筋と灰色の不純物がみられるので上牛鼻産の黒曜石と思われる。

35は使用痕のある剥片である。

形状は背部及び腹部ともに1回で剥いだ縦長剥片を使用し、使用部は両側辺である。石材は黒灰色のチャートである。

36は加工痕のある剥片である。

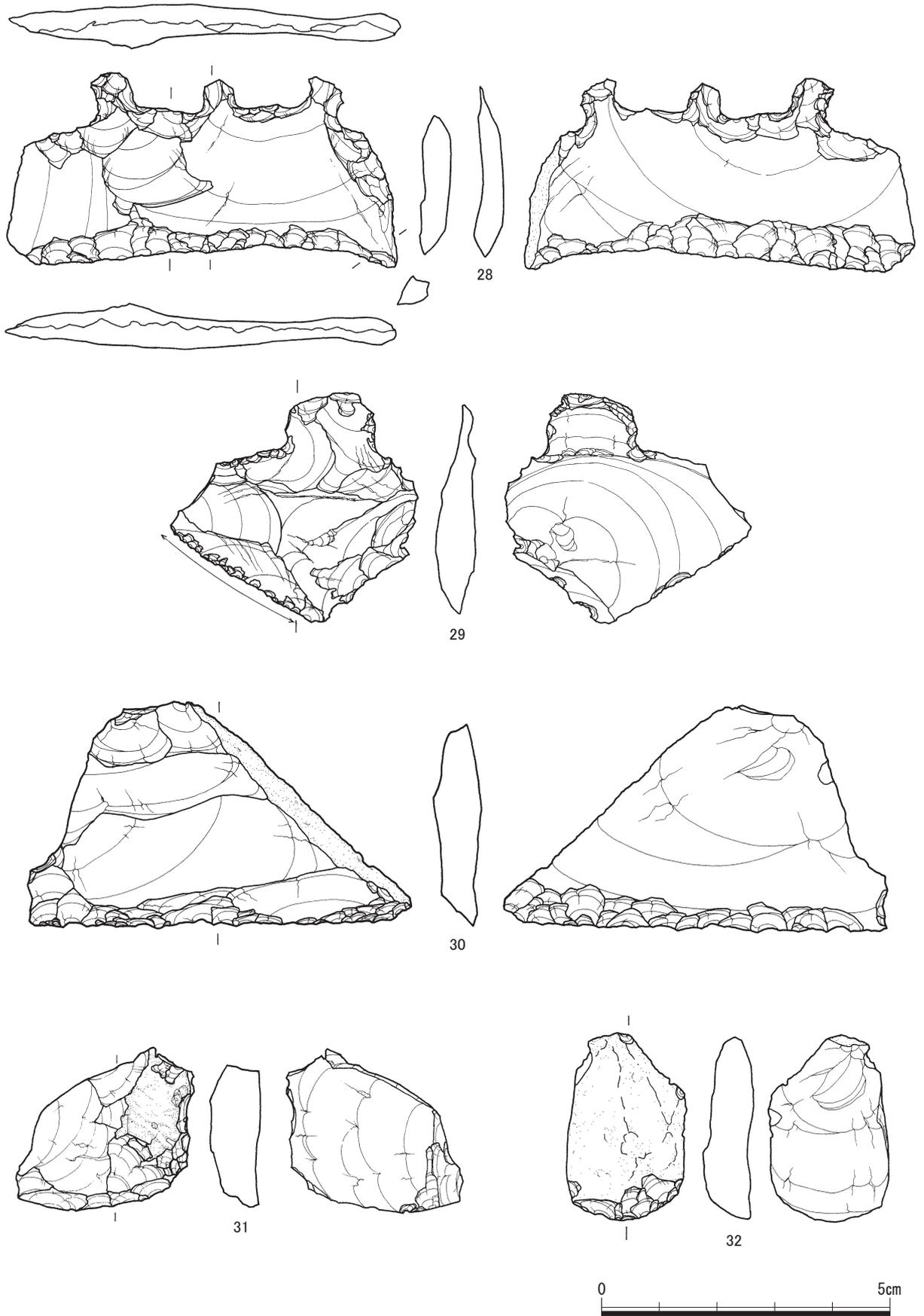
この剥片の背部には約3回の剥離面があり、腹部は1回の主要剥離面を使用している。加工は2側辺を交互剥離して刃部を作っている途中と思われる。可能性としては石匙の未成品か失敗作と考えられる。石材は黒灰色で筋のあるチャートと思われる。

37～39は調整剥片である。

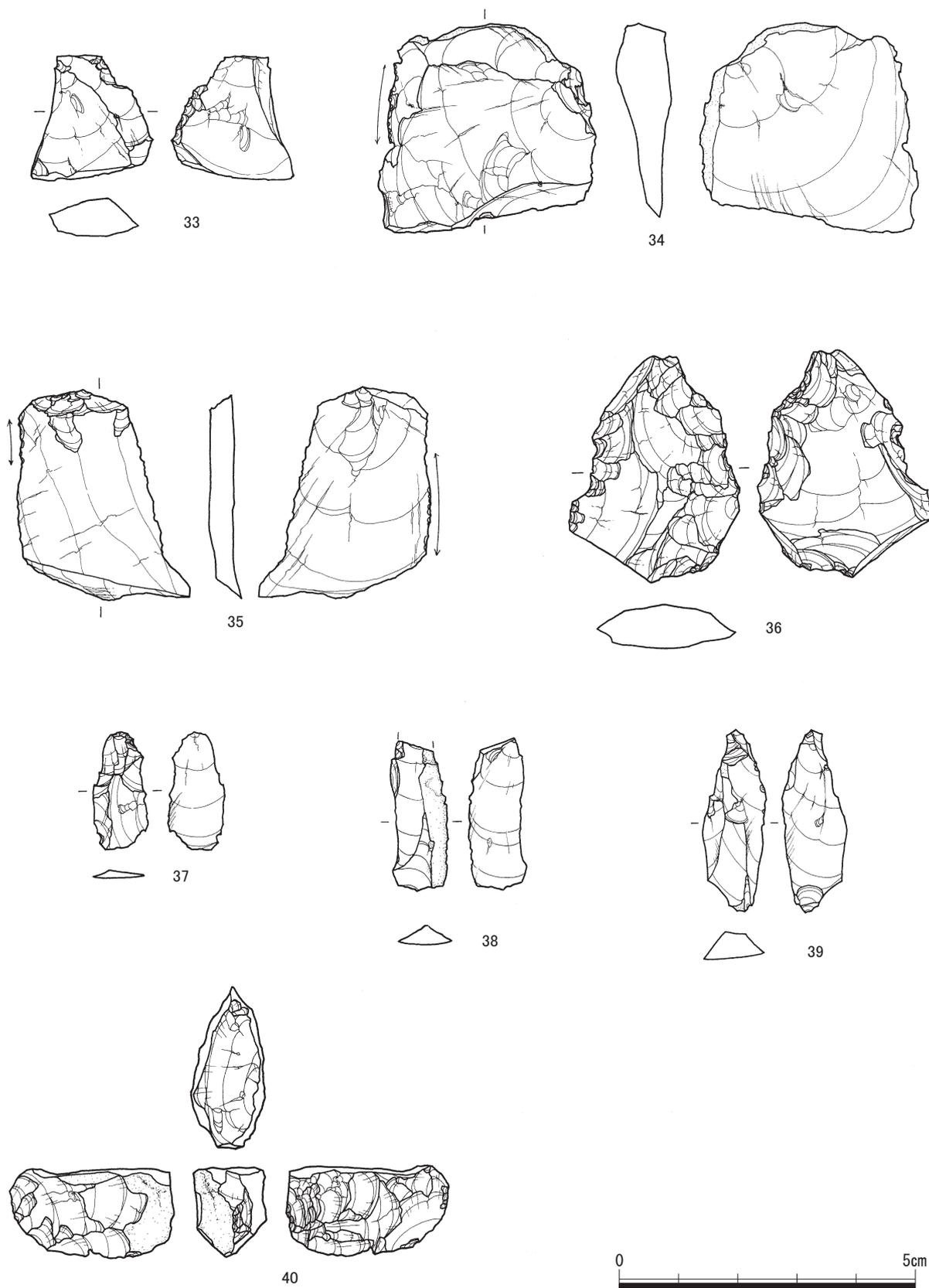
37は背部が横方向の剥離面約3回があり、腹部は主要剥離面1回で、石器製作途中の調整剥片である。この石材は透明感のある黒茶褐色で筋状に濃淡がある。これは桑ノ木津留産の黒曜石と思われる。38は背部が上から縦方向に2面、下から縦方向に1面の剥離面があり、腹部は上から主要剥離面1回の作業がみられる。形状的には細石刃の可能性はあるが第3層出土であり、確定はできない。石材は黒色の中に灰色の不純物があるので、上牛鼻産の黒曜石と思われる。39は背部が上から縦方向に約3回の剥離面があり、腹部は縦方向からの主要剥離面1回の作業がみられる。打点部では数回の失敗痕がみられ、大きく剥離して作業面等を作った調整剥片と思われる。石材は透明性があり薄い黒茶褐色が濃淡状にあるため桑ノ木津留産の黒曜石と思われる。

40は残核である。

40は小礫の原石の自然面を落としながら穀粒状に整形し、上部を横方向から分割して作業面を作ろうとしている。形は船形で、縁部の断面は船底状に尖っている。石材は透明度のある黒茶褐色で白い不純物があり、白くひびが入り、質が良くないので三船産の黒曜石と思われる。



第 13 図 縄文時代出土遺物 石器(2)



第 14 図 縄文時代出土遺物 石器(3)

41～56は礫石器である。この礫石器は、機能的に分けた。それは、柄等と組み合わせで使う土掘り具的機能を持つもの、手で直接つかんで使用する能動的機能の磨石・敲石・凹石、受動的機能がある石皿の類に分けて説明する。

41・42は柄などを組み合わせて使用したと思われる土掘り具とした。

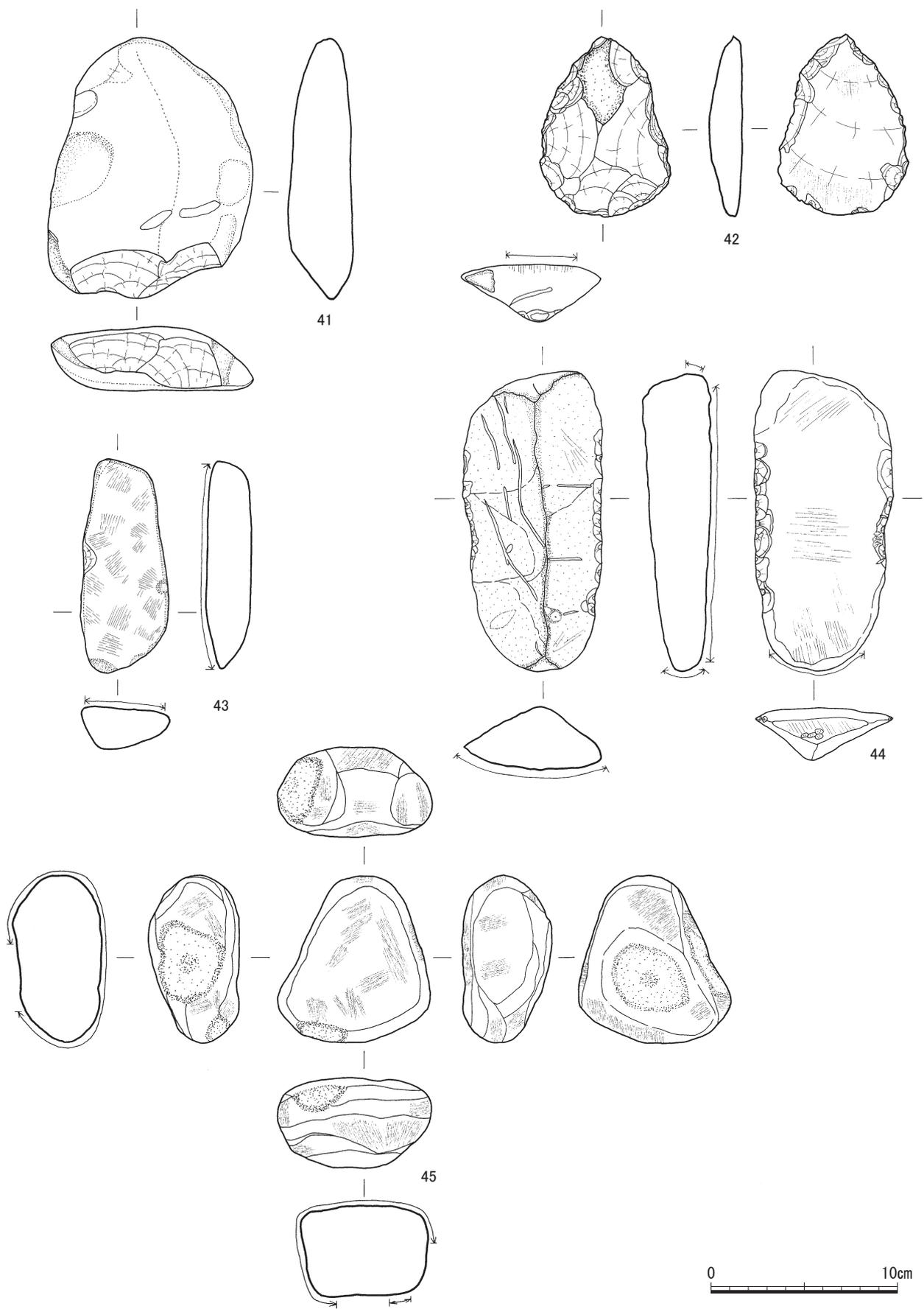
41は斧に利用できる長楕円形で、角が潰れた扁平自然礫を加工している。加工としては刃部にするため2回の大きな剥離で片刃を作っている。刃部の先端は全体に摩耗しており、使用目的は土掘り具と思われる。石材は安山岩である。42は背部に自然面が残っているため円礫の一次剥離を利用した石器である。刃部は主要剥離面を摺落として三角断面を作り、腹部を研磨している。石器の縁部は歯潰し状に剥離を入れている。刃部も歯潰しがみられるが先端部は使用痕があり、丸みを帯びている。石器の形態は打製石斧であるが機能としては土掘り具と思われる。石材は頁岩である。

43～48は磨石・敲石・凹石の性格を持つ石器である。

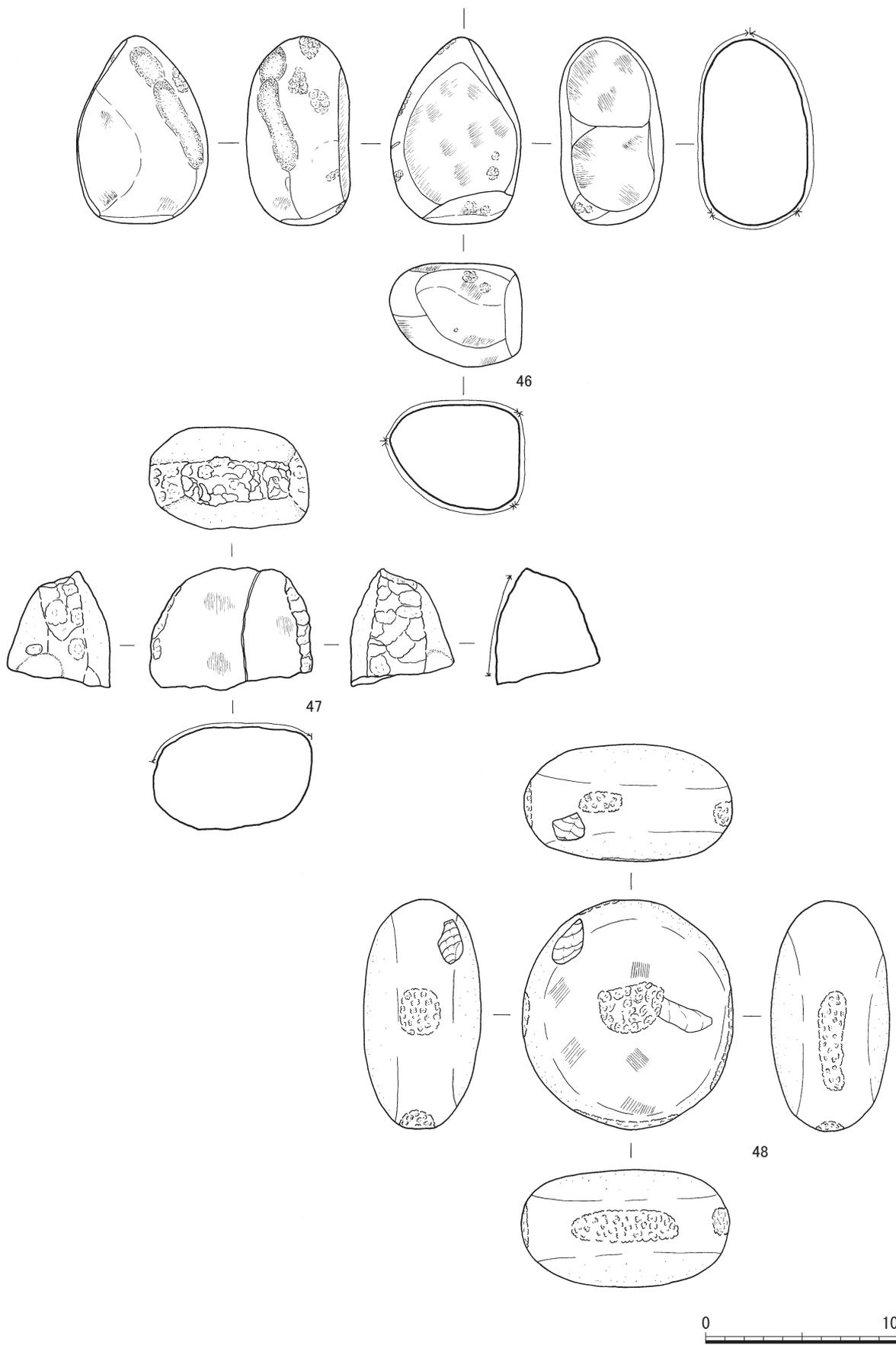
43は三角断面で棒状のもので両辺に剥離があり、使用面の先端部は敲打痕や一部打ち欠けた痕跡がみられる。石材は安山岩である。44は三角断面で棒状の磨石である。磨石の使用面は1面で、両面に剥離痕がみられる。先端部には敲打痕や一部打ちかけた痕跡もみられる。また、この両辺の剥離痕は柄の着装補強に使用したと思われる。石材は安山岩である。45は磨石で、丸みのある台形の自然礫を利用したものである。この自然礫はおにぎり形で、上面の面が狭く凹みがみられ、下面は広い平坦面になっている。使用面が一番広い下面の平坦面を中心に凹部以外に擦痕がみられる。擦痕は方向性が無く、あらゆる方向に使用している。特に下縁部は4列に平行面がみられ特に多く使用した面と思われる。この石器の石材は灰色を呈し、黒色・茶色等の不純物を含む凝灰岩である。46は磨石が主で一部に敲打痕があり、敲石の機能も兼用している。元来、この石器は円礫が2回2面に割れ半分になり、その後、摩耗でできた自然礫を利用したものである。この自然礫は四角錐形で上部尖り、下面は広く平坦面になっている。使用面が一番広い下面の平坦面を中心に全面に擦痕がみられる。擦痕は方向性が無く、あらゆる方向に使用している。石材は灰茶色を呈し、黒色・茶色等の不純物を含む凝灰岩である。

47は磨石・敲石の2つの作業面があるものである。これは平坦面のある円形の自然礫を利用したもので、半分欠損している。この石器は自然礫が変形した球形で、上面には凸がみられ、下面では平坦面になっている。磨石の使用面は下面の平坦面で擦痕がみられる。擦痕は方向性が直線状である。敲石の使用面は半截であるが縁辺部を広く使い、面状の敲打痕がみられる。特に長辺部が広い。石材は灰茶色を呈し、黒色・茶色等の不純物を含む凝灰岩である。

48は磨石・敲石・凹石の3つの作業面があるもので、平坦面のある円形の自然礫を利用したものである。この石器は上下面ともやや丸みのある平坦面になっている。磨石の使用面は下面の平坦面で擦痕がみられる。擦痕は方向性が直線状である。敲石の使用面は縁辺部を部分的に使い、粒状の敲打痕がみられる。凹石は上面の片面中央部にみられ、粒状の敲打痕が円形にみられる。なお、平坦な磨石面にある長方形と、縁辺部にある敲打面の方角傷は後世のものである。石材は灰色を呈し、黒色・茶色等の不純物を含む凝灰岩である。



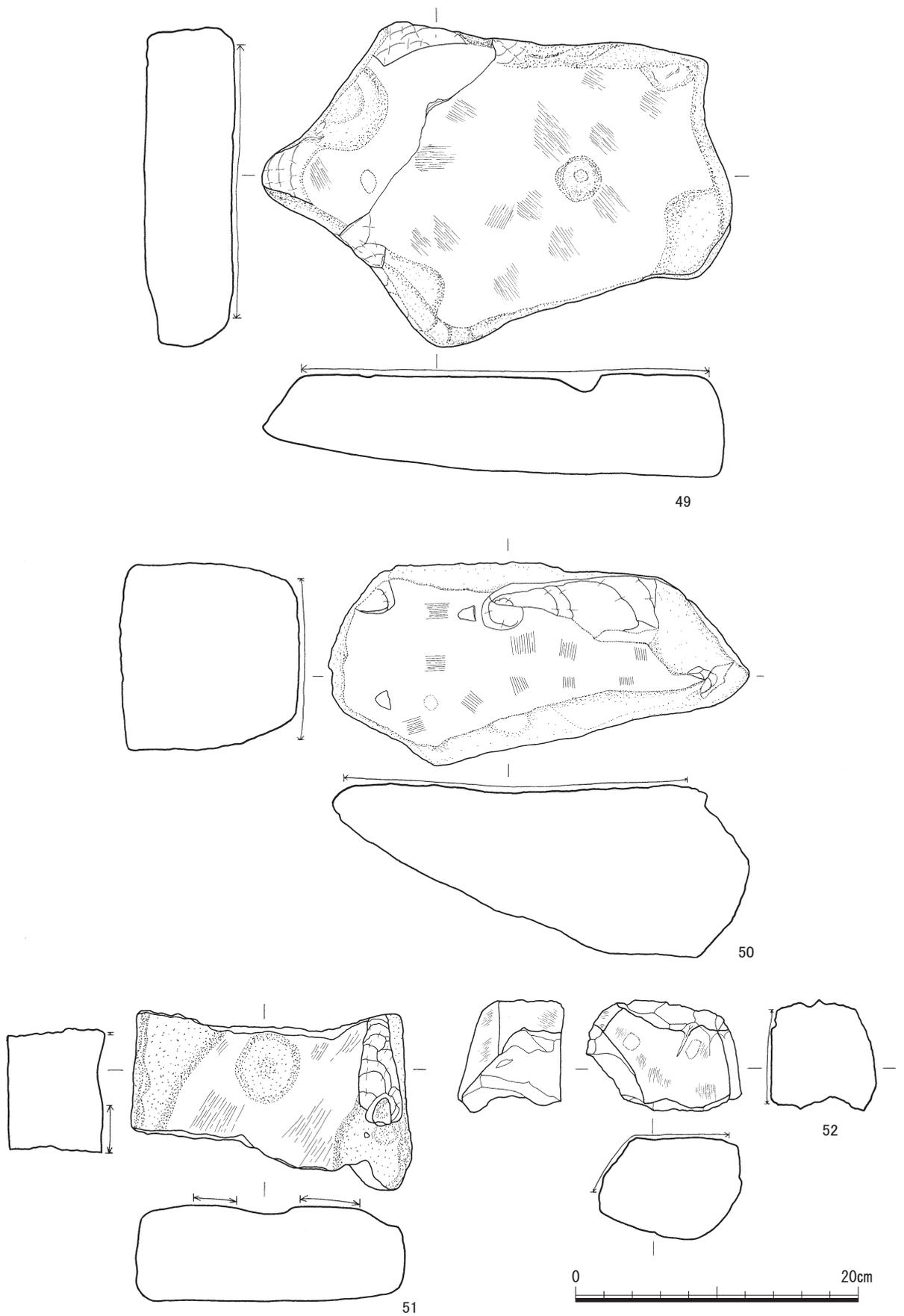
第 15 図 縄文時代出土遺物 石器(4)



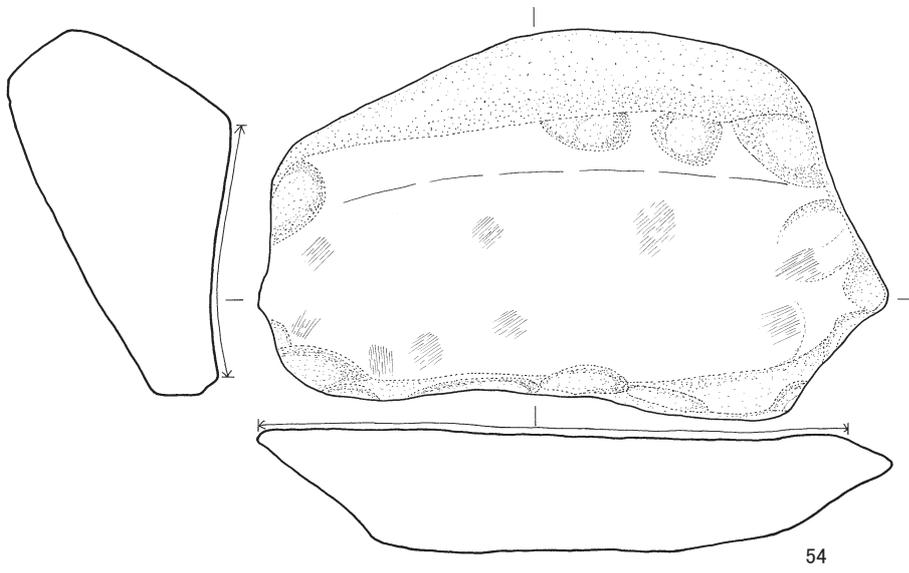
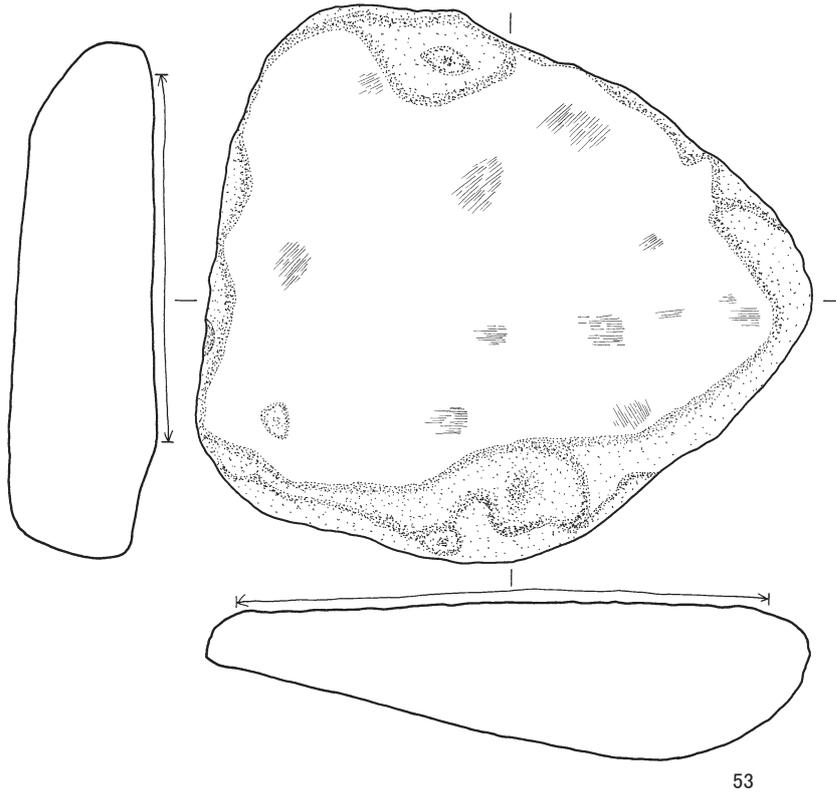
第 16 図 縄文時代出土遺物 石器(5)

49～56は石皿である。49は厚みが約7.2～5cmの平坦な板状で五角形をした自然礫の平坦な台石である。中央近くには直径3cm深さ1.5cmの凹みがみられる。これは流水等の自然摩耗でできたポットホールと思われる。また、その他の縁辺部は流水等の摩耗がみられ角部が丸みを帯びている。使用面は台石の狭い面で、ポットホールのある面である。使用は長軸方向に擦痕がみられるため、厚みの差を利用して作業をしたとも考えられる。石材は灰色が主体で黒色や茶色の粒子が入った凝灰岩である。50は厚みが約12.5～4cmの断面三角形をしたもので、使用面は三角形をした自然礫の台石である。使用面には直径2cm、深さ0.5cmの凹みや約1cmの円形の凹みが2か所みられる。これは流水等の自然摩耗でできたポットホールと思われる。また、その他の縁辺部は流水等の摩耗がみられ角部が丸みを帯びている。使用面は台石の狭い面で、二等辺三角形を呈している。その鋭角部は厚みがあり、鈍角部は広い。使用は長軸方向に擦痕がみられるため、厚みの差を利用して作業をしたことが考えられる。石材は灰茶色が主体で黒色や茶色の粒子が入った凝灰岩である。51は厚みが約6.7～5cmの平坦な板状で、自然礫の平坦な台石の両端部が欠損しているものである。中央近くには直径4cm、深さ0.5cmの凹みがみられる。これは流水等の自然摩耗でできたポットホールと思われる。また、その他の縁辺部は流水等の摩耗がみられ角部が丸みを帯びている。使用面は台石の中央面で、ポットホールのある面である。作業は長軸方向に擦痕がみられる。また、縁辺部の剥離部は後世のものである。石材は灰黒色が主体で黒色や茶色の粒子が入った凝灰岩である。52は50と同じような傾斜をもつ台石である。これは、幅が11.0cm、厚みが7.3cmあるもので、大半が欠損した一部である。使用面は平坦面で、長軸方向に作業痕がみられる。石材は灰茶褐色の中に灰色の粒子がみられる凝灰岩である。53は厚みが約8.2～2cmの傾きのある五角形をした自然礫の台石である。縁辺部は流水等の摩耗がみられ角部が丸みを帯びている。使用面は台石の広い面である。使用は長軸方向に擦痕がみられ、厚手の部分と薄手の部分の方向が同じで、これは厚みの差を利用して作業をしたことが考えられる。石材は灰茶色が主体で黒色や茶色の粒子が入った凝灰岩である。54は厚みが約11.8～4cmで三角断面を呈し、平面は長めの五角形をした自然礫の台石である。作業面は中央部で、その脇には径4cm、深さ1cmの凹みが3か所みられる。これは流水等の自然摩耗でできたポットホールと思われる。また、その他の縁辺部にも2か所ある。また、全体的に流水等の摩耗がみられ角部が丸みを帯びている。使用面は台石の凹み面で、ポットホールのある面である。使用は長軸方向に擦痕がみられる。長軸と凹みとは方向が異なり、底に何らかの下敷きをして作業をしたと思われる。石材は灰茶色が主体で黒色や茶色の粒子が入った凝灰岩である。55は厚みが約11～8cmの平坦な板状で隅丸五角形をした自然礫の平坦な台石である。中央近くには直径1cm深さ1cmの凹みがみられる。これは流水等の自然摩耗でできたポットホールと思われる。また、その他の縁辺部は流水等の摩耗がみられ角部が丸みを帯びている。使用面は台石の狭い面で、ポットホールのある面である。使用は短軸方向に擦痕がみられ、短軸の厚みの差を利用したことが考えられる。石材は灰茶色が主体で黒色や茶色の粒子が入った凝灰岩である。

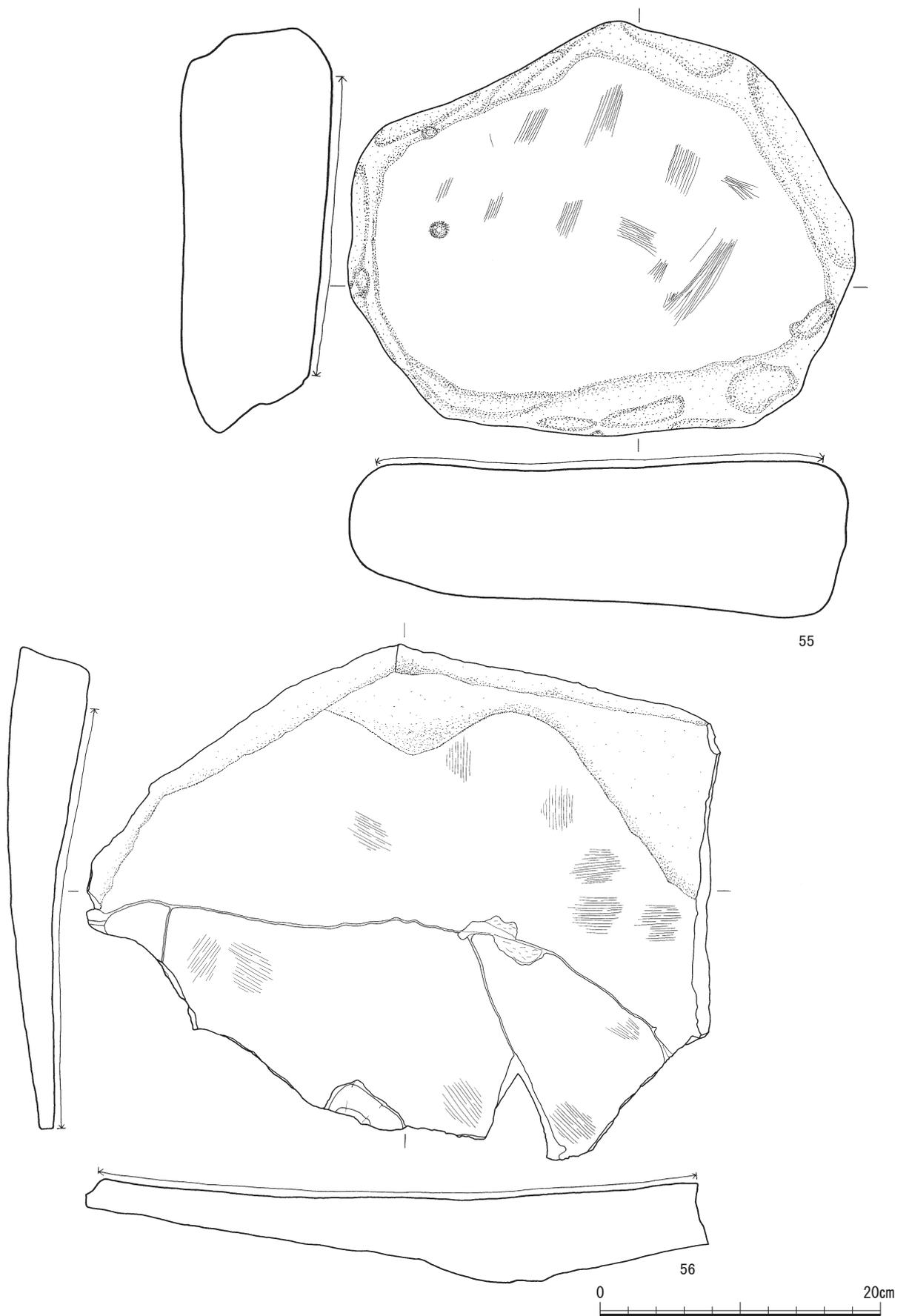
56は厚みが約6.0～1cmで、緩やかなカーブをもった板石を利用した石皿である。使用面はカーブの内面で、擦痕軸は厚みのある部分と薄手の部分方向にみられるものと、それにクロスした方向がみられる。これは、作業面が広い為に、あらゆる方向の作業ができたと考えられる。石材は灰茶褐色で中に黒色・茶色の粒子が入った凝灰岩である。



第 17 図 縄文時代出土遺物 石器(6)



第 18 図 縄文時代出土遺物 石器(7)



第 19 図 縄文時代出土遺物 石器(8)

表 3 縄文時代出土土器観察表（「4T」は平成 21 年度のトレンチ）

挿図 番号	遺物 番号	調査 地点	出土 地点・層	取上番号	遺構名	時期	器種	部位	胎土色調	胎土内混入鉱物				法量 (cm)			備考
										透明	白色	黒色	その他	口径	底径	器高	
11	1	I	4T	一括	—	早期	深鉢	口縁部	明赤褐		○	○	茶粒	—	—	—	
	2	I	4T	一括	—	早期	深鉢	胴部	明黄褐		○	○		—	—	—	
	3	I	4T	一括	—	早期	深鉢	口縁部	黄橙		○	○	茶粒	—	—	—	
	4	I	E-1 IV	98	—	早期	深鉢	胴部	橙	○	○	○		—	—	—	
	5	I	4T 拡張	一括	—	早期	深鉢	胴部	にぶい黄橙	○	○	○		—	—	—	
	6	I	4T	一括	—	早期	深鉢	胴部	橙	○	○	○		—	—	—	
	7	I	— I	一括	—	早期	深鉢	胴部	にぶい橙	○	○	○		—	—	—	
	8	I	— I	一括	—	早期	深鉢	胴部	にぶい黄橙	○	○	○	茶粒	—	—	—	
	9	I	D-3 III	109	—	早期	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄橙		○	○		25.0	—	—	
		I	E-2 III	71.89													
		I	E-2 IV	67,68,69,70 93,95,175,176													
		I	H-8 III	一括													
	10	I	E-2 IV	178	—	早期	深鉢	口縁部	黒		○	○		—	—	—	
	11	I	E-2 IV	177	—	早期	深鉢	頸部	灰	○	○			—	—	—	
	12	III	G-24 II	10,11	—	早期	深鉢	胴部	橙		○	○		—	—	—	
	13	I	— I	一括	—	縄文	深鉢	口縁部	明黄褐		○	○		—	—	—	
	14	I	— I	一括	—	早期	深鉢	底部	黒褐	○		○		—	9.5	—	
15	III	— I	一括	水田	縄文	深鉢	胴部	橙	○	○	○		—	—	—		
16	I	— I	一括	—	縄文	深鉢	底部	にぶい黄橙	○	○	○		—	—	—		
17	I	4T	一括	—	晩期	深鉢	底部	黄橙		○			—	11.4	—		

表 4 縄文時代出土石器観察表（「7T」は平成 21 年度のトレンチ）

挿図 番号	遺物 番号	器種	出土地点・層	取上番号	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
12	18	石鏃	D-3 IV	76	安山岩	1.6	1.7	0.3	0.57	
	19	石鏃	D-2 III	42	安山岩	1.9	2.1	0.3	1.03	
	20	石鏃	D-2 III	46	チャート	1.9	1.4	0.4	1.09	
	21	石鏃	D-2 III	44	鉄石英	3.1	1.7	0.5	2.11	
	22	石鏃	— I	一括	黒曜石	2.4	1.5	0.3	0.65	
	23	石鏃	— I	一括	安山岩	2.6	2.3	0.6	2.0	
	24	石鏃	— I	一括	黒曜石	2.3	1.7	0.3	0.63	
	25	石鏃	D-3 V	30	黒曜石	3.1	1.7	0.5	1.19	
	26	石鏃	I-18 II	166	黒曜石	1.7	1.3	0.5	0.86	
	27	石鏃	E-2 III	87	黒曜石	1.4	1.0	0.4	0.37	

挿図 番号	遺物 番号	器種	出土地点・層	取上番号	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
13	28	石匙	D-1 I	カクラン	安山岩	3.3	6.8	0.7	13.13	
	29	石匙	H-18 II	169	チャート	4.0	4.3	0.7	10.70	
	30	スクレイパー	D-2 IV	58	安山岩	3.9	6.6	0.8	20.71	
	31	スクレイパー	E-10 7T	カクラン	黒曜石	2.9	3.0	0.9	9.26	
	32	スクレイパー	D-2 II	一括	黒曜石	3.3	2.1	0.8	6.57	
14	33	スクレイパー	E-3 VI	73	流紋岩	2.1	2.1	0.7	2.85	
	34	スクレイパー	D-1 IV	41	黒曜石	3.5	3.6	0.8	12.54	
	35	スクレイパー	— I	—	チャート	3.6	2.8	0.4	5.09	
	36	スクレイパー	— IV	101	チャート	3.9	2.9	0.8	8.33	
	37	調整剥片	D-3 V	31	黒曜石	2.0	0.9	0.1	0.44	
	38	調整剥片	C-1 III	80	黒曜石	2.6	0.9	0.3	0.75	
	39	調整剥片	D-2 III	24	黒曜石	3.1	1.0	0.5	1.26	
	40	残核	C-2 IV	20	黒曜石	2.8	1.2	1.5	5.29	
15	41	石斧	— I	一括	安山岩	14.1	10.9	3.4	710.50	
	42	石斧	D-2 II	48	頁岩	9.7	6.9	1.8	140.24	
	43	磨石	— I	一括	安山岩	11.6	4.7	2.3	194.15	
	44	磨石	D-2 III	171	安山岩	16.2	7.4	3.4	491.00	
	45	磨石	E-2 III	96	凝灰岩	9.0	8.1	4.9	488.50	
16	46	磨石	D-2 III	52	凝灰岩	9.7	6.7	5.4	483.00	
	47	磨石, 敲石	D-2 II	50	凝灰岩	6.4	8.4	5.4	352.50	
	48	磨石, 敲石, 凹石	— I	一括	凝灰岩	12.0	10.8	6.1	1195.50	
17	49	石皿	E-2 III	66	凝灰岩	32.9	23.1	7.2	8400.00	
	50	石皿	D-2 III	53	凝灰岩	29.6	14.4	12.5	5800.00	
	51	石皿	D-2 III	一括	凝灰岩	12.6	19.7	6.7	2800.00	
	52	石皿	C-1 III	82	凝灰岩	8.0	11.1	7.3	847.50	
18	53	石皿	D-2 III	56	凝灰岩	32.4	29.6	8.2	9600.00	
	54	石皿	D-2 III	54	凝灰岩	33.4	20.9	11.8	9200.00	
19	55	石皿	C-1 IV	35	凝灰岩	35.9	29.7	11.0	19000.00	
	56	石皿	D-3,E-2,D-2 III	105,97, カクラン	凝灰岩	44.9	37.0	6.0	9400.00	
40	105	砥石	— I	一括	安山岩	11.8	7.9	2.9	326.50	
	106	砥石	D-3 III	104	凝灰岩	10.1	9.6	6.8	794.50	
51	215	石鍋	4T II	2	滑石	—	—	1.7	179.31	

2 中世・近世

(1) 遺構

21年度に15本、22年度に24本のトレンチを入れて、遺構・遺物の有無を確認し、5か所（C～F-1～8、E～G-11・12、E～G-14、G～I-17・18、E～H-23～25）を拡張して調査した。その結果、C-5区から1号・2号炉跡、F-14区から3号・4号炉跡、C-2区から竪穴建物跡、C～E-1区から道跡、D-3区から石組遺構、C・D-3・4区から1号掘立柱建物跡、D-3・4区から2号掘立柱建物跡、C-5区から3号掘立柱建物跡、H・I-17～19区から溜池遺構および水田遺構、D-2区から近世土坑の遺構が検出された。遺構の埋土には、黒色のⅡ層土が入っている。

4基の炉跡が検出されている。炉跡の1・2号と3・4号は離れた位置にあるが、それぞれは隣接している状態であり、形状が類似するため同時期、同目的で使用されたものと考えられる。1・2号の周辺には、掘立柱建物跡、石組遺構、竪穴建物跡や道跡が検出されている。3・4号炉跡の周辺には、溜池遺構や水田遺構が検出されている。1・2号炉跡と3・4号炉跡は直線距離で約90m離れている。その間は宅地や県道があり、包含層が削られている状況である。

道跡と竪穴建物跡との関係については、はっきりと関係性があるとは言い切れない。しかし、道跡の硬化面が竪穴建物跡の方向へと分岐して延びており、C-1区のベルトの土層断面に道跡の硬化面が確認できた。ベルトから竪穴建物跡までの間は、硬化面の残りが悪く確認できなかったが、同一時期の可能性も考えられる。

この遺跡全体で炉跡、溜池遺構や石組遺構が検出されていることから、何らかの生産が行われた集落である可能性がある。以下、第20図で示してある地区ごとに、出土した遺構を述べる。

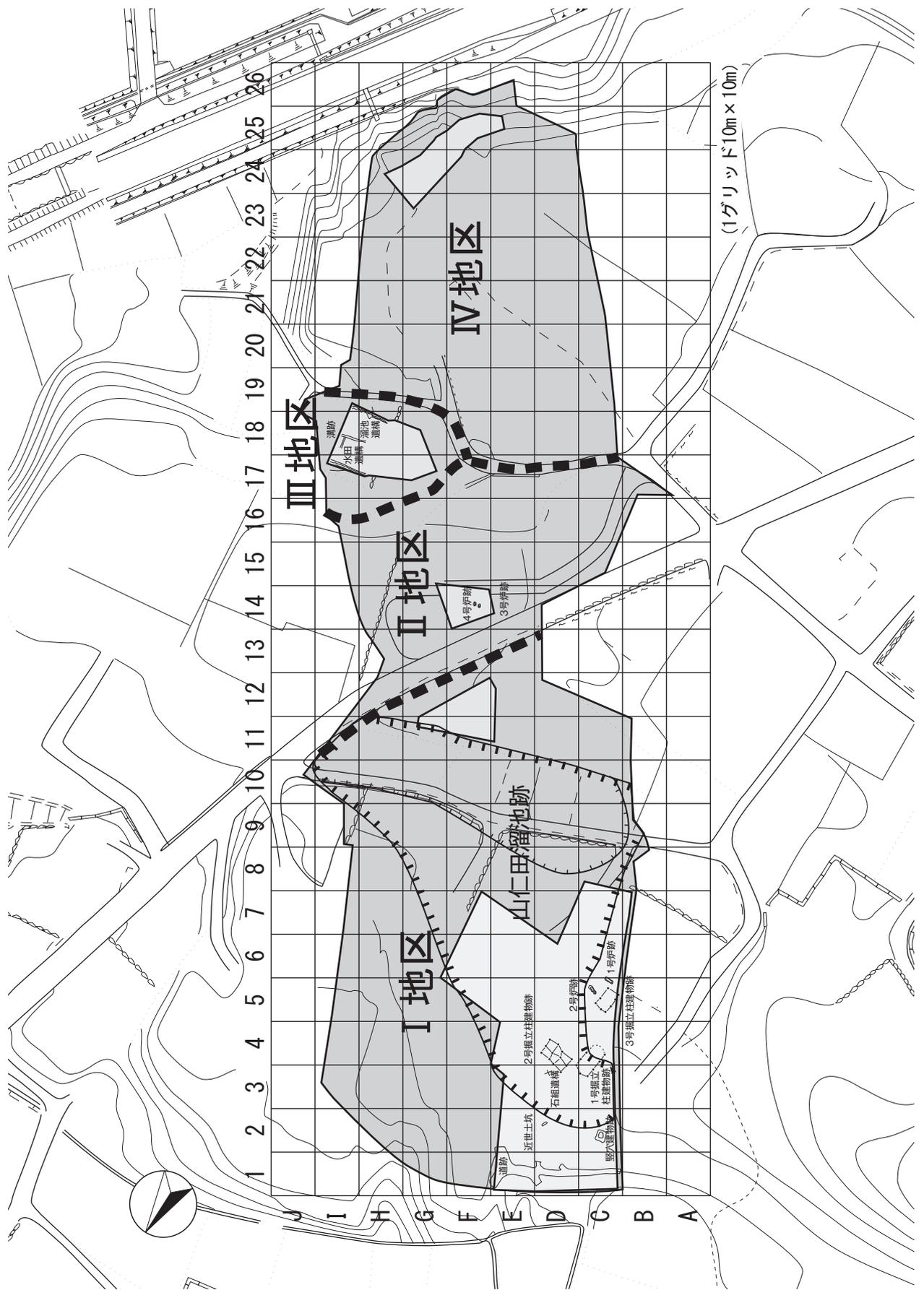
ア I・Ⅱ地区

(ア) 炉跡（第21図～第23図）

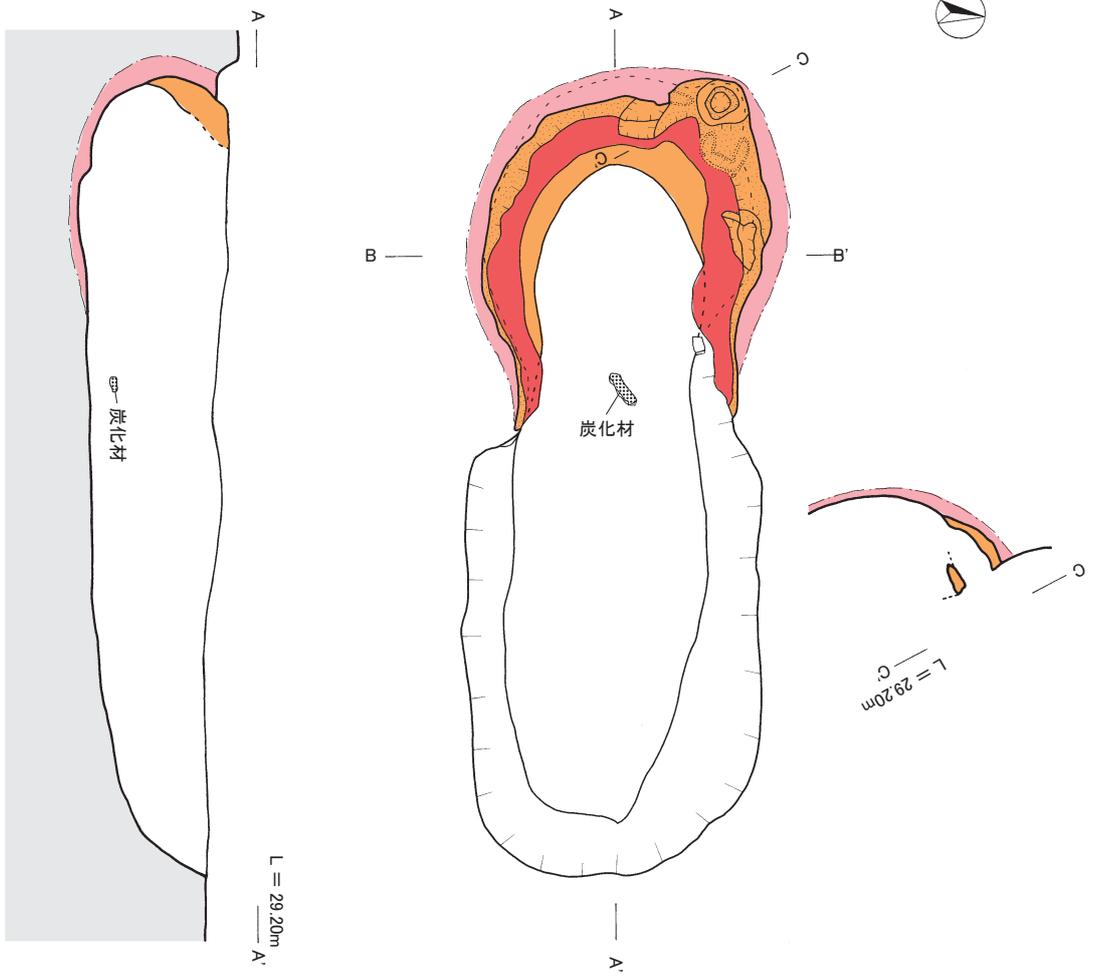
1号炉跡（第21図）

1号炉跡はC-5区、Ⅱ層下面において検出された。長軸は204cmを測る。85cm×75cmのC字型を呈している燃烧部を西に東西方向に位置しており、燃烧部の床面は検出面から35～42cm下にあり、炭の固まりが多く堆積していた。炉壁はカマ土で作られており、残り具合も良好である。炉壁は厚いところで10cmあり、断面はフラスコ状を呈し、上部がオーバーハングしている。壁の外側は赤褐色、内側は橙色で、熱を受けた跡がみられる。燃烧部の北西の位置に煙道がある。煙道の幅は8cmで、オーバーハングしている部分から外へ付け足したように延びている。検出時は煙道の残りがよく、平面実測を行うことができたが、断面の実測時には一部崩れてしまい、実測図が不完全なものとなり破線で表現している。掻き出し部は118cm×79cmの土坑で焚き口から東方向に延びている。深さは検出面より23～38cm下である。燃烧部から掻き出し部にかけての埋土は竈の上部が崩れ落ちたとみられる粘土塊、炭化物、灰を多く含む。分層はできなかったため、短時間のうちに埋まったか、埋まる過程で水が入った可能性が考えられる。埋土中に遺物は検出されなかった。また、炉を取り囲むようにして周辺に柱穴が多数検出されており、炉跡を囲う建造物があった可能性が考えられる。

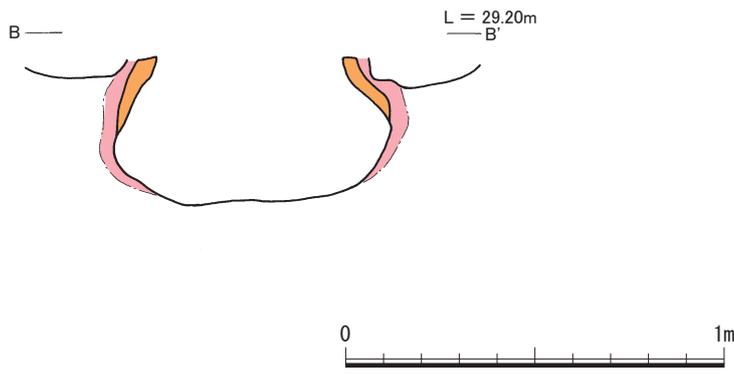
科学分析の結果によると、暦年較正年代は1521～1640calADの間の2つの範囲で示される。第



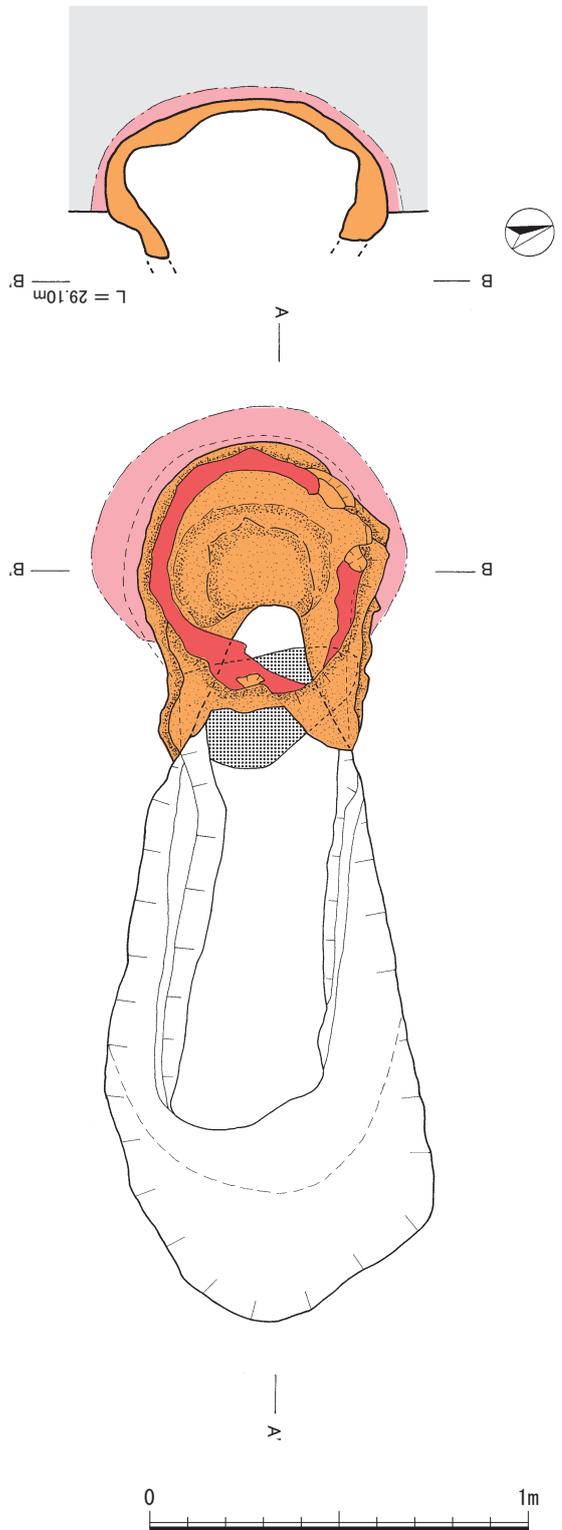
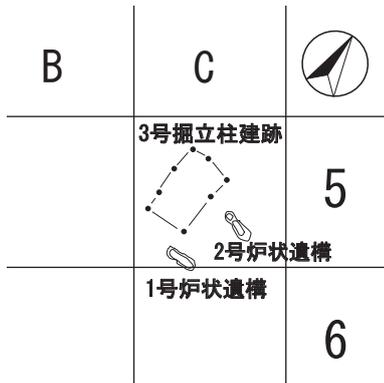
第20図 調査地区と中世遺構位置



B	C	
	3号掘立柱建跡 	5
	2号炉状遺構 	
	1号炉状遺構	6



第 21 图 1号炉跡



第 22 图 2号炉跡

1は、1521年～1592年（53.7%）で第2は、1620年～1640年（14.5%）である。また、出土した炭化材は、直径2cmの芯持丸木であり、カキノキ属に同定された。木材は重硬で強度が高い。炭化材は炉跡で利用された燃料材の可能性があり、遺跡周辺に自生あるいは栽培されていたカキノキ属の木材が利用されたことが推定される。

本遺構の北東方向3mの位置で2号炉跡が検出された。2号炉跡は22年度の第5トレンチから検出されたものである。形状は類似しているが、1号炉跡は床面にカマ土が張られていないという特徴を持つ。

2号炉跡（第22図）

2号炉跡はC-5区、Ⅱ層下面において検出された。長軸は230cmを測る。燃焼部を西に東西方向に位置している。1号炉跡と方位がほぼ一致している。

燃焼部は83cm×65cmのC字型を呈している。燃焼部の床面は検出面から35～40cm下にあり、厚さ1cmの炭の層が床面上面にみられる。カマ土による張り床の残りがよく、何かの道具を使って炭を掻き出した跡も床面に残っている。炉壁はカマ土で作られており、赤褐色で残り具合も良好である。炉壁は厚いところで10cmあり、断面はフラスコ状を呈し、上部がオーバーハングしている。

掻き出し部は150cm×83cmの土坑で焚き口から東方向に延びている。深さは検出面より35～43cm下である。焚き口付近のブリッジ部分が残存していた。ブリッジの幅は根本の部分でおよそ15cm、中央の細い部分でおよそ4cmであった。厚さは中央部で4～6cmであった。燃焼部から掻き出し部にかけての埋土はⅡ・Ⅲ層土、竈の上部が崩れ落ちたとみられる粘土塊、炭化物、灰が混ざり合い、分層はできない状態であった。短時間のうちに埋まった可能性がある。

本遺構の南西方向3mの位置で1号炉跡が検出された。形状は類似しているが、2号炉跡は床面にカマ土が張られているという特徴を持つ。

3号炉跡（第23図）

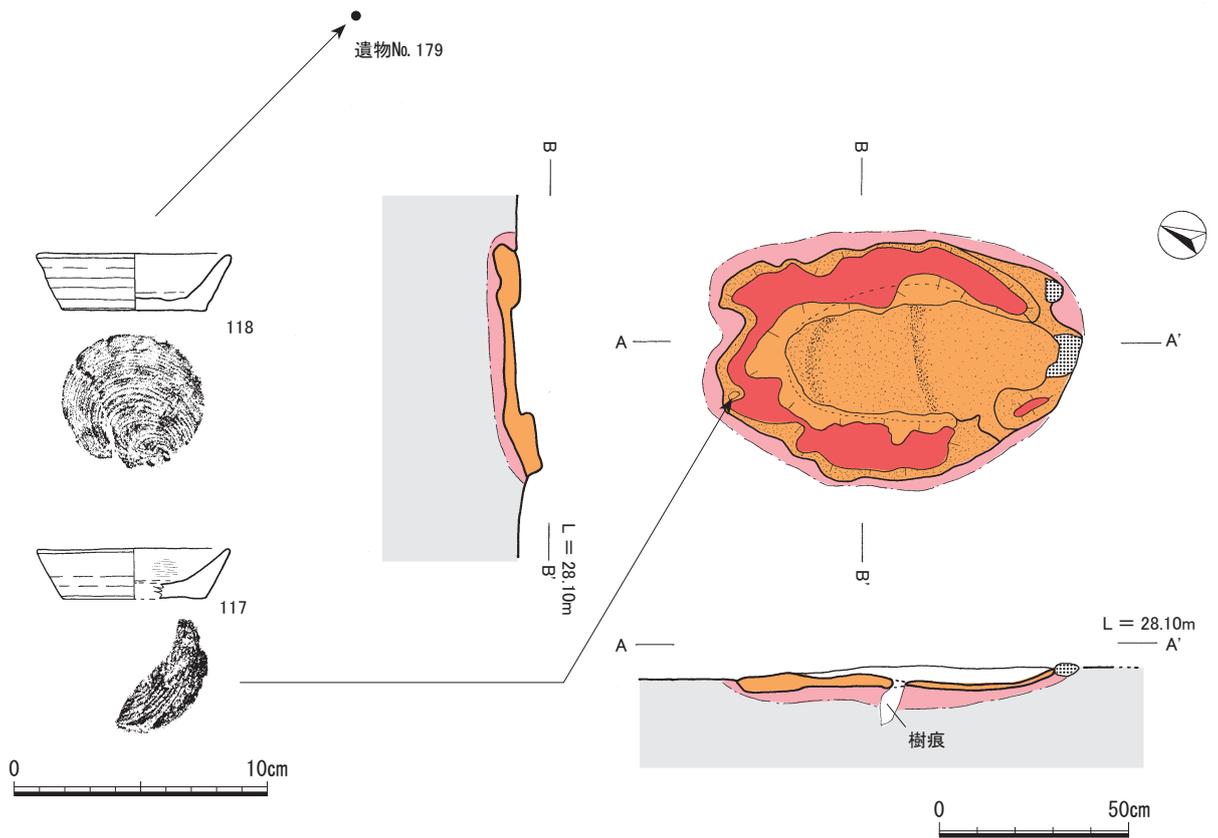
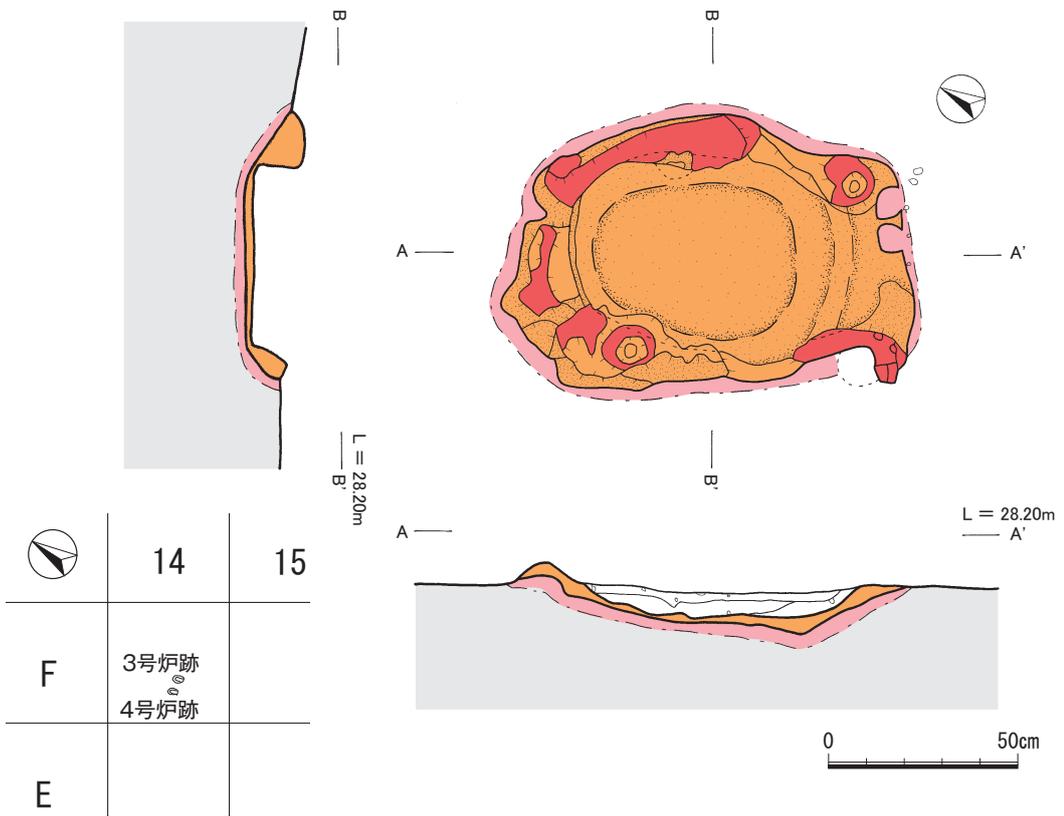
3号炉跡はF-14区、Ⅱ層下面において検出された。長軸は102cmを測る。北西～南東方向に位置している。1・2号炉跡と異なり、掻き出し部がなく、燃焼部は102cm×71cmの楕円形を呈している。また、1・2号炉跡に比べて崩れていて残存状態がよくない。床面は検出面から9～14cm下にある。カマ土による張り床があり、加熱の痕が顕著である。炉壁はカマ土で作られており、明赤褐色である。炉壁は厚いところで8cmあり、上部を多くの部分削られており、全体の形を予想することは難しい。埋土は炭化物や竈の壁が崩れた物、炭などがある。分層が可能で、時間をかけて埋まっていた可能性が考えられる。

2つの柱穴の跡が確認できる。それとは別に、柱穴と思われる部分が2か所あり、破線で表現してある。4つの柱穴の位置を考えると、屋根らしいものをつくっていた可能性も考えられる。

本遺構の東方向80cmの位置で4号炉跡が検出された。形状は類似しており、3号炉跡同様床面にカマ土が張られているという特徴を持つ。

4号炉跡（第23図）

4号炉跡はF-14区、Ⅱ層下面において検出された。長軸は92cmを測る。北西～南東方向に位置している。3号炉跡とほぼ同じ方向を向いている。3号炉跡同様1・2号炉跡と異なり、掻き出し部がなく、燃焼部は92cm×60cmの楕円形を呈している。また、1・2号炉跡に比べて崩れていて残



第 23 図 3・4 号炉跡と出土遺物

存状態がよくない。床面は検出面から2～5cm下にある。カマ土による張り床がある。炉壁はカマ土で作られており、赤褐色である。張り床の下は加熱の痕が顕著である。炉壁は厚いところで16cmあり、上部を多くの部分が削られており、全体の形状を予想することは難しい。埋土は炭化物や竈の壁が崩れた物、炭などがある。分層が可能なことから、時間をかけて埋まっていた可能性が考えられる。

炉の西の部分の壁と炉の北方向150cmのところに遺物がある。どちらも土師器で、中世につくられたものである。

本遺構の西方向80cmのところで3号炉跡が検出された。形状は類似しており、4号炉跡同様床面にカマ土が張られているという特徴を持つ。

(イ) 竪穴建物跡 (第24図)

1基の竪穴建物跡が、C-2区、Ⅲ層上面で検出された。西から東にかけて、緩やかに傾斜している場所に位置していた。遺構の規模は2.5m程度×2.3m程度の方形を呈するものであったと予想される。遺構の東側が残っておらず、図面では破線で復元してある。中央部には1.4m程度×1.1m程度の方形の掘り込みがあり、2段構造になっていた。比較的残りのよい西側では、床面は検出面より13cm下にあった。

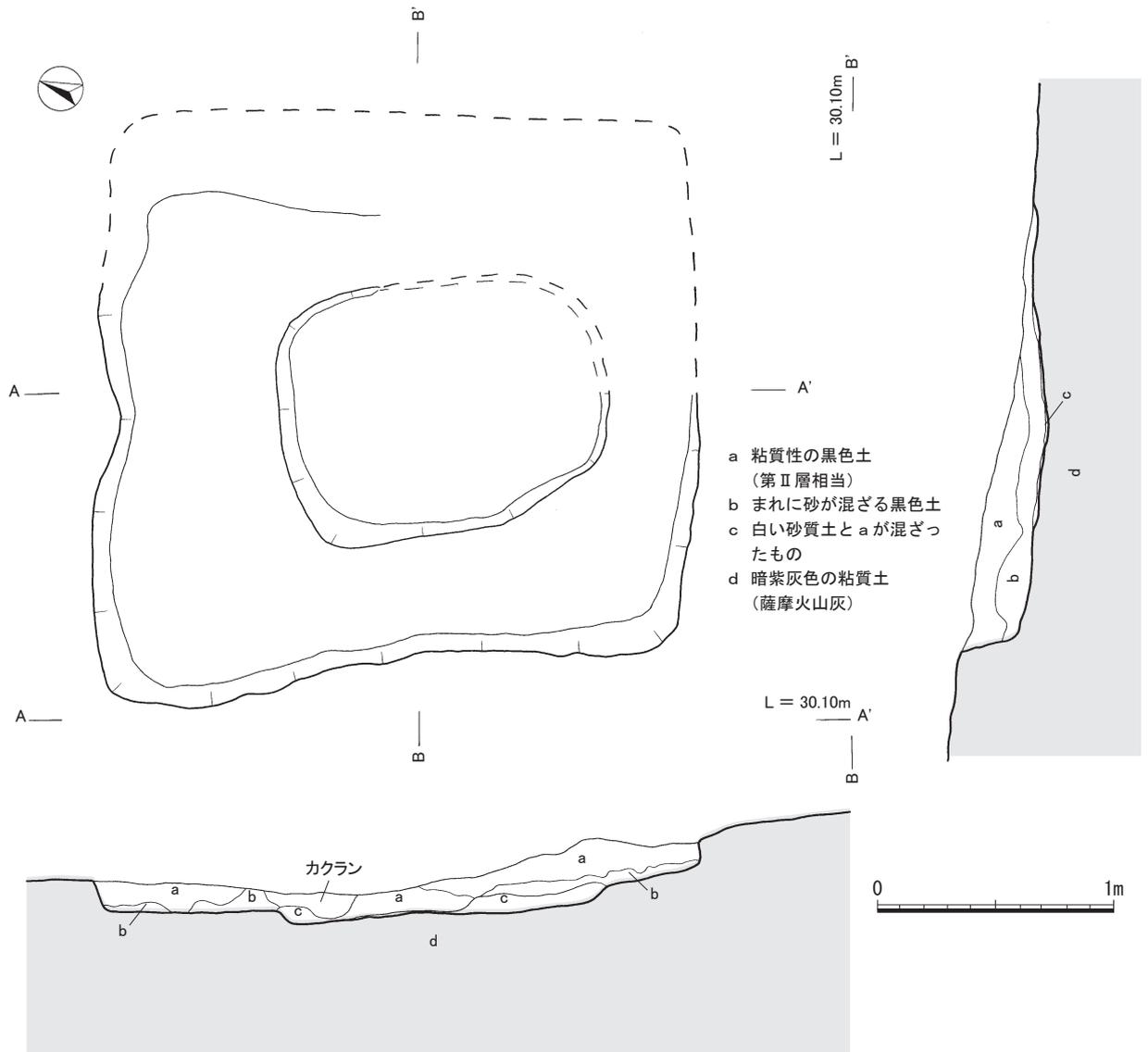
調査当初はⅢ層のアカホヤの上面に包含層であるⅡ層土の可能性のある黒褐色の不成形なシミが広がっていたが、遺物も出土しない状況であった。ただ、本遺構の北に道跡が検出されており、近くに建物跡があることが予想されたため、遺構の可能性も考慮し、慎重に検出作業を進める中で、方形に近いプランを検出した。そこで、十字のベルトを残し調査を行ったところ、硬化した床面、壁の立ち上がりを検出したため遺構と判断した。埋土は黒色のⅡ層土と砂混じり黒色土が中心である。炭化物は見られなかった。中央にピットが少数検出されたが、遺物もなく、樹痕と思われるものであったため、攪乱と判断した。

ほぼ水平につくられた床面をもつ本遺構が斜面にそって削られていた状況や、本遺構から半径12m～15mの範囲に遺構が検出されておらず、その先に遺構が集中して検出している状況から、「元々斜面であった地形を中世の頃に造成し平坦地に変え、そこに竪穴建物がつくられた。その後、造成面は雨や土砂崩れなどで流される事により一部しか残存していない状況にある。」ということが考えられる。

上記の道跡の途中で、本遺構方向に分岐していることが確認できる硬化面があり、道跡と本遺構が関連している可能性も考えられる。道跡は東西方向に延びており、西側の道は谷へ降りる道となっている。谷間は沖積平野で現在は水田として利用されている。

(ウ) 道跡 (第25図)

道跡が、C～E-1・2区のⅢ層上面より1条検出された。南西から北東の方向へ図面上で約30mの長さである。高低差が4mの斜面に位置しており、実際の長さは、30m以上であった。検出された部分は硬化しており、厚さ3cm～10cm、幅40cm～1mの範囲であった。硬化面の断面には、分層できるほどははっきりとはないが、複数枚の硬化面がみられ、長い期間利用されてきたものと考えられる。本遺構には分岐点らしいものを複数確認できるが、分岐した先は残存状態が悪く、いずれも途中で消えていた。ただ、本遺構とC-2区で検出された竪穴建物跡の間にあるベルトの



第24図 竪穴建物跡

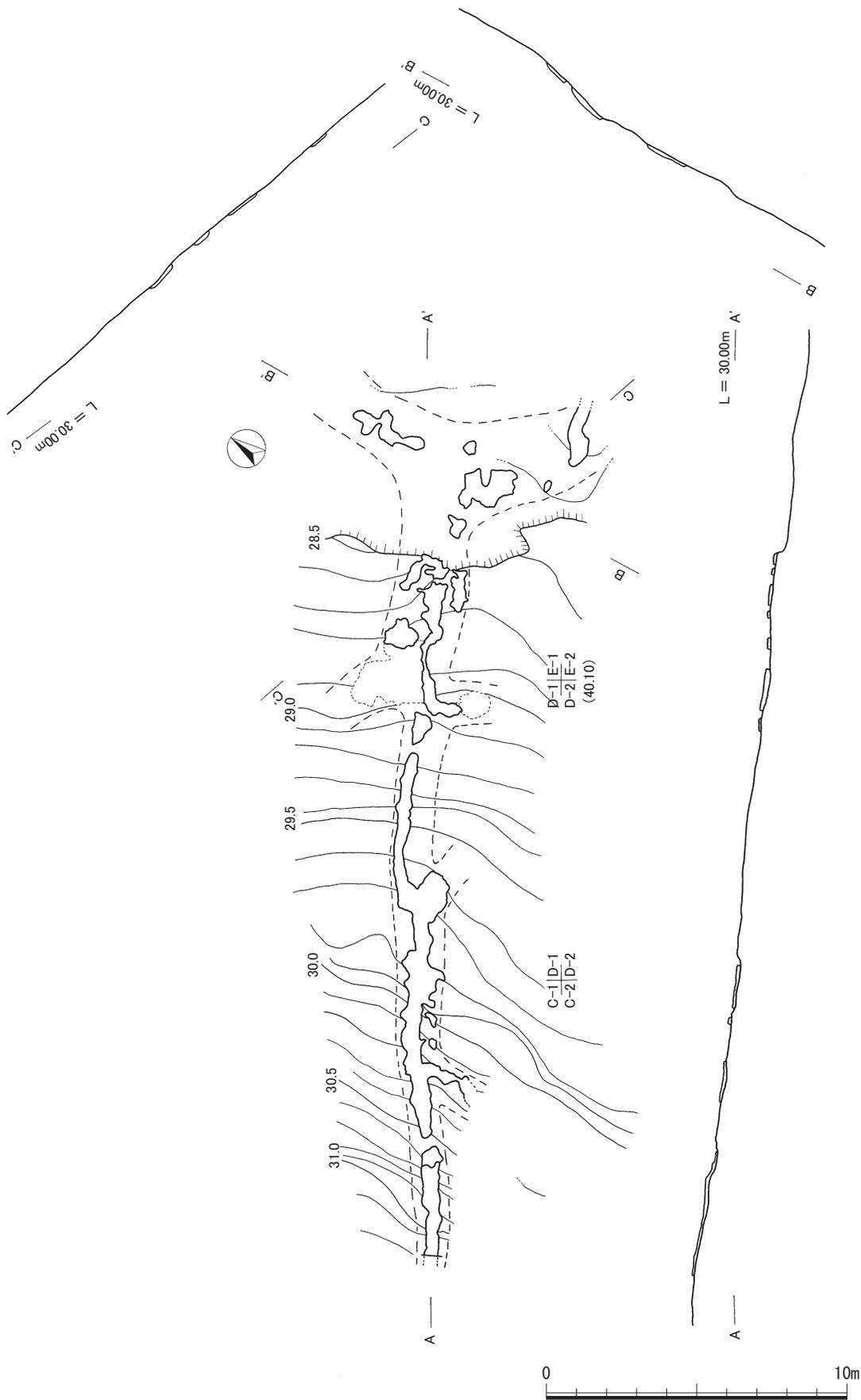
土層断面には硬化面が残っていたため、C-1区で分岐する道は竪穴建物跡へつながっていた可能性が考えられる。D-1区では焼土痕が残っており、何か燃やした形跡があった。中心部は濃い黒色で、ピット状になっていた。用途は不明である。

東西方向に設定したC・E-1・2区のベルトの北側のII層土を掘り下げる過程でC-1区で硬化面が検出された。検出された硬化面の状況や現在の地形を考慮しながら作業を進めるなかで、道跡の全体像が見えてきた。E-1区の東側は竹の根が張り巡り遺構を壊しており、硬化面の残りが悪かった。

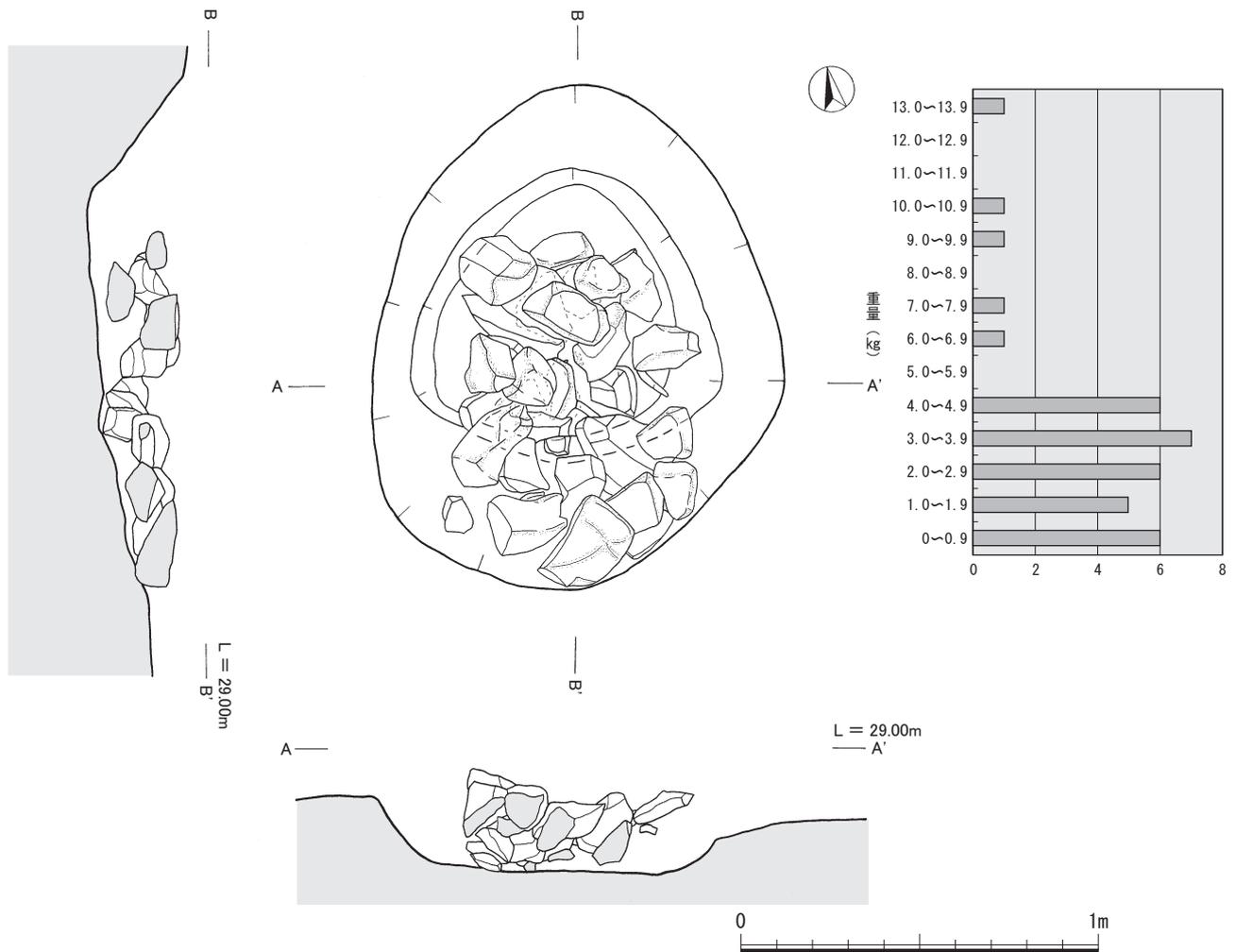
道跡はE-1区で二股に分かれ、北へ延びる道跡は谷部へ通じている。谷部には小川が流れている。

(工) 石組遺構 (第26図)

石組遺構はD-3区、II層から検出された。北側から南側に向けてやや傾斜している面に位置していた。礫は101cm×67cmの範囲に組まれ、周りに142cm×115cmの楕円形の掘り込みが検出さ



第 25 図 道跡



第 26 図 石組遺構

れた。掘り込みの床面は検出面より 26cm～34cm 下にあった。北側の掘り込みが急角度で深く、南側に向かって緩やかに浅くなっていった。床面はうっすらと焼土化し、まばらに炭化物が混じっていた。礫の総数は 35 個で、石材は安山岩であった。最も大きな礫は 31cm×12cm、最も小さな礫は 6cm×3cm、最も重い礫は 13.1kg であった。多くの礫は白化しているが、一部赤化しているものがあった。埋土は暗赤褐色土の単色、単層であった。一部炭化物があるが、ごく少量であった。

本遺構の特異な点は比較的礫が大きく、丸みをおびた礫の割合が高いということである。周辺から同じ材質、大きさの礫が多数みられることから、身近にある礫を使用した結果、構成する礫が大きくなったことも考えられる。遺構内に遺物はなく、用途については不明である。

(オ) 掘立柱建物跡 (第 27 図～第 30 図)

掘立柱建物跡は、2 間×3 間の建物が 3 棟検出された。そのうちの 1 棟は総柱であった。3 棟は C・D - 3～5 区、薩摩火山灰が脱色されているⅢ層上面でまとまって検出された。柱穴が揃わなかったのは堅穴建物同様、造成埋土が広がっていたためと考えられる。

1 号掘立柱建物跡 (第 28 図)

1 号掘立柱建物が C・D - 3・4 区、Ⅲ層上面で検出された。柱穴は 8 基あり、2 間×3 間の広

さと考えられる。主軸方向はほぼ南北であった。梁間柱間は 3.67 m，桁間柱間は 6.43 m であった。柱穴の規模は，P3 が最大で長径 40cm × 短径 37cm × 深さ 32cm，P4 が最小で 23cm × 21cm × 20cm，平均で 29.0cm × 27.4cm × 25.6cm であった。P2 と P5 は柱痕跡が確認できた。P1 と P7 にはⅣ層土のブロックが含まれていた。遺物は出土していない。埋土はにぶい黄褐色や暗褐色のⅡ層土にパミス・アカホヤ・Ⅳ層土・シラス等が少量混ざった物であった。

棟持柱と考えられる P8 が梁柱である P1 と P7 を結ぶ線よりも外側 85cm に位置している。P8 の対になる棟持柱は検出されなかった。P4 が検出されたので 2 間 × 3 間を想定し，破線で復元してあるが，2 間 × 2 間だった可能性も考えられる。

本遺構の東，およそ 2 m のところに 2 号掘立柱建物跡が検出された。主軸方向が南北と東西ではほぼ直交している。

2 号掘立柱建物跡（第 29 図）

2 号掘立柱建物が D - 3・4 区，Ⅲ層上面で検出された。柱穴は 12 基あり，2 間 × 3 間の広さの総柱の建物跡と考えられる。主軸方向はほぼ東西であった。梁間柱間は 3.85 m，桁間柱間は 6.36 m であった。柱穴の規模は，P8 が最大で長径 40cm × 短径 38cm × 深さ 32cm，P10 が最小で 26cm × 22cm × 30cm，平均で 31.7cm × 28.9cm × 27.8cm であった。P4 は柱痕跡が確認できた。P1，P2，P3，P6，P7，P11 には炭化物が含まれていた。遺物は出土していない。埋土は褐色，暗褐色のⅡ層土にパミス・アカホヤ・Ⅳ層土・シラス等が少量混ざったものであった。

棟柱と考えられる P11 と P12 は，P2 と P7 を結ぶ線上にはなく，P11 は南側へ 30cm，P12 は北側へ 10cm 離れたところへ位置している。P11 と P12 の間に，P2 から P7 への柱を通して固定していたと考えられる。

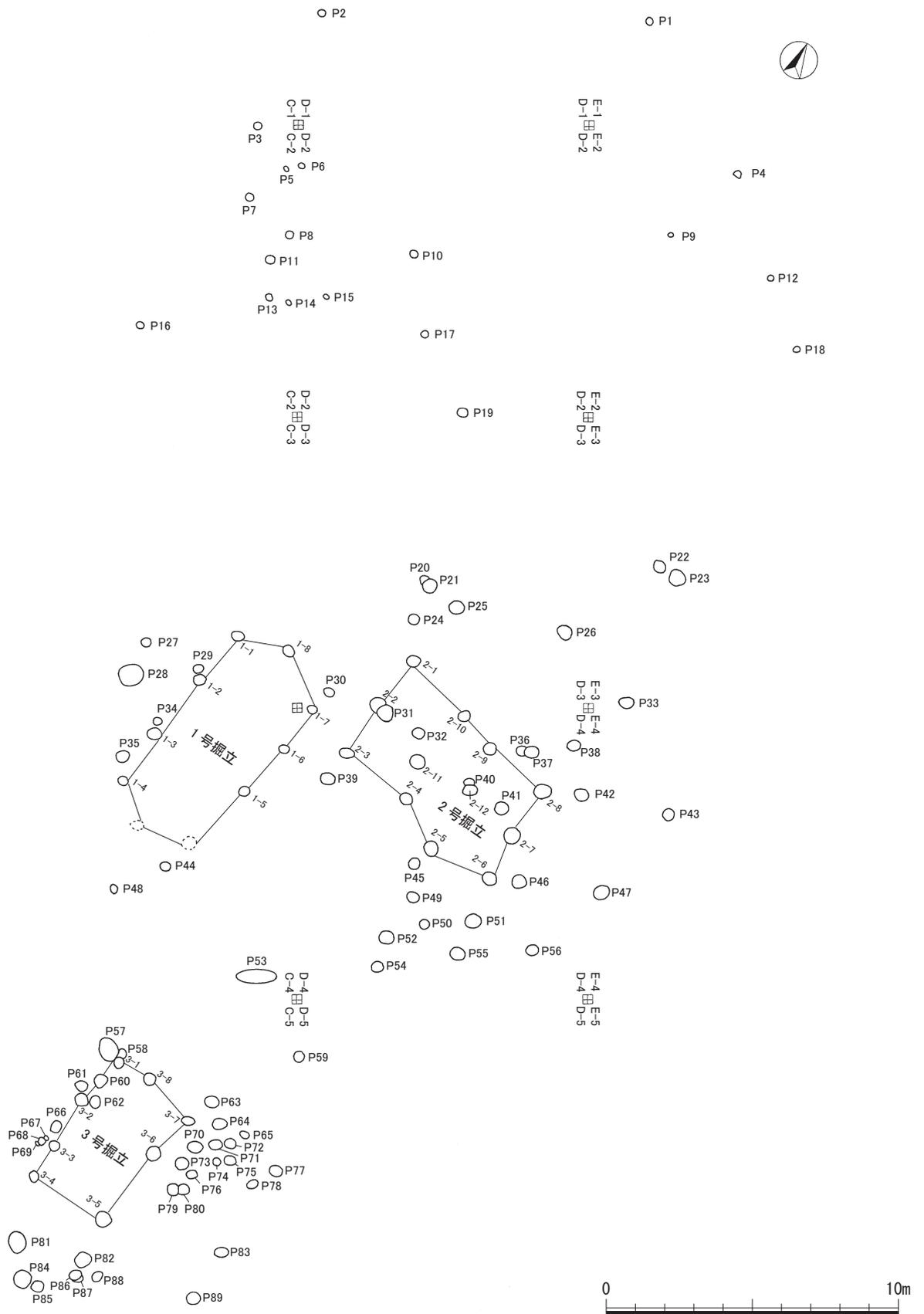
本遺構の北，およそ 2 m のところに第 26 図の石組遺構が検出された。両遺構とも中世のころの遺構であり，関連性が考えられる。

3 号掘立柱建物跡（第 30 図）

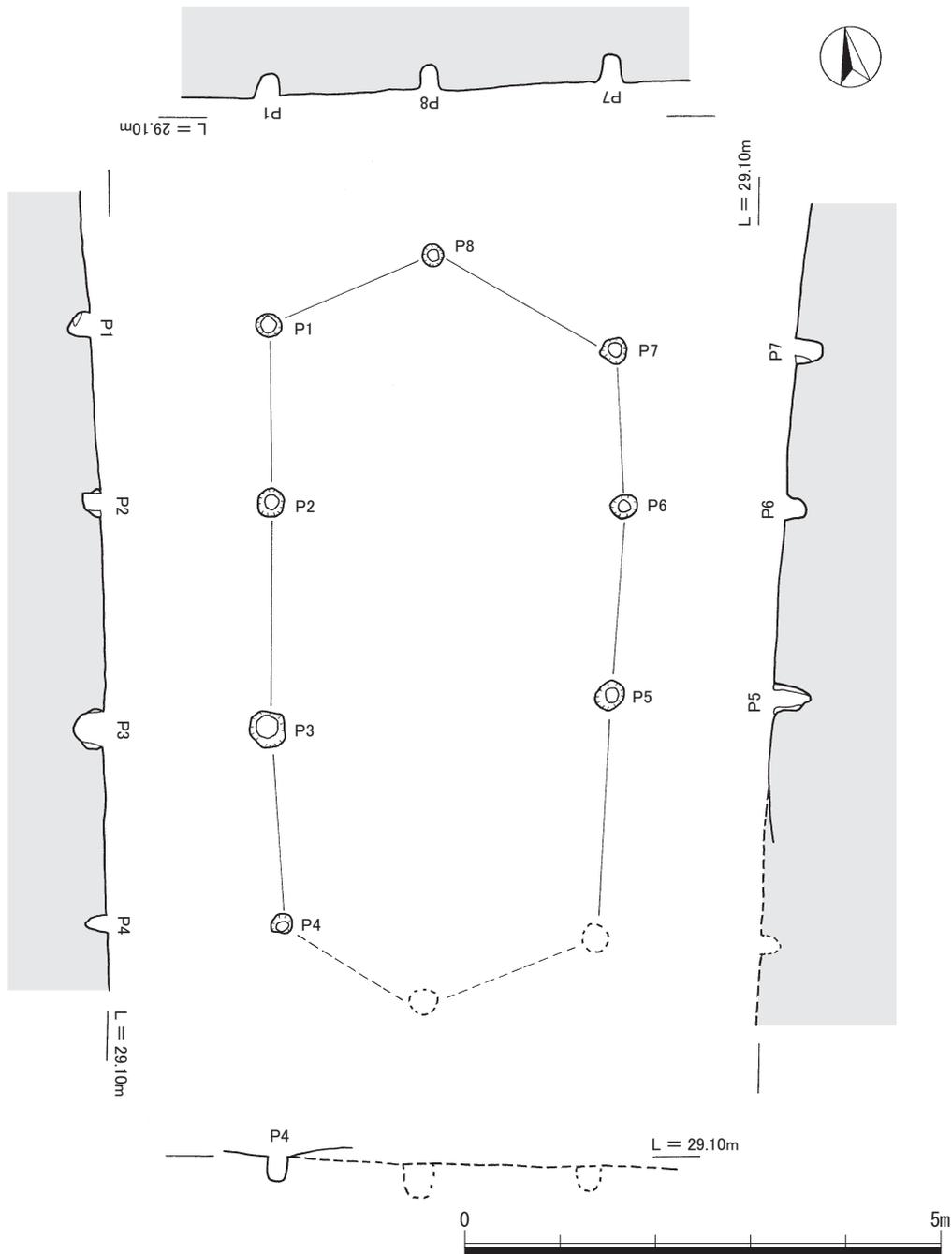
3 号掘立柱建物が C - 5 区，Ⅲ層上面で検出された。柱穴は 8 基あり，2 間 × 3 間の広さと考えられる。主軸方向はほぼ南北であり，梁間柱間は 2.96 m，桁間柱間は 4.72 m であった。柱穴の規模は，P5 が最大で長径 61cm × 短径 45cm × 深さ 65cm，P8 が最小で 21cm × 20cm × 42cm，平均 32.6 cm × 29.5cm × 42.5cm であった。1 号・2 号掘立柱建物跡に比べると柱穴の深さが深い。P1，P2，P3，P4，P7，P8 には炭化物が含まれていた。P2，P4，P6，P7 は柱痕跡が確認できた。遺物は出土していない。埋土は黒褐色，褐色の層土にパミス・アカホヤ・Ⅳ層土・シラス等が少量混ざったものであった。

本遺構は 1 号掘立柱建物跡と構造が同じである可能性がある。P8 は棟持柱と想定しているが，対の棟持柱が検出されていない。また，P5 と P6 の間にあると想定される柱穴も検出されていない。1 号掘立柱建物跡と同様 2 間 × 2 間の可能性も考えられる。

本遺構の東，およそ 2 m のところに 1 号・2 号炉跡が検出されている。両遺構とも中世のころの遺構であり，関連性が考えられる。



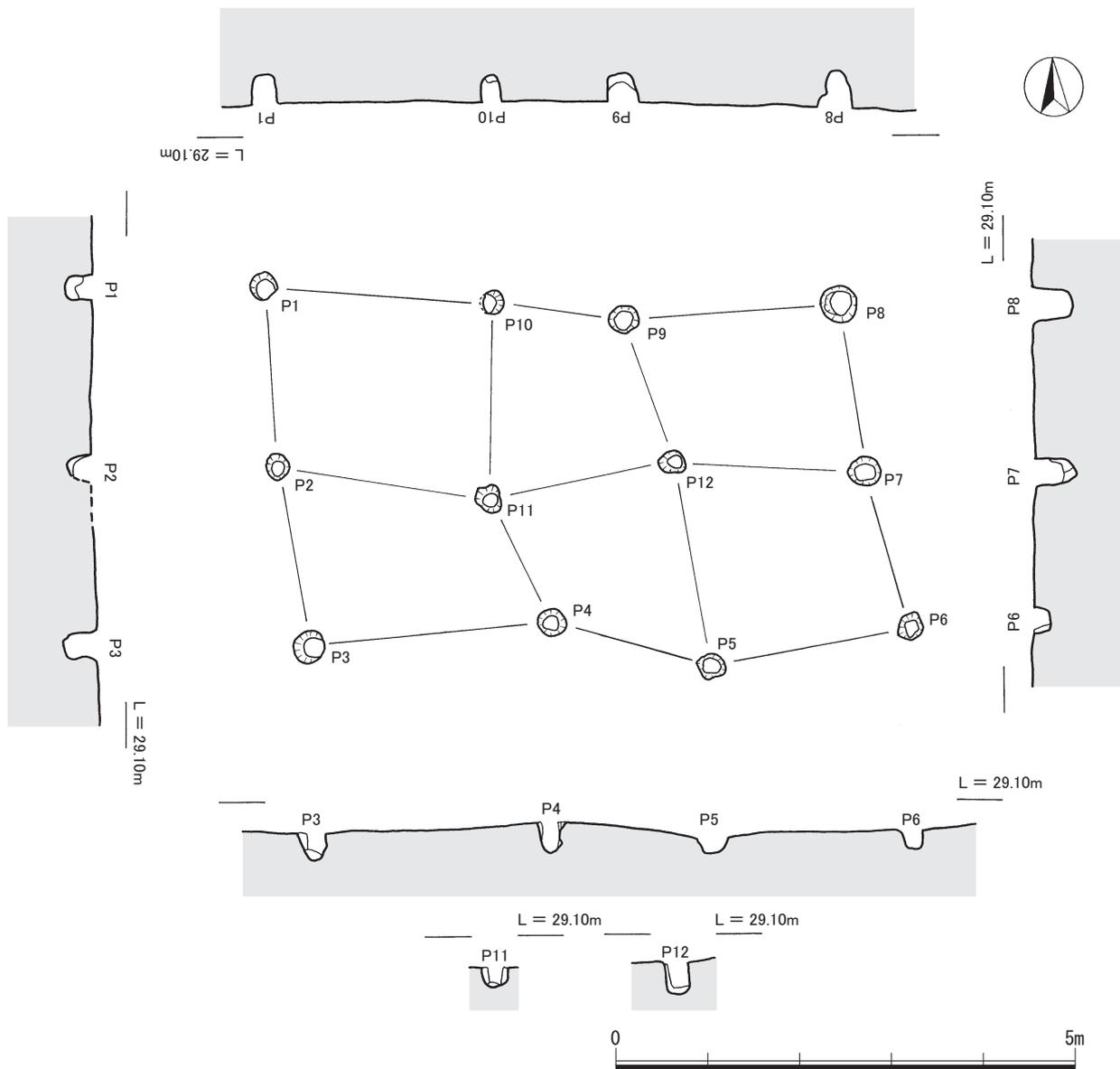
第 27 图 掘立柱建物跡柱穴位置



第 28 図 1 号掘立柱建物跡

表 6 1 号掘立柱建物跡観察表

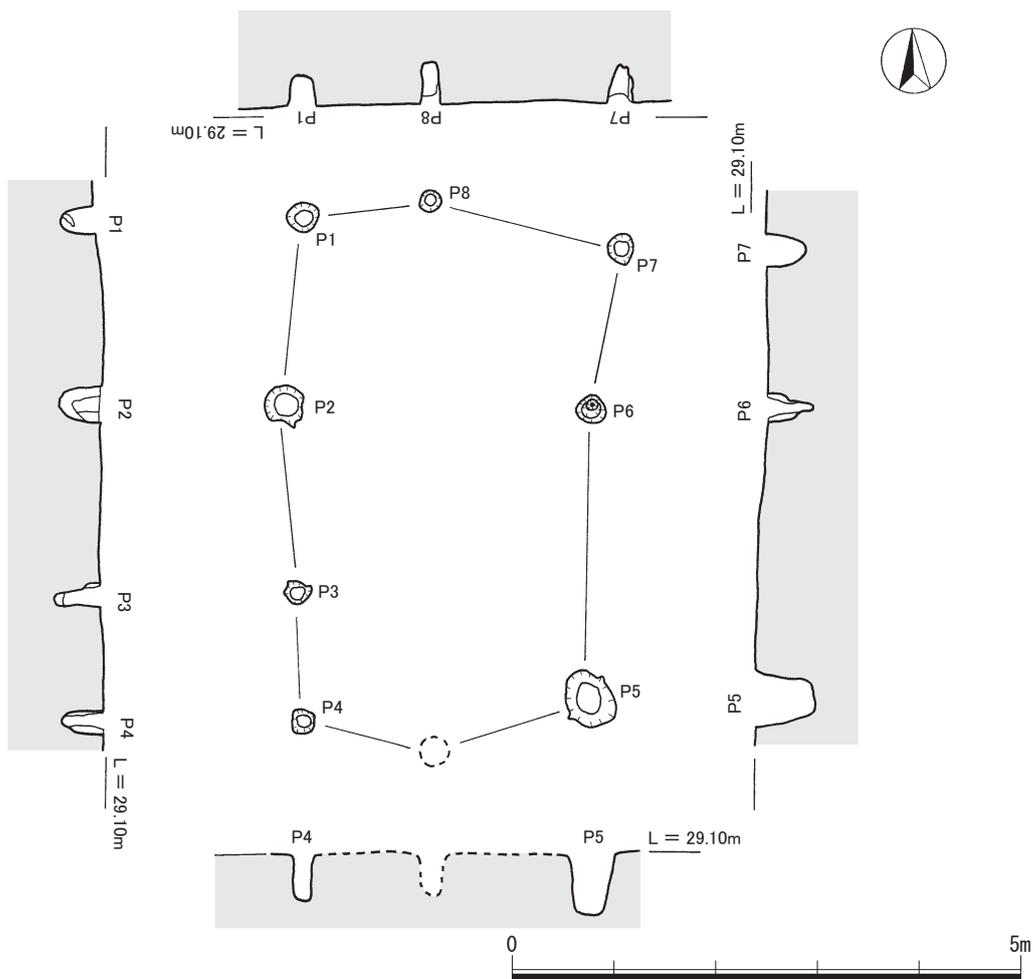
建 物	梁間柱間(m)		桁間柱間(m)		柱穴の長径 × 短径 × 深さ(cm)					
	間数	距離	間数	距離	柱番号	長径	短径	深さ	備考	
1	2 間	P1 ~ 7 3.67	3 間	P1 ~ 4 6.43	P1	28	×	27	×	22
					P2	30	×	28	×	18
検出区	P1 ~ 8	1.89	P1 ~ 2	1.90	P3	40	×	37	×	32
C・D-3・4	P8 ~ 7	2.13	P2 ~ 3	2.42	P4	23	×	21	×	20
			P3 ~ 4	2.11	P5	31	×	32	×	38
桁行方位	P1 ~ 4	W-8°	P7 ~ 6	1.66	P6	28	×	26	×	22
P6 ~ 5			2.04	P7	28	×	26	×	27	
平均	2.01	2.03	P8	24	×	22	×	26		
			平均	29.0	×	27.4	×	25.6		



第 29 図 2 号掘立柱建物跡

表 7 2 号掘立柱建物跡観察表

建 物	梁間柱間(m)		桁間柱間(m)		柱穴の長径 × 短径 × 深さ(cm)							
	間	間	間	間	間	間	間	間	間			
2	2 間	P1 ~ 3	3.95	3 間	P1 ~ 8	6.25	P1	32	×	30	×	29
		P8 ~ 6	3.75		P3 ~ 6	6.50	P2	29	×	22	×	25
検出区	D-3・4	P1 ~ 2	1.96	3 間	P1 ~ 10	2.45	P3	32	×	32	×	30
桁行方位		P2 ~ 3	2.04		P10 ~ 9	1.46	P4	30	×	29	×	33
		P10 ~ 11	2.17		P9 ~ 8	2.34	P5	32	×	31	×	14
P2 ~ 7 W-88°		P11 ~ 4	1.53		P2 ~ 11	2.32	P6	29	×	23	×	19
		P9 ~ 12	1.69		P11 ~ 12	2.07	P7	35	×	33	×	44
平均		P12 ~ 5	2.28		P12 ~ 7	2.07	P8	40	×	38	×	32
		P8 ~ 7	1.87		P3 ~ 4	2.64	P9	34	×	32	×	30
平均		P7 ~ 6	1.79		P4 ~ 5	1.81	P10	26	×	22	×	30
			P5 ~ 6	2.20	P11	31	×	28	×	20		
					P12	30	×	27	×	27		
平均		1.92		2.15		31.7		28.9		27.8		



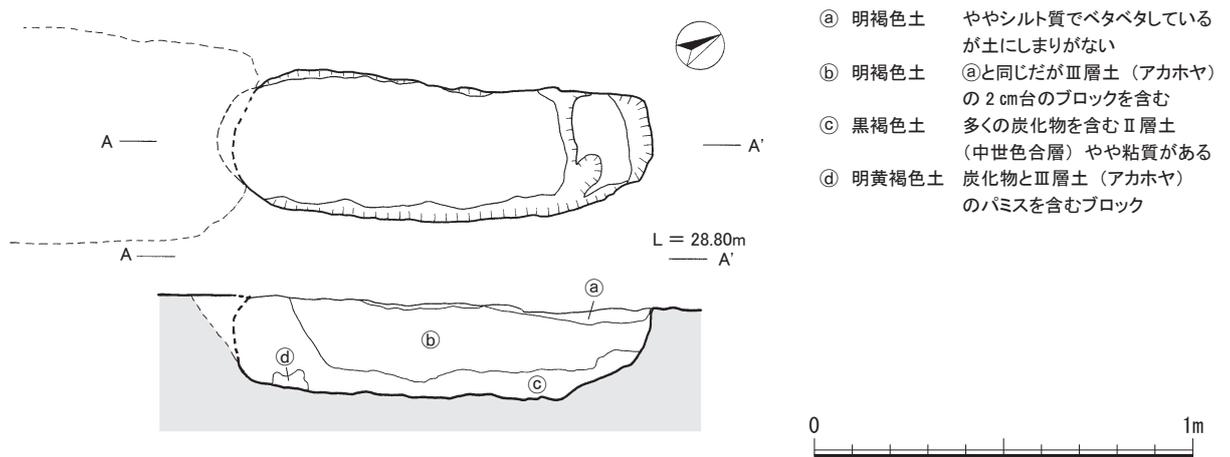
第 30 図 3号掘立柱建物跡

表 8 3号掘立柱建物跡観察表

建 物	梁間柱間(m)		桁間柱間(m)		柱穴の長径 × 短径 × 深さ(cm)							
3	2 間	P1 ~ 7	3.16	3 間	P1 ~ 4	4.97	P1	31	×	30	×	32
		P4 ~ 5	2.77		P7 ~ 5	4.47	P2	38	×	38	×	40
検出区		P1 ~ 8	1.26		P1 ~ 2	1.85	P3	26	×	25	×	34
C-5					P2 ~ 3	1.86	P4	26	×	24	×	43
				P8 ~ 7	1.96	P3 ~ 4	1.27	P5	61	×	45	×
桁行方位					P7 ~ 6	1.60	P6	28	×	27	×	47
P1 ~ 4 E-2°					P6 ~ 5	2.86	P7	30	×	27	×	37
平均			1.61			1.89		32.6		29.5		42.5

(カ) 近世土坑 (第 31 図)

土坑が D - 3 区, II 層より出土した。規模は 110cm × 40cm である。南北方向に位置しており, 北側の壁から 25cm の部分の床面が高くなっていた。南側は攪乱にかかっており, はっきりとした遺構の形は分からなかった。埋土は 4 つに分層できた。II 層土, III 層土のブロックを含む層があり, 人工的につくられた土坑の可能性が高い。粘質性があるという共通特徴から, a の層の土が b や c の層にも入り込んでいることが分かる。本遺構周辺の中世のころの遺構の埋土をみると, 包含層である II 層土が密に入っている。本遺構の埋土の II 層土はそこまで密に入っているわけではない。時期としては, 中世の終わりから, 近世, 近代という想定になる。遺構内から遺物は出土していない。用途は不明である。



第 31 図 近世土坑

(キ) 山仁田溜池 (第 32 図) (「T」のついたトレンチは平成 22 年度調査時のものである。)

川内市(現薩摩川内市)が昭和 51 年に発刊した川内史資料集 7 によると, 同市青山町に山仁田溜池が存在して, 廃池になっている記録が整理作業中に分かった。場所は「青山公民館の手前道路脇で, 開発年代は不明であるが, 江戸末期から明治期の開発かとの説もある。」と記載されている。規模は 4 反 3 畝で, 今のメートル法では 4,300㎡である。

このことが分かったのは, 調査中の I 地区は雨が降ると, 沈殿層と思われる土が田圃状になり, 7 T トレンチでは泥炭層が検出されていた。このことは調査中一見池底とも考えられる推測もあった。そして, 文献調査をした結果, 山仁田溜池の可能性が大きいとの判断をする。時期的には, 江戸期の可能性が強く, 薩摩藩の新田開発の技術としてトレンチの写真等で範囲を確定し, 記録に残すことにした。

発掘調査では二段の窪地になって確認された。

一段目の輪郭は H - 8・9 区の 14・15 トレンチでは水成の沈殿層がみられず, G - 8・9 区の 13 トレンチでは乳白色の沈殿層がみられた。よって, この間が池境線と思われる。

E・F - 3 ~ 5 区では 13 トレンチ, 18 T トレンチ, 15 T トレンチでは水成層がみられず, 19 T トレンチの段差から 16 T トレンチを含む南側に乳白青色の水成層が広がっている。よって, この段差が池境の一部と思われる。

C～E-1～7区では、4 Tトレンチに段差があり低い所は乳白青色の水成層がみられる。また、同トレンチのC-5区では段差がみられた。C-2区では堅穴建物跡で段差がみられ、北側端の線が認められた(図版13)。5 Tトレンチでは明瞭な段差がみられ、下位は水成層で、段上は盛土がみられた。これらの段差は池境線と思われる。

二段目の深い窪みは、D～F-10の7 Tトレンチ(図版22)でみられるように基盤層の上に泥炭層がみられ、その上に厚い沈殿層がみられた。また、ここは沈殿層の上に畦道状の切り土塁が発見されている。これは沈殿層が発達した後に盛土されて造られたもので、後世のものと思われる。ここは現地地形表面より、約1 m 50cm深い所にあたり調査した基盤層までは約2 mの差になる。

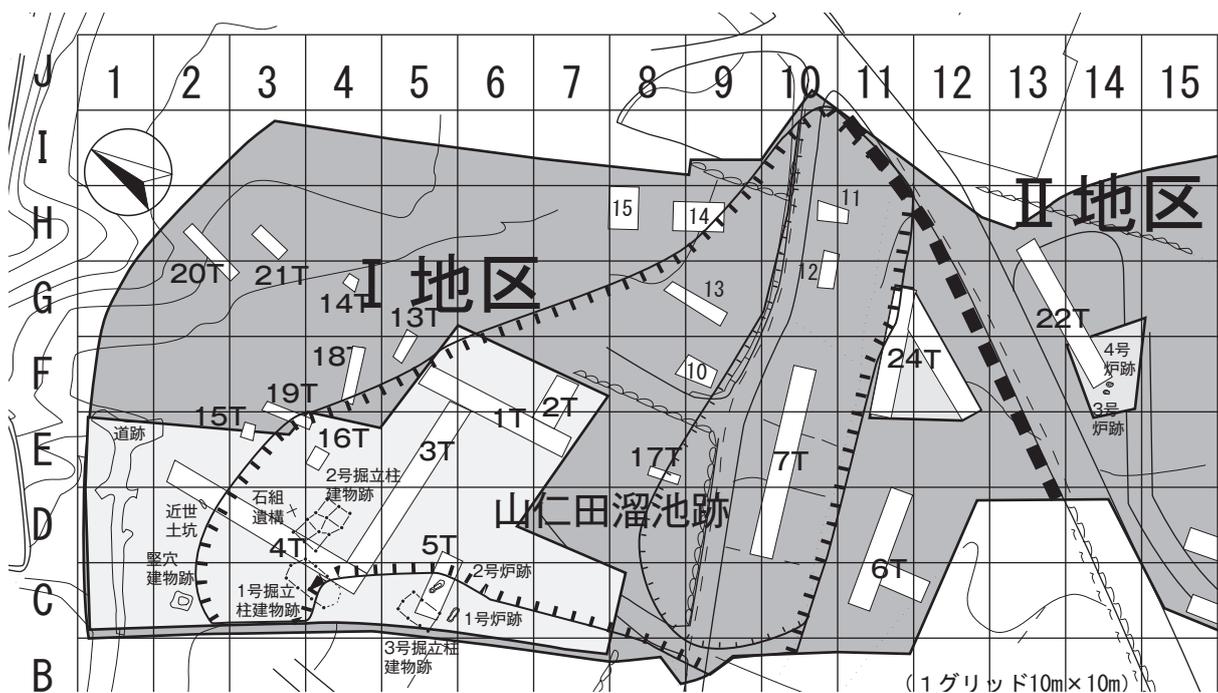
また、この深い窪地の北側辺は図版23の17 Tトレンチでの確認で、沈殿層が窪地状に埋まり深くなって検出した。南側辺は24 TトレンチのH-11区で深い段差が確認されたのでC～H-10・11の段差部分である。これから判断すると約2 mの深い窪地はB～I-10・11区にあたり、長さ80 m、幅18 mで約1,300㎡である。なお、この段の深い南側の落ち際は一段目と重なる。

これら全体の底面は計算すると約4,000㎡で、土盛り等の周辺を含めると文献に出てくる面積に近い4反3畝(4,300㎡)と思われる。よって、この輪郭が山仁田溜池と推測される。

出土遺物は中世と近世が混在して出土したが、層位的に分けられず、Ⅲ地区の溜池遺構の中世溜池と近世水田を分けられたようには解明できなかった。

川内市資料集7「川内の溜池」による位置図の溜池の位置とは同調査区が重なる。資料図の形も三角形で、調査で検出した形も三角形であるので、可能性は高いと思われる。時期は不明であるとの記載があり、後書きで述べている近世以前の判断はできなかった。

同じ溜池で、Ⅲ地区の溜池遺構と山仁田溜池の差は、立地条件が異なる。Ⅲ地区の溜池遺構は、小規模で低地に形成されている。山仁田溜池は、大規模で台地に造られている。これは利用の頻度の違いで、中世と近世の差かも知れない。



第32図 山仁田溜池の範囲

イ Ⅲ地区

溜池遺構・水田遺構（第33・34図）

溜池遺構と水田遺構をG～I-17～19区で検出した。21年度の調査で、G-17・18区に第3トレンチを入れて先行調査を行った。近世から近代にかけての水田跡が検出され、22年度は第3トレンチを拡張しG・H-17・18区の全面調査を行った。拡張した範囲は包含層の崩れにより残りが悪く、遺構の検出は一部であった。

第3トレンチの拡張と併せて、H・I-17・18区に第9トレンチを入れ調査を行った。第9トレンチからは近世の石畳が検出された。また、トレンチの断面から複数の沈殿層を確認した。その結果をふまえ、第9トレンチを拡張し、H・I-17・19区を全面調査したところ、土手・水田2面・溝2条が検出された。

土手や多数の礫の意味は発掘中には分からなかったが、整理作業の中で、図面整理や周辺地形・出土遺物の確認を通して、中世のころ溜池遺構として利用された可能性がみえてきた。溜池遺構と考えた理由として、本遺構の東西のそれぞれ端の部分で土手と土手の上の道を検出したことやJ-18区に土塁の跡が見られること、J-18区の北に溜池のせき止め口があったと考えられる地形を確認できたことが挙げられる。水田面に関しては、出土遺物から判断して、近世のころに使用していた可能性が高い。本遺跡は、中世のころ溜池として利用した後、西側を水田として利用したと考えられる。

溜池遺構と水田遺構の詳細について、順に述べていく。

溜池遺構

G・I-17～19区で、15m×15mの範囲で半円の溜池跡を検出した。土手から床までの深さはおよそ40cmであった。南東部に礫が多数あり、集中しているところとあまりないところの差が明確で、自然に礫がたまったというよりは、人の手によって置かれたという印象を持った。水汲みやその他の用途を行うために礫を置いたことも考えられる。南東部と北東部の一部で土手と土手沿いの道跡を検出した。これにより、溜池遺構のおおよその範囲が予想できた。西側のH-17・18区では、包含層の崩れにより残りが悪く、北西の一部でしか本遺構を確認できなかった。検出できた部分（図面上の実線）をもとに、破線で復元した。

出土した遺物は第47図の165～180である。時期は中世である。

本遺構の場所は地下水脈があり、水が湧いてくる場所が複数存在した。雨が降った後、数日間は湧く量が増え、ポンプで汲み上げないと作業できないほどであった。周辺に水が湧き出るところはなく、貴重な水場だったと考えられる。水場は、人の生活に欠かせないものである。水場を中心に生活圏が形成されることを考えると、3号・4号炉跡が検出されているF-14区も関係が強いように思われる。また、21年度に調査したE～H-23～25区でも羽口がでており、水を扱う工房があり、本遺構の水を利用していたことも考えられる。第12トレンチを配置した場所周辺は本遺構から近く、堅穴建物や工房などの遺構が検出された可能性が高いと思われるが、宅地造成されており、包含層は残っていなかった。

本遺構の東側に、東西方向に台地から沖積平野へ降りる道がある。この道は台地側にも延びており、台地全体に生活圏があったことが考えられる。台地上の生活圏のまとまりを考えると、第7ト

レンチをいれた10区に水の湧き出る谷部があることから、生活圏は11区～26区の可能性がある。

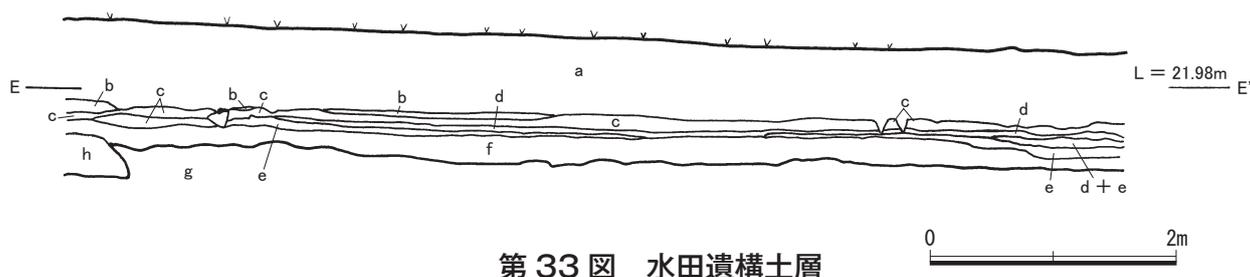
水田遺構

I-18区でグライ化した近世の沈殿層を検出した。沈殿層の厚さが薄いことや遺物量が少ないことなどの状況から、水田と判断できるのは土層断面中のc, d, e層である。d層は鉄分とマンガンの沈着がみられ水田の床面と考えられる。また、e層の下面に部分的にはあるが、d層と同じように鉄分やマンガンの沈着が確認できる場所があった。このような状況から、水田面はc層とd層で構成される面と、e層とその下面に部分的に確認できる層で構成される面のあわせて2面あったことが考えられる。出土した遺物は第46図160～164である。時代はいずれも近世であり、本遺構も近世のものと考えられる。

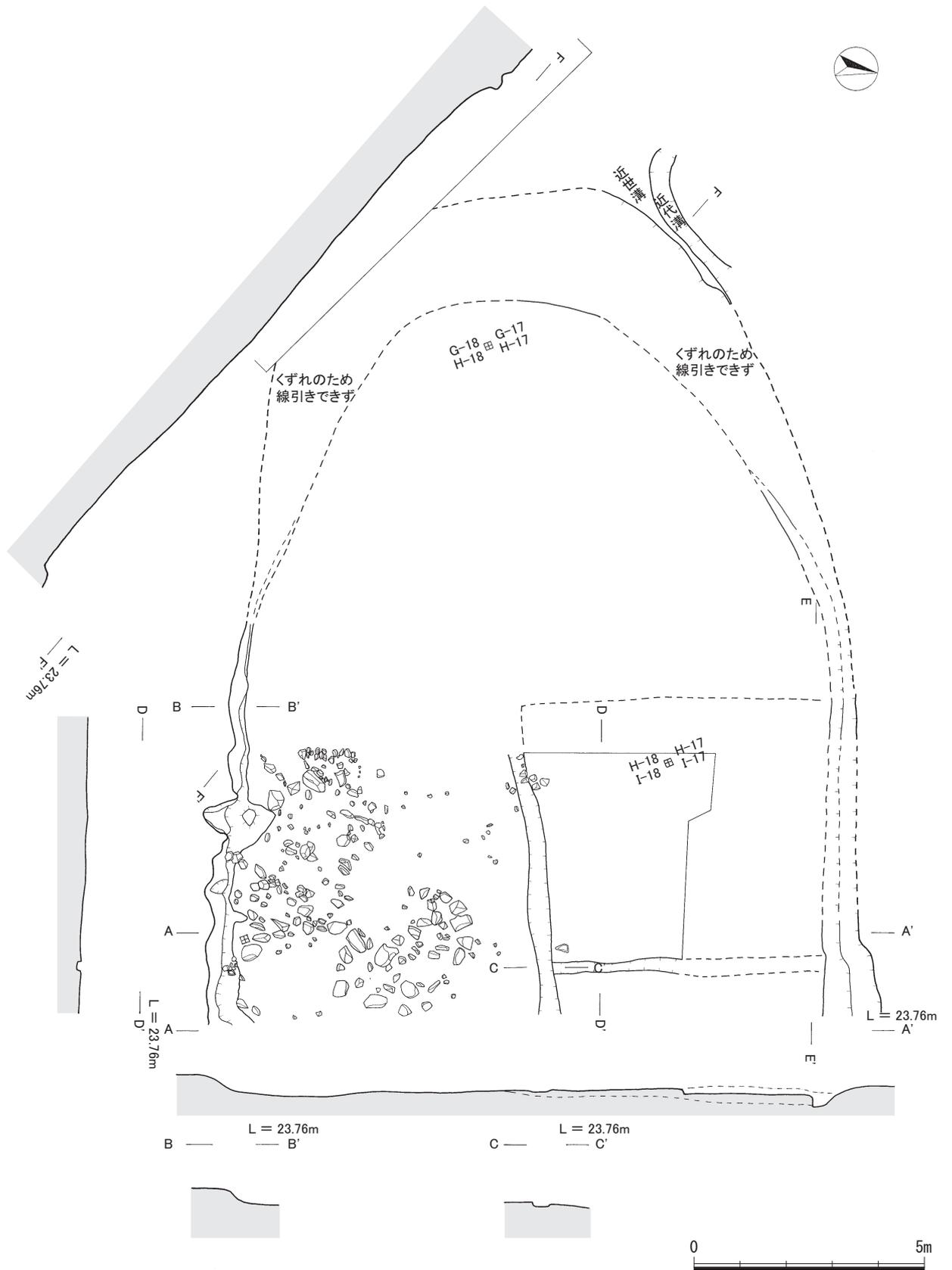
また、水田面から、南北方向へ延びる溝（幅30cm～50cm、深さ10cm程度）1条、東西方向へ延びる溝（幅20cm～30cm、深さ10cm程度）1条の計2条の溝跡を検出した。調査を進める過程で、まず、c層から東西に延びる溝を検出し、次に、e層から南北へ延びる溝を検出した。切り合いの関係から、東西の溝が南北の溝を切っており、南北の溝の方が古く、層位との整合性もとれている。2本の溝は直交から少しずれる形で交わっていた。この状況から、e層の時期に溝で2枚に分けて使っていた水田を、c, d層の時期に溝をとり拡張して1枚の水田として利用したことを読み取ることができる。

E-E'の土層断面から、g層の礫群の上にf層の粘土質の沈殿層があり、その上にc層、d層、e層の水田の層が形成されたことが考えられる。また、土層断面の西側に土手の一部が残っていた。この状況から、h層（Ⅲ層該当）を削って溜池をつくり、利用する過程で礫や泥が流れ込み、礫層のg層とその上に粘土質のf層が形成され、その後、その粘土質を利用する形で水田開発が行われたと考えられる。また、東側の層の落ち込み具合が、c層、d層、e層と共通していることから、水田として利用されていた期間は、ほぼ同じような土地の利用の仕方をしていたことが考えられる。

21年度調査の第3トレンチ（図版21-上）と22年度調査の第9トレンチ（図版21-下）から石畳が検出された。21年度調査の第3トレンチで検出された石畳はおよそ80cmの大きな礫と10cm～40cm大の礫で構成されており、帯状に東西方向に延びていた。22年度調査の第9トレンチで検出された石畳は10cm～40cm大の礫で構成されており、帯状に東西方向に延びていた。構造や用いられた礫の大きさ・材質から判断して、同時期の石畳の可能性が高く、水田へ向けて西から東へ延びていたものと考えられる。G～I-17～19区は地盤がゆるく、水田へ行くために石畳を利用したことが考えられる。両トレンチ間の包含層の残りが悪く、石畳の全貌を知ることはできなかったが、石畳があることを踏まえると、H-17・18区も水田として利用されていた可能性が考えられる。



第33図 水田遺構土層



第 34 図 溜池遺構および水田遺構

(2) 遺物

この時期の出土遺物は遺構との関係で次の通り大きく4か所に分けて説明をする。その分け方は次の通りである。

- I 地区 1号・2号炉跡，石組，掘立建物跡，竪穴建物跡等があるB～G-1～9区
- II 地区 3号・4号炉跡検出周辺のF-14区（掲載は遺構図内に）
- III 地区 水田遺構・溜池遺構内のG～I-17～19区
- IV 地区 遺構はないが台地先端のE～H-23～25区

ア I 地区

この群は土師器の埴，坏，皿，甕，鉢，盤，須恵器の壺，瓦質土器の播鉢，火舎，白磁・青磁の碗，盤，染付の碗，陶器の埴，鉢，壺，釜道具，砥石，古銭等が出土している。

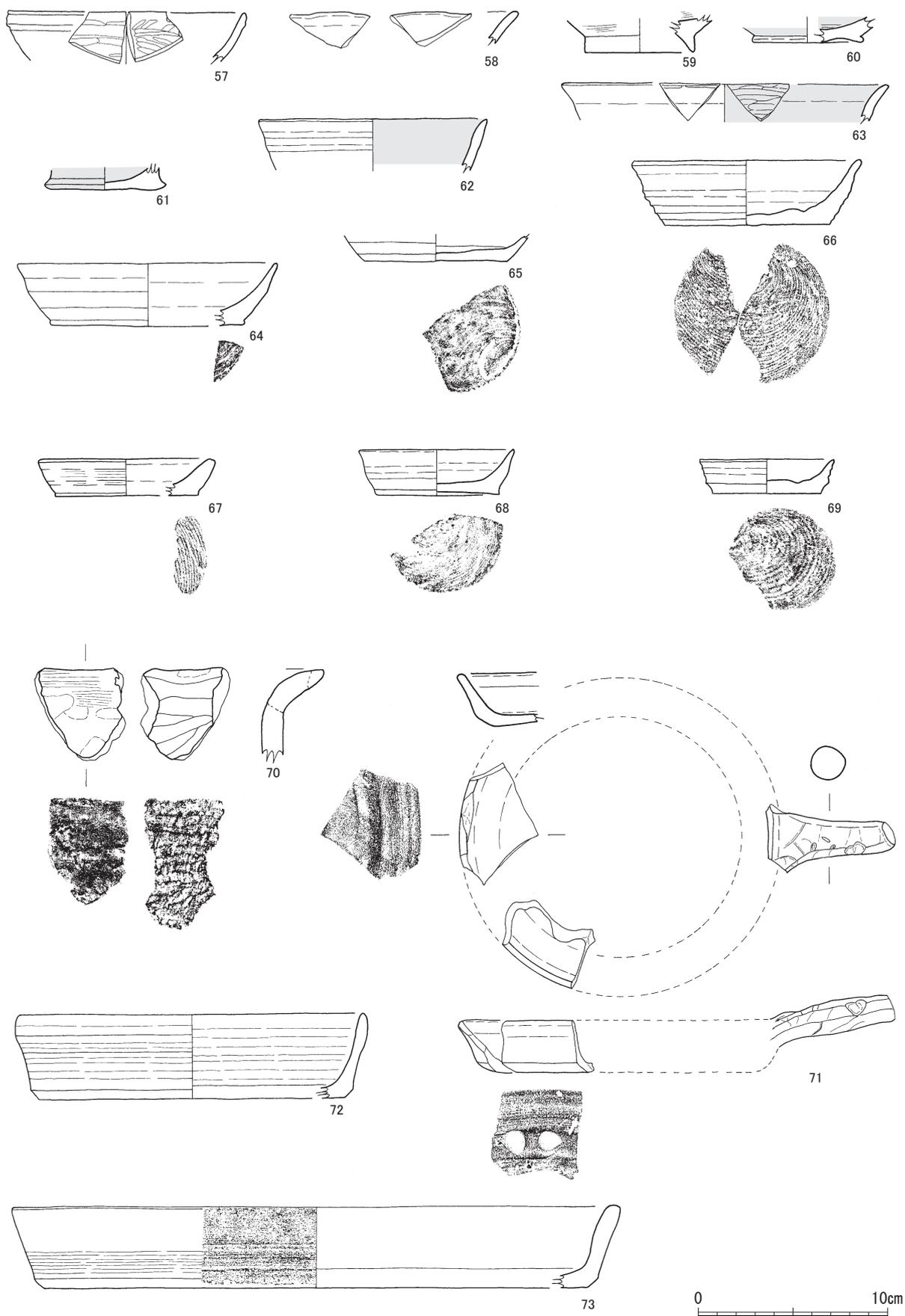
(ア) 土師器埴(57～63) (第35図)

この土器には57～59の土師器と60～63の黒色土器系が出土している。

57は口縁部で，器形は内側に彎曲し，口縁外面に玉縁突帯をもつものである。器面には主に横位のミガキがかけられ，内面の口縁部に細い沈線が施されている。焼成は硬くて良い。この土器は白磁の玉縁口縁を模して作られたと思われる。58は口縁部で，外側に外反した器形である。特徴としては，口唇部が波状に作られ，菊花皿風の整形である。器面調整はミガキで，焼成は硬くて良い。59は底部である。高台はやや高く，直に立っている。器形では見込みの底面がやや凹みがみられる。器面調整はロクロでのナデである。胎土は粒子が細かい土を使っている。色調は明茶褐色である。焼成は良い。60は外開きで低い高台の底部である。高台の端部は丸く作られている。器面調整は内面が強いミガキをかけ，外面はナデがみられる。色調は内外面黒色で，胎土は色調が灰色で粒子の細かい粘土を使用している。61は外開きで低い高台の底部である。高台の端部は丸く作られている。器面調整は内面が強いミガキをかけ，外面はナデがみられる。色調は内外面黒色で，胎土は色調が灰色で粒子の細かい粘土を使用している。62は直行する口縁部である。器面には主に横位のミガキがかけられ，内面は薄い黒色で，外面は口唇部が薄い灰黒色である。胎土は粒子の細かい土を使っている。焼成は硬くて良い。63は外反する口縁部である。器面には主に横位のミガキがかけられ，内面は黒色で，外面は口唇部が灰黒色である。胎土は粒子の細かい土を使い，焼成は硬くて良い。

(イ) 土師器坏・皿(64～69) (第35図)

64は底径10cmの広いタイプで，口径13.6cm，器高3.3cmある。器形は底部からの立ち上がりが内側に丸みをもちながら外向し，口縁部は直に立っている。底部は糸切り離しで，器面調整は外面がロクロ仕上げの後，下部にヘラキリを行っている。内面はロクロ調整後，ミガキを行っている。器面・胎土の色調は基本が茶褐色で一部の底部から胴部に掛けて黒斑がみられる。65は底径が7.4cmで，ヘラキリである。器面は内面がナデで，色調は灰白色である。外面はヘラナデで，色調が灰茶褐色である。66は底径8.5cmの広いタイプで，口径11.7cm，器高3.4cmある。器形は底部からの立ち上がりが内側に丸みをもちながら外向し，口縁部は小さく外反する。底部は糸切り離しで，器面調整は外面がロクロ仕上げの後，下部にヘラキリを行っている。内面はロクロ調整後，ミガキを行っている。器面・胎土の色調は基本が暗茶褐色で，一部の底部から胴部に掛けて黒斑がみられる。67は立ち上がりが低く，底径が狭いタイプで，底径7.5cm，口径9.5cm，器高2cmである。立ち上がり



第 35 図 I 地区出土遺物(1) 土師器 (埴・坏)

は外側に直線状にロクロで引いている。切り離しは糸を使っている。器面調整は内面がナデで、外面はヘラ引きである。器面・胎土の色調は両面・胎土とも暗茶褐色を呈している。68は底径が6.6cm、口径8cm、器高2.4cmで、立ち上がりは少々開く器形である。切り離しは糸を使い、器面はロクロ引きの後ナデ調整をしている。器面・胎土の色調は両面・胎土とも茶褐色を呈している。69は底径が5.6cm、口径7.0cm、器高1.7cmで、立ち上がりは少々開く器形である。切り離し方は糸を使い、器面はロクロ引きの後ナデ調整をしている。器面・胎土の色調は内面が茶褐色で、外面が赤茶褐色を呈し、胎土は茶褐色である。

(ウ) 甕 (70) (第35図)

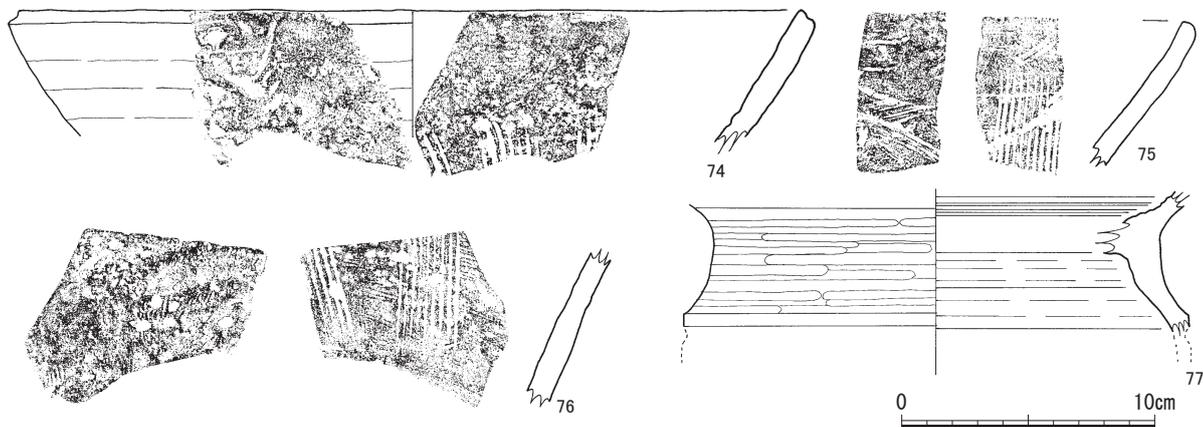
70は甕の口縁部である。器形は頸部で「く」の字状に折れ、外反し、口唇部は尖り気味に整形している。器面調整は口縁部及び外面がヘラナデを行い、内面は横位のヘラケズリである。色調は口縁部から外面が褐色で、内面及び胎土が黄茶褐色である。胎土は粒子の粗い粘土を使い、細礫も混入している。

(エ) 焙烙 (71～73) (第35図)

71は焙烙である。3片が同一胎土及び焼成に類似しているため同一個体として復元をした。底部は平底であるが、体部との境はカット面がみられ、その一部に指圧痕がある。口縁部は平坦であるが器形は外反している。柄の部分の径1.8cm、長さ5cmである。色調は黄燈色で外面に煤が付着している。胎土は細かい粘土を使用している。72・73も焙烙と思われる。72は口径が18cm、73は32cmである。器高は共に4.5cmである。底部の角はカット面を作り71に類似し、立ち上がりは直行している。色調は72が明茶褐色である。73は暗茶褐色で、外面に煤の付着がある。胎土は共にやや粗い粘土を使用している。

(オ) 瓦質土器 播鉢 (74～76)・火舎 (77) (第36図)

74～76は瓦質の播鉢である。74は直行した外開きの器形で、口唇部は溝を施している。播溝は1セットが7本で、約1cm間隔に施している。器面調整はヨコナデで、色調は明茶褐色である。胎土はやや細かい粒子の粘土を使用している。75は直行した外開きの器形で、口唇部は溝を施している。播溝は1セットが10本以上である。器面調整はヨコナデで、色調は明茶褐色である。胎土はやや細かい粒子の粘土を使用している。76は直行した外開きの器形である。播溝は9本セットで、見込みの底で約1.5cm間隔に施している。器面調整はヨコナデで、色調は主に内外面が黒灰色で、見込みの口に黄茶褐色みられる。胎土はやや細かい粒子の粘土を使用している。77は火舎の口縁



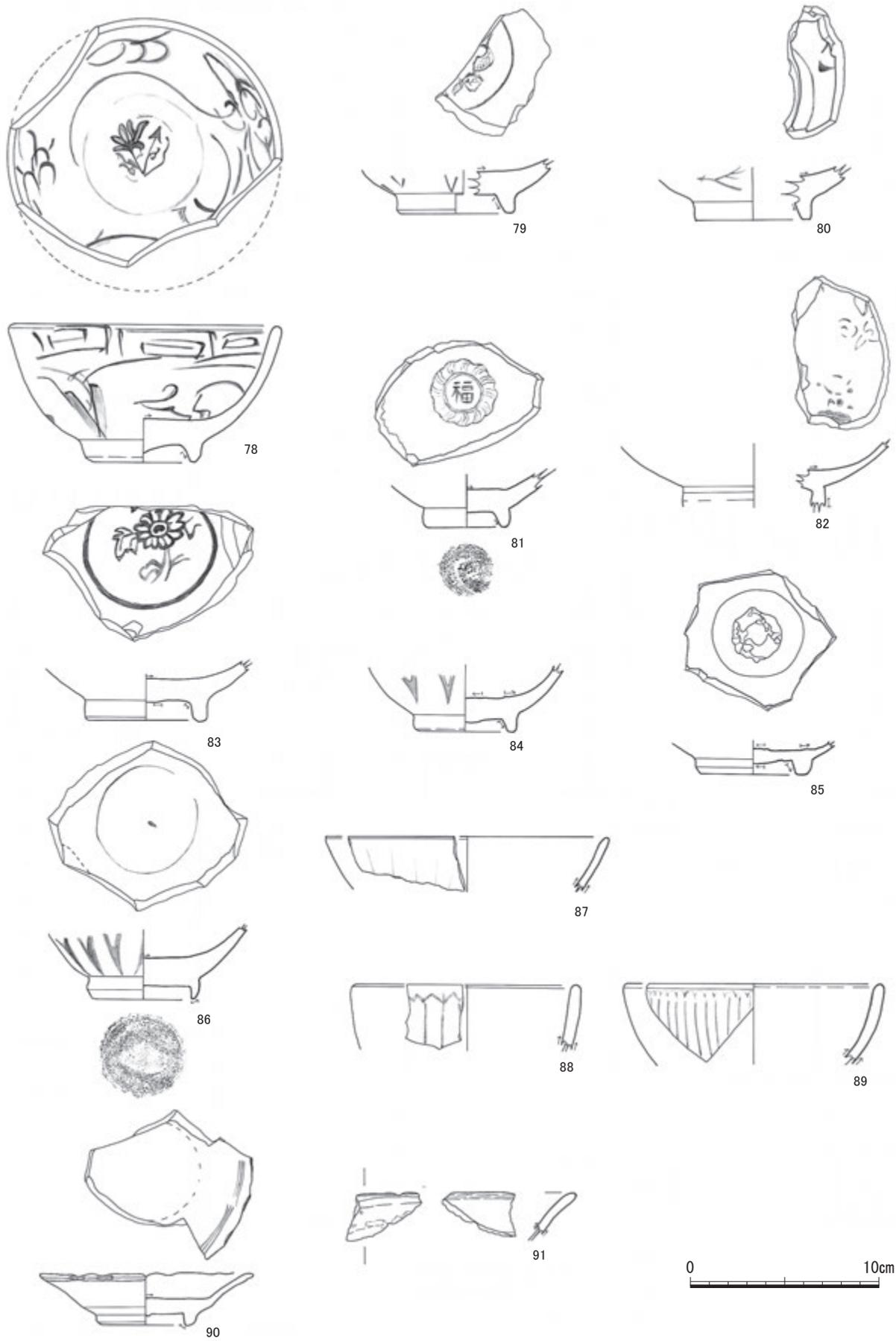
第36図 I地区出土遺物(2) 瓦質土器 (播鉢・火舎)

部近くから頸部である。器形は頸部で締め口縁部平坦上に広がっている。口縁部には鐙状の突起があり、5条の筋を滑らないように施し、器を受ける形である。外面は口縁部に沈線を巡らしている。器面調整は外面が丁寧な横位のミガキである。内面は、鐙よりも下位の火床部が横位のヘラナデである。色調は、器面の内外面が黒灰色で、胎土が灰色である。胎土はやや細かい粒子の瓦をつくる粘土を使っている。

(カ) 青磁 (78～91) (第37図)

青磁は龍泉窯系がおもである。

78は高台中央部に尖り部がみられ、高台外縁を削り、畳付けを狭くしたやや高い丸高台の碗である。体部は腰より丸みを持ちながら内彎状で、口縁部はやや外開きに立ち上がっている。見込みには浅い段がみられる。文様は内面に片彫りの蓮花文2単位を施す。見込みには草花文が刻印されている。外面は体部を3分割し、その中に、飛雲文を入れ、口縁部には雷文体を9個並べた文様を施している。釉の発色は青みを帯びた深みのある緑色である。釉は高台内部以外全面に見られる。胎土は緻密で灰色を呈する。時期は14世紀中から15世紀初期と思われる。以後86まで同時期と思われる。79は高台外縁を削り、畳付けを狭くした高い丸高台の碗である。腰部は内彎状に曲がり立ち上がる。釉の発色は青みを帯びた緑色であり、高台内部には施されていない。見込みには段があり、草花文が刻印されている。外面は幅広の蓮弁の下部と思われる文様が見られる。胎土は緻密で灰白色を呈する。80はやや高い丸高台の上に、内彎する腰部が乗る器形の碗である。文様は内外面とも蓮花文の一部がみられる。釉の発色は青みを帯びた緑色である。胎土は緻密で灰白色を呈する。81は丸高台の碗である。高台内部には施釉が無く、体部と見込みには施釉されている。見込みには花輪の中に福の刻印がみられる。釉の発色は青みの強い緑色である。胎土は緻密で灰色を呈する。82は碗である。高台内部以外は施釉されている。見込みの文様は花文の一部と思われる。釉の発色は青みを帯びた緑色である。胎土は緻密で褐色を呈する。83は丸高台の碗である。高台内部は中央に施釉があり、畳付けを巻くように腰部に施されている。見込みには段があり、草花文が刻印されている。釉の発色は青みを帯びた緑色である。胎土は緻密で灰色を呈する。84はやや高い丸高台の碗で、腰部までの部分である。外面腰部には蓮弁の片切彫りがみられる。外面釉は畳付けから高台付け根まで施し、内面釉は見込みで蛇の目状に剥ぎ取られている。釉には間隔の広い貫入がみられる。胎土はやや粗い。85は丸高台である。施釉は高台内側に無く、見込みには蛇の目剥ぎがみられる。釉の発色は青みを帯びた緑色である。胎土は緻密で灰色を呈する。86はやや高い丸高台の碗で、腰部までの部分である。外面腰部には蓮弁の片切彫りがみられる。外面釉は畳付けまで施し、内面釉は全面施釉である。釉には間隔の広い貫入がみられる。胎土はやや粗い。87～89は15世紀後半から16世紀前半のものである。特徴は蓮弁が簡略化され、87は鎬蓮弁の間隔が広く、88は蓮弁を山形状に繋ぎ、89は蓮弁を弧で繋いでいる。器形は内彎状に立ち上がる口縁部である。釉の発色は87が青色で、88・89が青みを帯びた緑色である。胎土は緻密で灰色を呈する。90は稜花皿である。高台は丸高台で、内面に施釉されていない。なお、中央部に一部付着させている。器形は、腰部に稜線があり、そこから外反させている。見込みには段がみられる。釉の発色は青みを帯びた緑色である。胎土は緻密で灰色を呈する。91も稜花皿の口縁部である。器形や施釉、胎土は90と同じであるが、口縁内側に3条の筋を描いている。



第 37 图 I 地区出土遺物(3) 青磁 (碗·皿)

(キ) 染付 (92～97) (第38図)

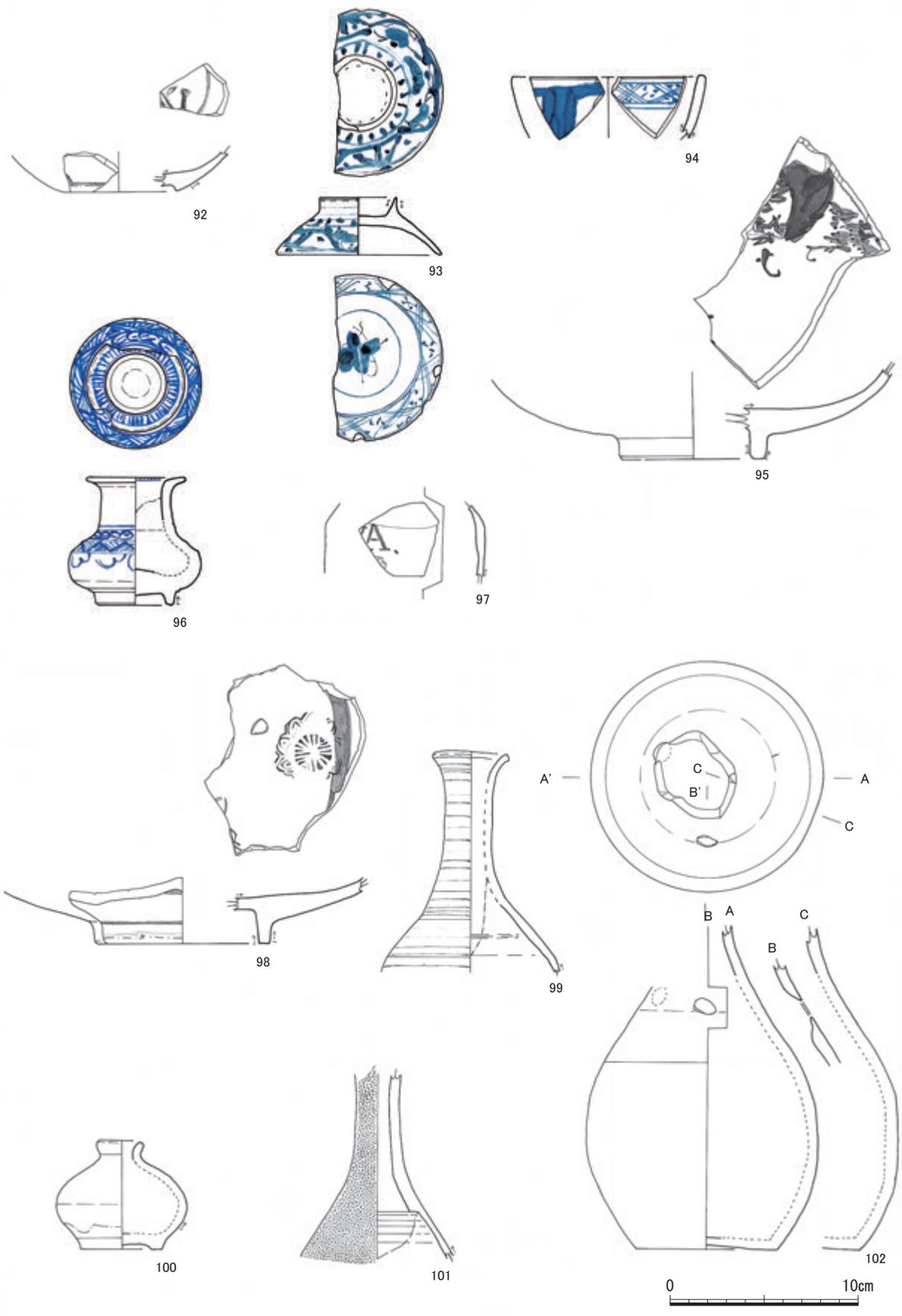
92は碁笥底の皿である。見込みには寿の字が見られる。外面には界線がみられる。また、高台内は燈茶褐色の釉が見られる。器面は透明釉がやや青みがかり、貫入がみられる。胎土は緻密で灰茶褐色を呈する。93は朝顔形の碗蓋である。文様は上面に雪松、雪竹が見られる。内面は四方襷文を口縁部に、見込みに草花文を描いている。器面は透明釉がやや青みがかった。胎土は緻密で灰白色である。94は丸形碗の口縁部である。文様は外面に角状の柵線がみられ、内面に四方襷文を付けている。器面は透明釉がやや青みがかった。胎土は緻密で灰白色である。95は盤の底部から体部である。畳付けには砂が付着している。見込みの文様は岩のある海浜風景文と思われる。器面の釉は灰色であり、波佐見焼きと思われる。胎土は緻密で灰白色である。96は小形の仏花瓶である。器形は、球状の胴部に短い頸部を作り、口縁部が平坦に反っている。底部は角高台で、縁を削っている。文様は口縁部に格子文、胴部に丸葉状と格子鋸歯文、雲文を施している。施釉面は高台内面以外の外面と内面の口縁部に施されている。胎土は緻密で灰白色である。97はいわゆるコンプラ瓶である。円筒の瓶に小さい長口が付く、文様はAが見られる。器面の施釉は外面で、灰色である。胎土は緻密で灰色である。

(ク) 陶器 (98～102) (第38図)

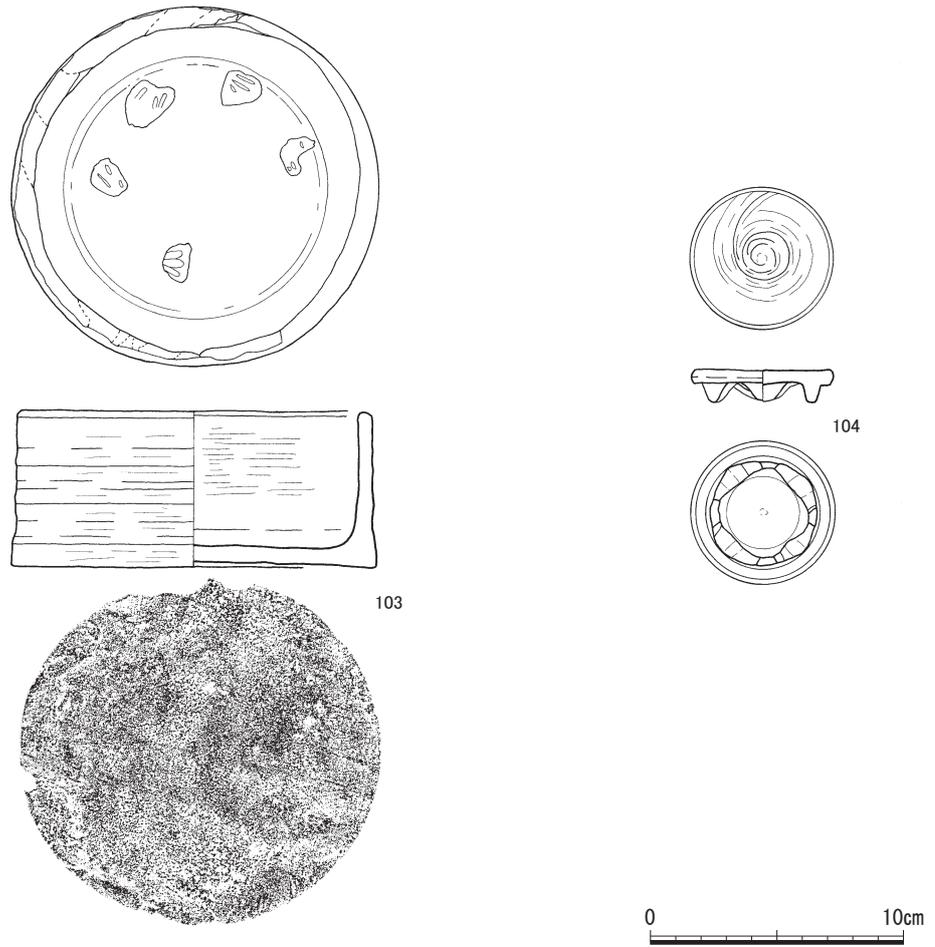
98は唐津焼の皿と思われる。高台は高く、畳付けには内側に砂目跡が回っている。施釉は全面で、外面が鉄釉を輪状に薄く、内面は輪状に厚く施している。特に立ち上がりから上は濃い。見込みには印花文が押され、点状の砂目跡がみられる。胎土はやや緻密で灰茶褐色を呈している。99は壺である。器形は長頸壺で花入れと思われる。整形はロクロ形成である。施釉は外面全体と目に付く内面に藁釉がみられる。胎土は緻密で、暗茶褐色を呈する。器壁は薄く焼成も良く京焼き風である。100は短頸壺で油壺と思われる。器形は低い切り高台から体部が球形に膨らみ頸部で締まっている。口縁部は短く外反する。整形はロクロ形成である。施釉は外面体部と目に付く内面に藁釉がみられる。胎土は緻密で暗茶褐色を呈する。器壁は薄く焼成も良く龍門司焼と思われる。101は壺である。器形は長頸壺で花入れと思われる。整形はロクロ形成である。施釉は外面全体に鮫肌がみられる。胎土は緻密で暗茶褐色を呈する。器壁は薄く焼成も良く龍門司焼と思われる。102は徳利と思われる。器形は若干上げ底から体部が球状に張る長頸壺である。頸部には2つの穿孔があり紐を掛けた孔と思われる。穿孔の反対側の体部は平坦面で整形している。これは腰当て面と思われる。外面は全体無釉で、器面は粗い。胎土はやや緻密で灰茶褐色を呈する。焼成は良く苗代川焼と思われる。

(ケ) 窯道具 (103・104) (第39図)

103は陶器のサヤ鉢である。器形は円筒形で、平底である。見込みには砂目跡が5か所残る。また、縁に砂が流れた部分もある。製法は底部に円盤状の板粘土を作り、粘土板の縁に積み上げて柵を作っている。内面は蛇の目状に貼り付けた調整が見られる。器面調整はヨコナデである。色調は明茶褐色を呈するが部分に黒斑もみられる。104は磁器の高台付きハマである。ハマの上面は螺貝状にヘラキリ落としをし、円板の縁は丸く縁取りをしている。下面はロクロ整形でへそ付き状に尖らし、4か所の切り高台を中側に付けている。切り高台の先端には緑色の釉薬が3か所に付いているので釉が何らかの形で付着したと思われる。色調は白色で、粘土は緻密なものを使用している。焼成は硬質である。



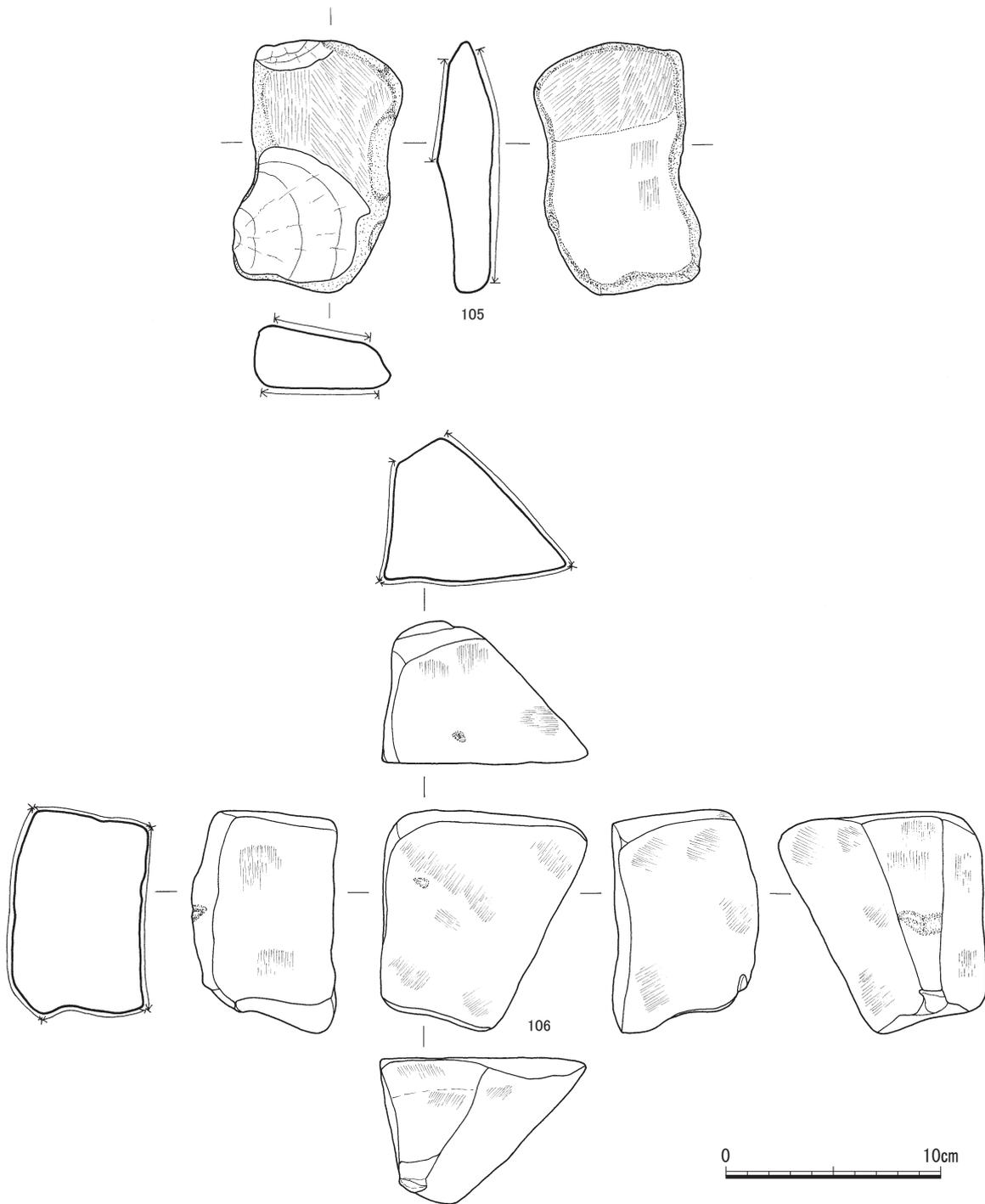
第 38 图 I 地区出土遺物(4) 染付・唐津焼・薩摩焼



第 39 図 I 地区出土遺物(5) 窯道具

(コ) 石器 (105・106) (第 40 図)

105 は砥石である。使用面は 1 面の一部が剥がれているが両面を使った形跡がある。この砥石は剥がれた面を主に使用しているの、使用後に剥がれたと考えられる。別面は一面が主に使用されている擦痕が見られる。また、敲石的使用も考えられる剥がれた部分もみられる。石材は安山岩である。これは、縄文時代の可能性もあるが、ここでは、中世の砥石として扱った。106 は全面を使用した砥石である。使用面は 4 方面の角柱で、上下面合わせると 6 面になる。角柱の 4 面では 2 面が広く、他 1 面は特に狭く、調整加工した剥ぎ面が二段になっている。この上下面は狭い面と広い面がある。狭い面は旧自然面の一部がみられる。砥石の使用面は以上であるが、砥石の使用後の面は内湾している面と、外曲している面に分かれる。これは石核を作った時の面と思われる。石材は凝灰岩である。



第40図 I地区出土遺物(6) 石器

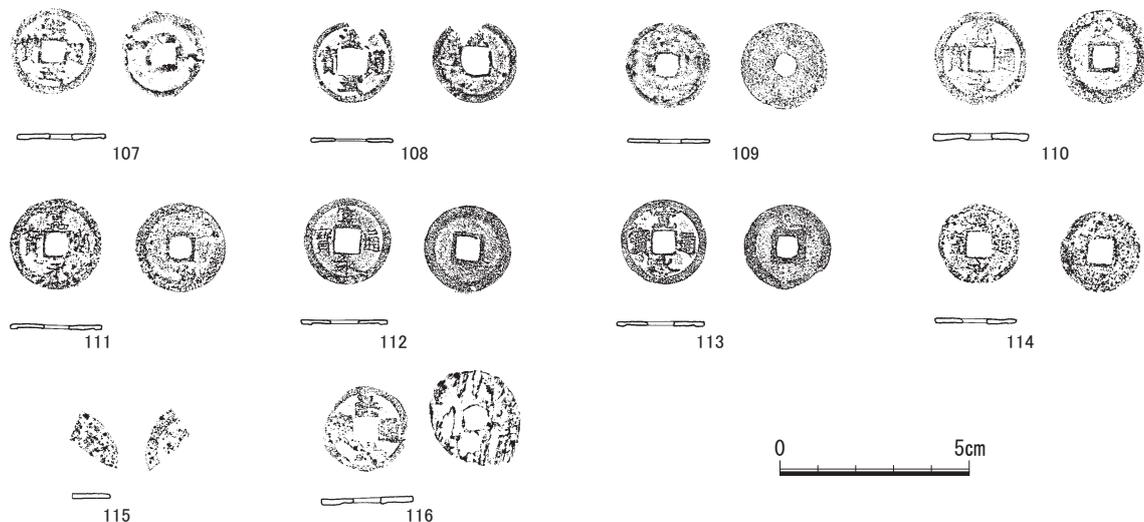
(サ) 古銭 (107 ~ 116) (第41図)

古銭は青銅製の107 ~ 115と鉄製の116に分かれる。

青銅製はいわゆる銅銭である。107・108は洪武通寶である。特徴としては前者が厚手で、後者は薄手である。109は解説不明のものである。112は解説難であるが、110 ~ 114は寛永通宝である。110は厚手であるが他は薄手である。110は新寛永で背文字のある文銭に属するが、他は背文字の

無い新寛永に属すると思われる。115 は破片で解読不明である。

116 は鉄銭である。腐食が激しいが、洪武通寶の文字が解読できる。裏面は何らかの付着のため筋状に腐食が見られる。



第 41 図 I 地区出土遺物(7) 古銭

イ II 地区

II 地区は I 地区 (A~U-1~3 と A~U-10・11 区間) 境の A~U-10・11 区の谷底道から A~U-16・17 区の尾根部までの区間を設定した。

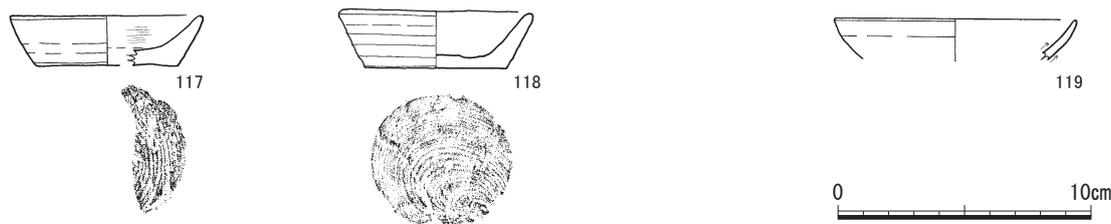
この谷底道は湿地帯で藩政時代に水田開発した 4 反 3 畝の山仁田溜池の候補地と考えられていたところである。この区間は、I 地区境の窪地から III 地区の水田・溜池が検出された谷 G~U-17・19 区までの丘部にあたる。遺物は 4 号炉跡の縁に 117 が、約 1.5 m 北に 118 が検出した。また、8 トレンチには白磁が出土した。

(ア) 土師器皿 (117・118) (第 42 図)

117 は口径 7.5cm、高さ 2cm の平底の皿である。底部は糸切り離しで、直に外開きしている。色調は胎土とも明茶褐色で、焼成は良い。118 は口径 7.5cm、高さ 2.2cm の平底の皿である。底部は糸切り離しで、直に外開きしている。色調は胎土とも茶褐色で、焼成は良い。

(イ) 白磁 (119) (第 42 図)

119 は白磁の皿である。体部は彎曲して外開きの器形である。器面は白い胎土に釉は透明釉を使い、光沢を出している。口縁部からみると 15 世紀後半と思われる。



第 42 図 II 地区出土遺物 土師器・白磁

ウ III地区

この地区はI - 15とF - 17～19とU - 20に囲まれた地域である。地形は谷頭になっており、地層は表層下に水田層のグライ化した第II層、第II b層、第II c層の3枚があり、その下層には流れ込んだ礫を含むIV層になっている。

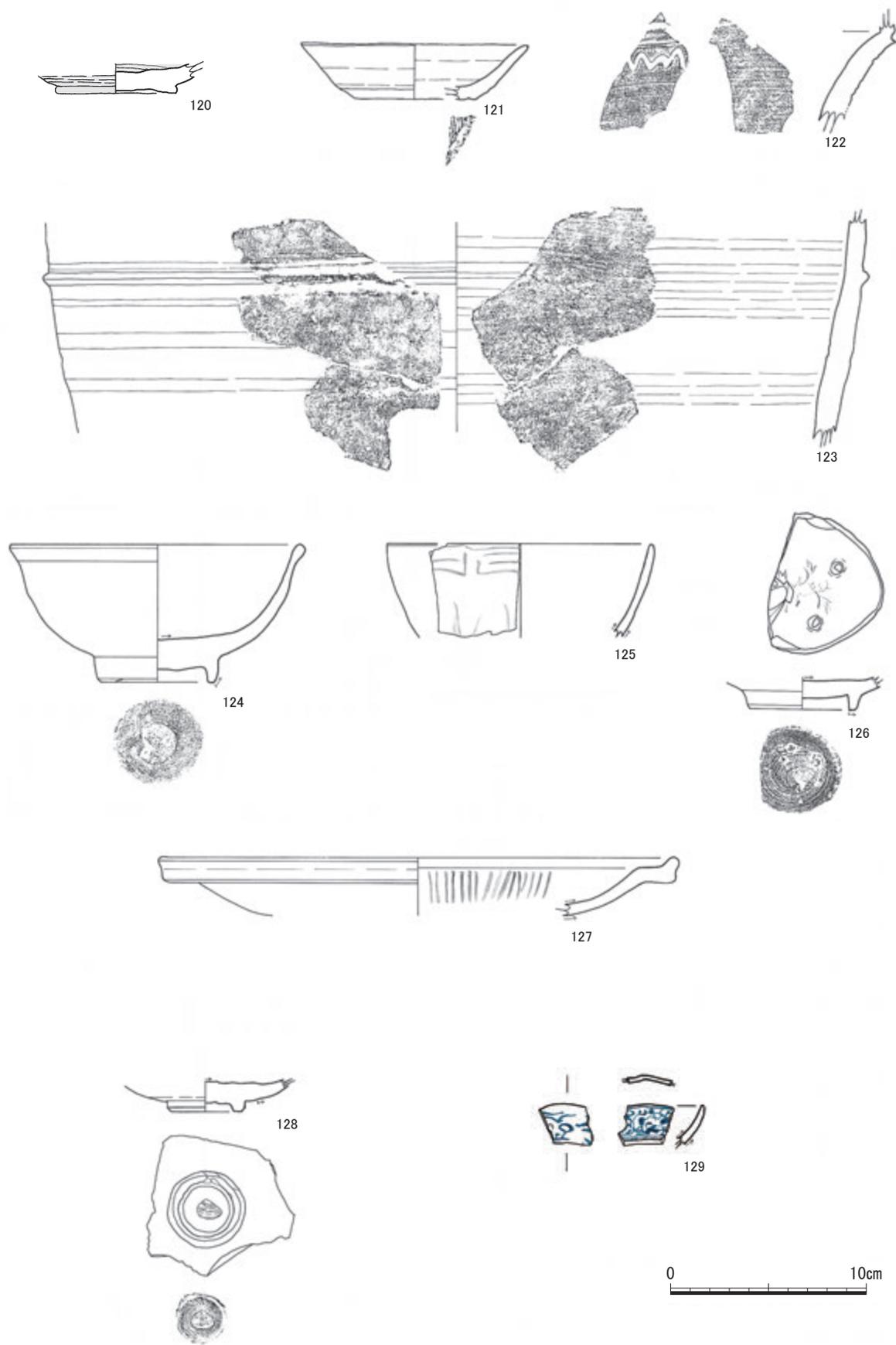
遺物は第I・II層、水田遺構の第II b・II c層及び溜池遺構である第IV層に伴う出土である。

ここは遺構との関係で器種別ではなく、層位ごとに記載した。理由は層位の遺物を種別でなく層のセットでとらえ、水田層の成り立ちの時期を推定するためである。

(ア) 第I層(120～129)(第43図)

120は黒色土器の壺である。全体的に角が摩耗され、丸みを帯びている。器形は浅く開く脚を付け、腰部は大きく開くものである。色調は黒灰色で、胎土も同色である。胎土は緻密で、焼成も良い。121は土師器の坏である。器形は糸切り離しの底部から立ち上がりは外開きに直行する。器面はロクロ調整で、色調は茶褐色である。焼成は良い。122は須恵器の甕である。部位は口唇部が破損しているが、外反した口縁部である。外面には鏝状の張り出しを設け、その下位に波状文を描いている。器面は内外面ロクロ調整痕がみられる。色調は外面が自然釉の灰茶褐色で、内面が灰茶と白色の斑模様である。胎土は緻密な粘土で白色である。焼成は良い。123は瓦質土器で火舎である。器形は外開き気味に直行した円筒形で1本の突帯を貼り付けている。器面調整はヘラナデである。色調は外が黒色で、内が灰褐色である。胎土は白色で緻密な粘土の中に粗い粒子がみられる。焼成は良い。

124は無文の青磁碗である。器形は丸高台で腰から体部にかけて彎曲して立ち上がるもので、口縁部が玉縁状の端反りである。施釉は暗緑色の釉を使い高台内面が露胎で他は全面である。胎土は赤茶褐色で緻密な土を使っている。焼成は良い。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。125は雷文帯を持つ青磁碗である。器形は体部から口縁部へ彎曲しながら直行するものである。文様は雷文の他、広幅の崩れた蓮弁文と思われる。施釉は暗緑色の釉を使っている。胎土は白色で緻密である。焼成は良い。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。126は高台の縁を削った低めの高台である。高台内面は一部釉が流れ込んでいるが露胎である。見込みには目跡があり、中央部には花印がみられる。施釉は緑色で高台では茶色に変化している。胎土は灰色で緻密である。焼成は良い。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。127は口縁部を「く」の字状に折り曲げさらに端部を上方に引き上げた盤である。文様は見込みに簡略化された筋状の蓮弁を施している。施釉は緑色で全面にみられる。胎土は灰色で、緻密である。焼成は良い。15世紀末から16世紀前半と思われる。128は白磁の皿である。高台は浅く畳付けは外側を削り2面になっている。なお、高台の天井部には削り跡がみられる。見込みは中央部で盛り上がり、鱗状になっている。施釉は腰部から高台にかけて露胎である。釉は透明釉である。胎土は白灰色で、緻密である。時期は15世紀末から16世紀前半と思われる。焼成は良い。129は肥前系染付の角皿の口縁部である。文様は内外面とも唐草の莖を線で描く唐草文である。釉は透明釉である。胎土は白色で、緻密である。焼成は良い。時期は17世紀末から18世紀前半と思われる。これは攪乱層にあたる遺物と思われる。この層は古くて14世紀末、新しく18世紀前半と思われる。



第 43 图 Ⅲ地区出土遺物(1) I層出土

(イ) 第Ⅱ層 (130～159) (第44図・第45図)

この層は第Ⅰ層の下部から第Ⅱ層の境付近で、一部混ざり気味の層にあたる。

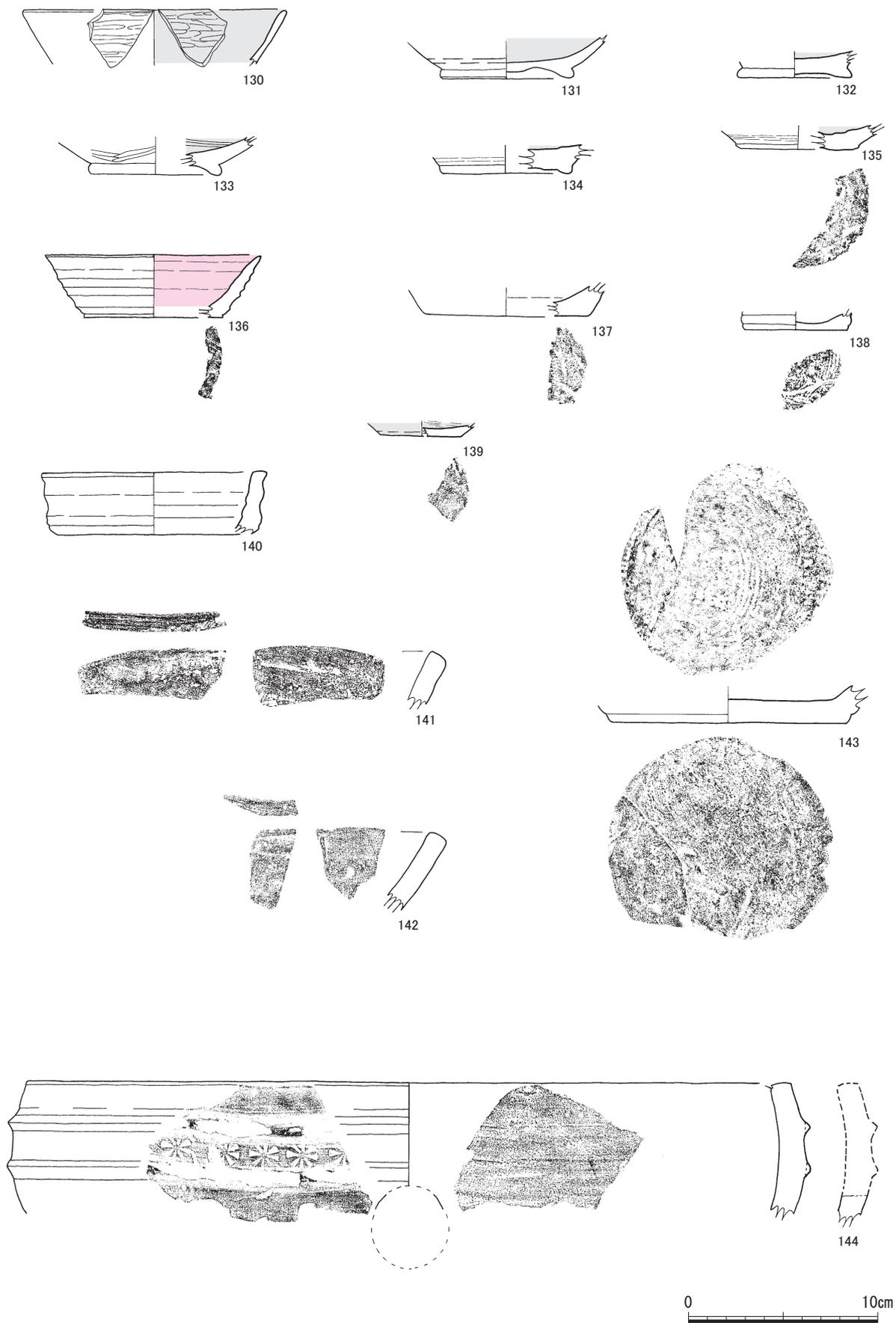
130は内黒土師器の壺である。部位は端反り気味の口縁部である。器面調整は内外面ともミガキである。色調は内面が黒色で、外面が灰茶褐色である。胎土は黒色で、細粒土を使っている。焼成は良い。131は浅い外開きの高台をもち、大きく開く体部をもつ内黒土師器の壺である。器面調整はロクロ成形で高台天井部に突起を付けている。色調は内面が黒色で外面が灰褐色である。胎土は黒色で、細粒土を使っている。焼成は良い。132は底部が円板貼り付けで、浅く広がる脚部をつくっている壺である。色調は内面が黒色で、外面が灰褐色である。胎土は灰色で、細粒土を使っている。焼成は良い。133は浅い外開きの高台をもち、腰部は彎曲して開く壺である。器面調整はミガキがみられる。色調は内面が灰黒色で、外面が灰茶褐色である。胎土は黒色で、細粒土を使っている。焼成は良い。134は浅い外開きの高台をもつ壺である。器面調整はミガキがみられる。色調は内面が灰黒色で、外面が灰茶褐色である。胎土は黒色で、細粒土を使っている。焼成は良い。135は底部が円板貼り付けで、浅く広がる高台部をつくっている壺である。色調は内面が灰黒色で、外面が灰茶褐色である。胎土は灰色で、細粒土を使っている。焼成は良い。

136は土師器の坏である。底部は糸切り離しで、体部は平底から内彎しながら開いている。器面調整は外面にロクロ成形時にヘラを使っている。色調は外面が茶褐色であるが、内面は赤茶褐色を塗った赤色土師器である。胎土は茶褐色で、細粒土を使っている。焼成は良い。137は土師器の坏である。底部は糸切り離しで、体部は平底から内彎しながら開いている。器面調整は外面にロクロ成形時にヘラを使っている。色調は内外面とも茶褐色である。胎土は茶褐色で、細粒土を使っている。焼成は良い。138は土師器の坏である。底部は糸切り離しである。色調は外面が灰茶褐色であるが、内面は赤茶褐色である。胎土は茶褐色で、細粒土を使っている。焼成は良い。139は黒色土器の坏である。底部は糸切り離しである。色調は外面が灰茶褐色であるが、内面は黒色である。胎土は灰茶褐色で、細粒土を使っている。焼成は良い。

140は焙烙の口縁から底部と思われる。口唇部は平坦で外側に張り出している。器面調整はロクロ成形がみられる。色調は外面が明茶褐色で、内面が暗茶褐色である。一部煤の付着がみられる。胎土は茶褐色で、細粒土を使っている。焼成は良い。

141は瓦質土器で、捏鉢である。部位は口縁部で、器形は外反する。器面調整はヘラナデである。色調は両器面ともに桃色である。胎土は桃色で緻密な粘土である。焼成は良い。142は瓦質土器で、捏鉢である。部位は口縁部で、器形は外反する。器面調整はヘラナデである。色調は外面が黒色で内面が灰白色である。胎土は灰色で緻密な粘土である。焼成は良い。143は瓦質土器で、捏鉢である。部位は底部で、平底である。器面調整は内面に櫛搔きによる沈線を見込みと立ち上がりに施している。外面はヘラナデである。色調は外面が黒色で内面が灰茶褐色である。胎土は灰色で緻密な粘土である。焼成は良い。144は瓦質土器の火舎である。部位は口縁部で、平坦に面取した口唇部が内側に内彎したものである。文様は突帯を2条横位に施し、その間に花卉のスタンプを巡らしている。器面調整は両面とも横位のヘラナデである。色調は外面が灰黒色で、内面が黒色である。胎土は灰色で、緻密な粘土を使用している。焼成は良い。

145は青磁の小碗である。口縁部は鐔状の平坦部をつくり、体部は球状をしている。外面体部は



第 44 图 III地区出土遺物(2) II層出土

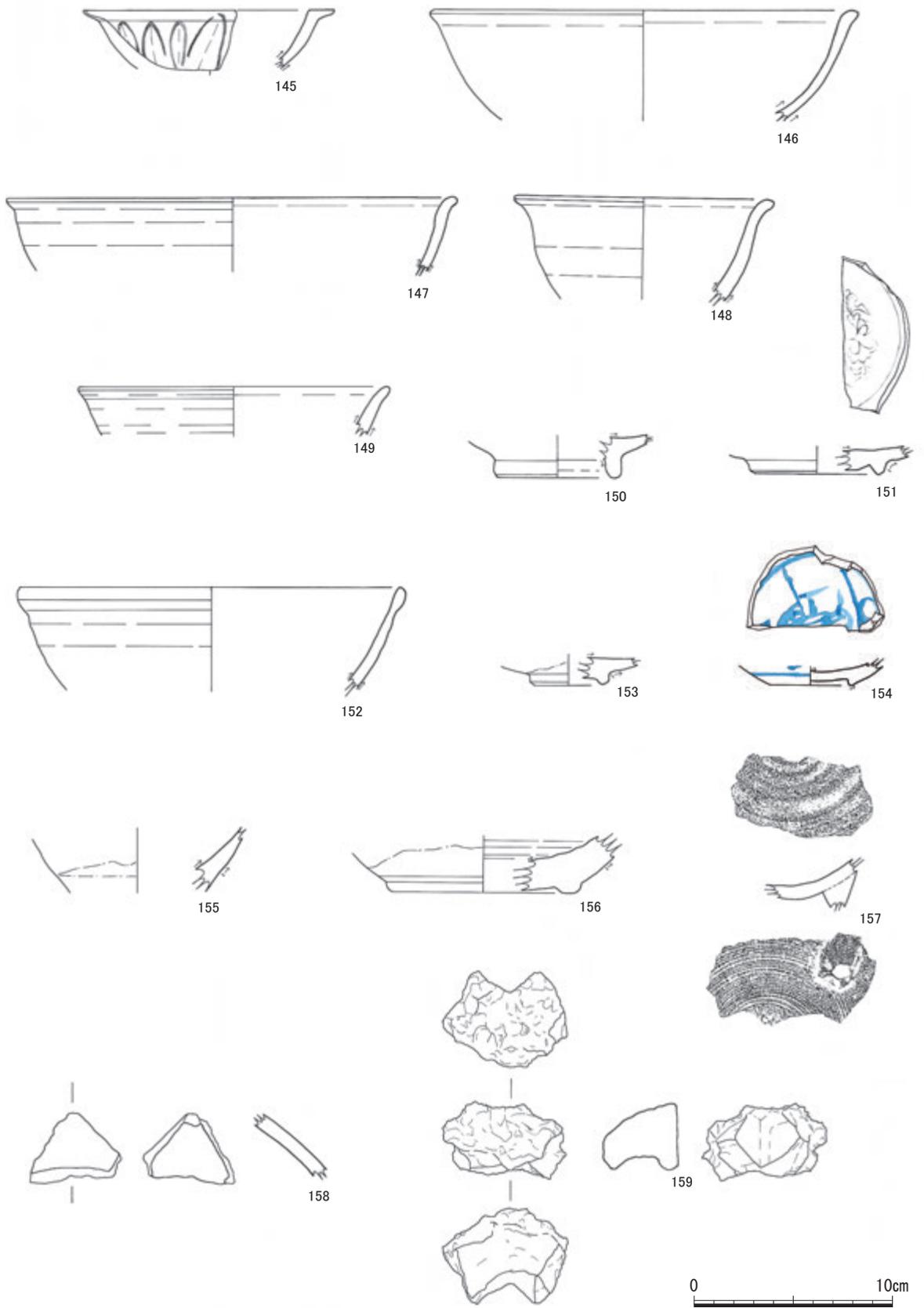
稜線に鈍い鎬連弁文を有し、広弁の中に細弁がみられる。施釉は青白色である。胎土は緻密な土を使用している。時期は13世紀初から前半と思われる。146は青磁の碗である。器形は端反りの口縁部で体部は彎曲している。器面は無文で、施釉は外面が暗緑色で内面が明緑色である。胎土は緻密な灰色土を使用している。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。147は青磁の碗である。器形は端反りの口縁部で体部は彎曲している。器面は無文で、施釉は両面とも淡緑色である。胎土は緻密な灰色土を使用している。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。148は青磁の碗である。器形は端反りの口縁部で体部は彎曲している。器面は無文で、施釉は内外が暗緑色である。胎土は緻密な灰色土を使用している。焼成は良い。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。149は青磁の碗である。器形は端反りの口縁部で体部は彎曲している。器面は無文で、施釉は両面とも灰緑色である。胎土は緻密な灰色土を使用している。焼成は良い。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。150は青磁の碗である。部位は底部で、やや高い丸高台で外面及び畳付けから高台内部まで施釉されている。施釉は両面とも暗緑色である。胎土は緻密な灰黒色土を使用している。焼成は良い。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。151は青磁の碗である。部位は底部で、浅い高台で畳付けから高台天井部まで露胎である。施釉は両面とも灰緑色である。胎土は緻密な灰色土を使用している。焼成は良い。時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。

152は白磁の碗である。器形は、玉縁口縁部をもち、体部が内彎する。施釉は両面に透明釉をかけている。胎土は黒粒子を含む白色で緻密な土である、焼成は良い。時期は12世紀前半と思われる。153は白磁の皿である。器形は低い角高台で、立ち上がりは横に開いている。高台から立ち上がり的一部は露胎である。施釉は白色で表面に艶がみられる。胎土は白色で緻密な粘土である。時期は15世紀中頃と思われる。154は染付である。器形は碁笥底の皿である。見込みには寿の字が見られる。外面には界線がみられる。また、底部には燈茶褐色の釉が見られる。器面は釉がやや青みがかり、貫入がみられる。胎土はやや粗く黄茶褐色を呈する。焼成は弱い。時期は15世紀末から16世紀前半と思われる。

155は天目茶碗の体部である。外面は鉄釉が二度塗りされ、1回目が薄く茶褐色で2回目が上から垂れ流しで厚く黒色に施している。内面は黒色に厚く施している。胎土はやや緻密で外面側が明茶褐色で内面側が灰茶褐色である。156は唐津焼の皿と思われる。高台は低く幅広い。施釉は体部までで底部は無釉である。見込みは輪状にヘラで段を付け、灰緑色の施釉に貫入が見られる。胎土はやや緻密で外面側が明茶褐色で内面側が灰茶褐色である。時期は唐津焼で16世紀後半から17世紀初めと思われる。157は土瓶の底部である。器形は丸みのある平底で、底面には脚の一部がある。器面はヘラナデで調整している。色調は外面にススが付着し黒色で、内面は茶褐色である。胎土は赤茶褐色でやや粗めである。焼成は良い。158は薩摩焼の鉢の胴部で、緑灰色の釉がみられる。胎土は赤茶褐色で、焼成は良い。157, 158は第Ⅱ層から出土しているが、第Ⅰ層から沈んだものと思われる。

159は鞆の羽口である。形は約1cmの土製筒で、中の風通しの孔は角材を使用したため角張っている。先端部には鉄滓が付着している。色調は孔部表面が暗茶褐色で、内部が明茶褐色である。胎土は細かい粘土を使用し、焼成は何度も焼けているので良い。鉄滓は黒色で約1.5cmの厚みがみられ、磁石が付くので鉄分があることがわかる。

この層は14世紀後半から15世紀前半と考えられる。



第 45 图 III地区出土遺物(3) II層出土

(ウ) 沈殿層

この層は、I - 18区にある水田にみられるグライ化した層が大きく2層に分けられたため、上部をa～eに分層し、下部をf層として取り上げた。遺物はe層とf層に出土した。

e層の出土遺物(160～164)(第46図)

160は土師器の甕の胴部である。器面調整は内面にヘラのカキアゲ痕がみられ、外面は横位のヘラナデである。色調は胎土とも明茶褐色である。焼成は良い。161は内黒土師器である。部位は立ち上がりから口縁部に向かう胴部である。全体が摩耗しているためよく分からないが、内面の黒色部に研磨がみられる。色調は内面が黒色で、外面が明褐色である。胎土は明褐色で細かい粘土を使用している。焼成は良い。162は青磁碗の腰部と思われる。釉は両面とも緑青色である。胎土は灰色で、緻密な土である。焼成は良い。163は東西に走る近世の溝縁に出土した青花の碗である。部位は口縁部で、施釉は青白色の釉を使い、外面に3本の線を横に入れている。胎土は灰白色で、緻密な土をつかっている。焼成は良い。時期は16世紀後半から17世紀初頭の青花と思われる。164は唐津焼の二彩手である。器形は碗で、部位は口唇部が欠損した胴部である。文様は緑灰色の地に黒茶褐色の鉄釉をかけている。胎土は灰色で細かい粘土を使用している。焼成は良い。時期は16世紀末から17世紀初頭と思われる。

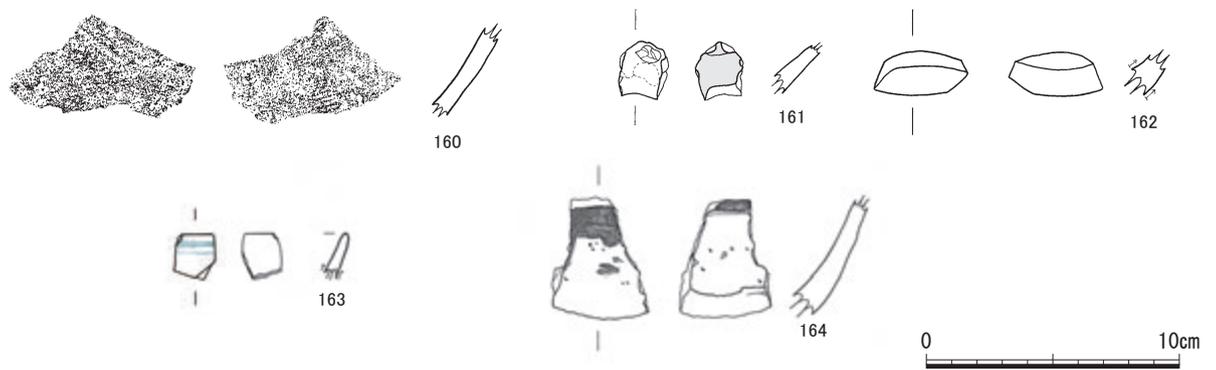
f層の出土遺物(165～178)(第47図)

165は土師器の坏である。器形は糸切り離しの底部より、外反気味に立ち上がる。器面はロクロ成形で、色調は明茶褐色である。胎土は明茶褐色で細かい粘土を使用している。焼成は良い。166は土師器の坏である。器形は糸切り離しの底部より、直行気味に立ち上がる。器面はロクロ成形で、色調は暗茶褐色である。胎土は暗茶褐色で細かい粘土を使用している。焼成は良い。167は内黒土師器で、器形は不明である。部位は腰部である。色調は内面が黒色で、外面が明茶褐色である。器面はロクロ成形で、胎土は明茶褐色と黒色で細かい粘土を使用している。焼成は良い。168は摩耗された土師器である。器形は不明である。部位は胴部である。色調は内外面とも明茶褐色である。器面はロクロ成形で、胎土は黒色で細かい粘土を使用している。焼成は良い。

169・170は須恵器の甕の肩部である。タタキは外面が板目で、内面が青海波である。外面は灰釉がかかり、灰褐色並びに灰色で、内面は無釉で茶褐色である。胎土は灰色で緻密な土を使用している。焼成は良い。これは中世須恵器東播磨系と思われる。

171は瓦質土器の播鉢である。部位は外向する口縁部で、注ぎ口の部分である。内面は3本の筋で間隔をあけて縦位に入れている。外面は丁寧なナデ調整である。色調は器面が灰茶褐色で、胎土は明茶褐色である。胎土は細かい粘土を使用している。焼成は良い。172は瓦質土器の播鉢である。部位は外向する胴部である。内面は2・3本の筋を間隔をあけて縦位に入れている。外面は丁寧なナデ調整である。色調は器面が赤茶褐色で、胎土は茶褐色である。胎土は粗い粘土を使用している。焼成は良い。

173は青磁碗の腰部である。見込みには1本の線が描かれている。色調は灰緑釉で、胎土は灰色で、緻密な土を使用している。焼成は良い。174も青磁である。色調、胎土とも173に類似している。175は青磁碗の丸高台の底部である。底部は天井が露胎で他は釉がみられる。見込みには1本の線が描かれ、中央に草花文の印判がみられる。色調は緑青釉で、胎土は灰色で、緻密な土を使用して



第46図 III地区出土遺物(4) 水田e層

いる。焼成は良い。176は青磁碗の角高台の底部である。底部は畳付けから天井までが露胎で他は釉がみられる。天井部には中央部に窪みがみられる。色調は灰緑釉で、胎土は灰色で、緻密な土を使用している。焼成は良い。177は青磁碗の丸高台の底部から腰部である。底部は天井が露胎で他は釉がみられる。色調は灰緑釉で、胎土は灰色で、緻密な土を使用している。焼成は良い。178は青磁碗の三角高台の底部である。底部は天井が露胎で他は釉がみられる。色調は灰緑釉で、胎土は灰色と明茶褐色で、緻密な土を使用している。焼成は良い。これらの青磁の時期は14世紀後半から15世紀前半と思われる。

この層には、e層と違い、時期は16世紀後半から17世紀初頭の近世の遺物が混入していないので、14世紀後半から15世紀前半の包含層と考えられる。

g層(179・180)(第47図)

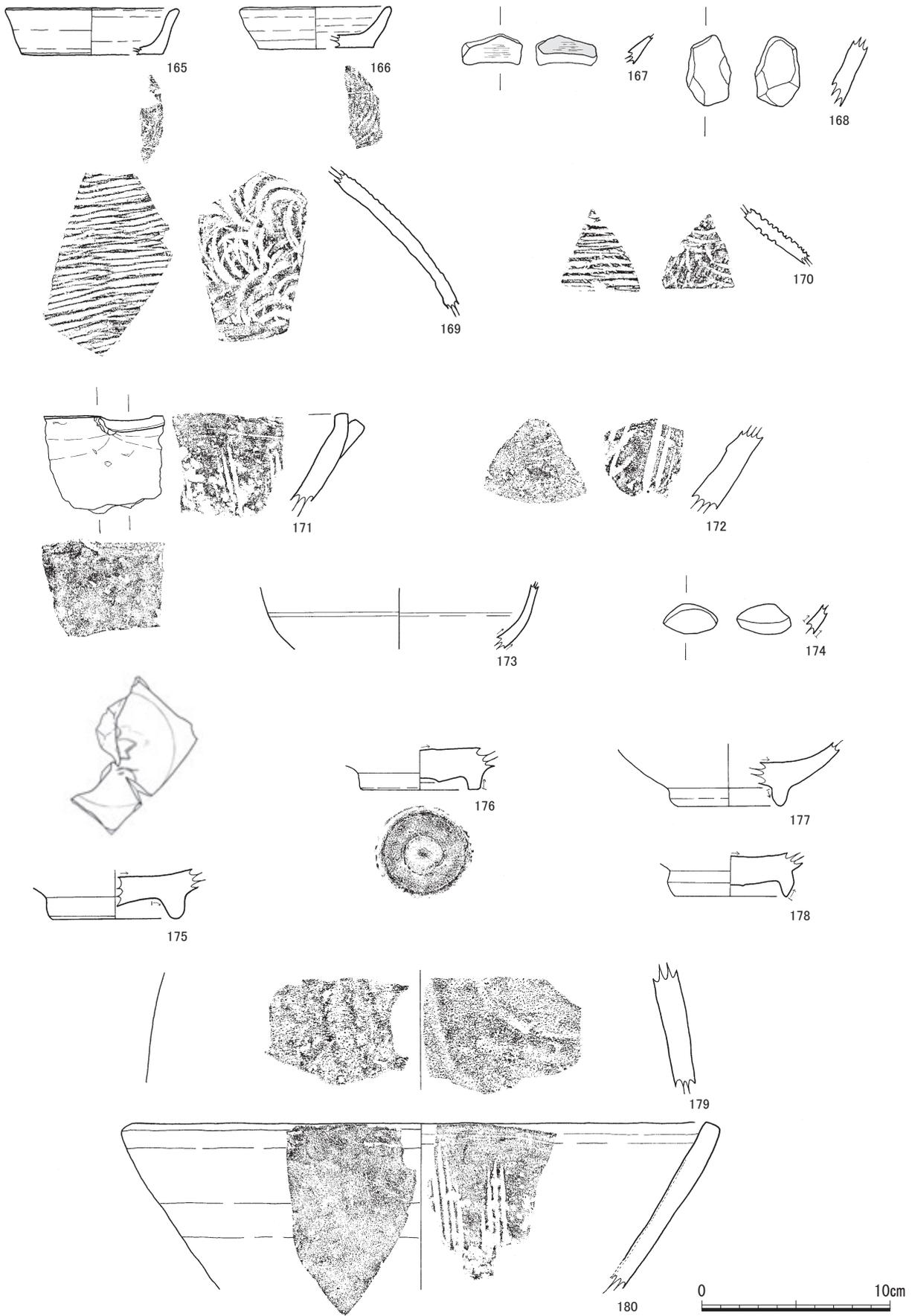
この層は第III層であるアカホヤ火山灰を切り込んだ跡に沈殿した最初の層である。一部礫も流れ込んで、土と混在している層である。

179は土師器の甕である。この土器は角が潰れ、全体的に摩耗で丸みがみられる。部位は胴部で、内面にヘラカキアゲ痕がおぼろげながら縦位にみられる。外面は横位にヘラ調整痕がかすかにみられる。色調は内面が明茶褐色で、外面が茶褐色である。胎土は暗茶褐色で、粗い粘土を使用している。焼成は良い。

180は瓦質土器の播鉢である。器形は口唇部が平坦で薄く、外向する口縁部をもつものである。内面の摺溝は4本の筋で間隔を開けて施している。器面調整は内面の口縁部にヨコナデがあり、外面は丁寧なミガキである。色調は内外面とも灰黒色である。胎土は、黄茶褐色で、細かい粘土を使用している。焼成は良い。

以上が沈殿層の出土遺物である。

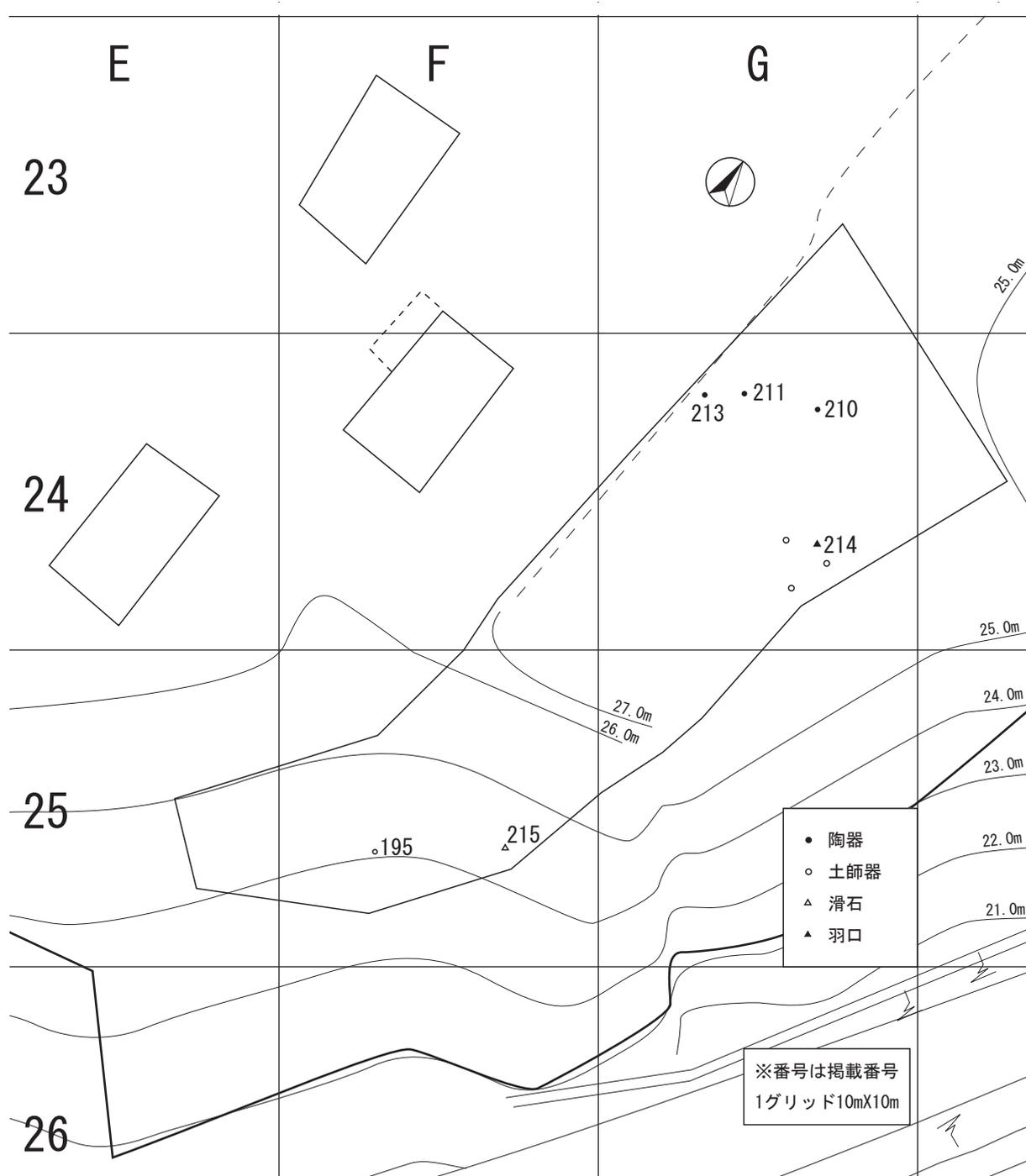
これらの遺物を包含した沈殿層はc～gの5層が確認された。c層はグライ化した無遺物層、d層は鉄分・マンガン層の無遺物層であった。遺物はe層に16世紀後半から17世紀初頭の近世のものが出土し、f・g層には14世紀後半から15世紀前半のものが出土した。



第 47 图 III地区出土遺物(5) 水田 f·g 層

エ IV地区

この地区はC～G-18区, G～I-19区の列より台地の先端部であるF・G-26区までの範囲である。トレンチは10本入れ、一部を拡張した。遺物は拡張部を中心に出土した。遺物の出土はG-24区とF-25区に分布がみられる。



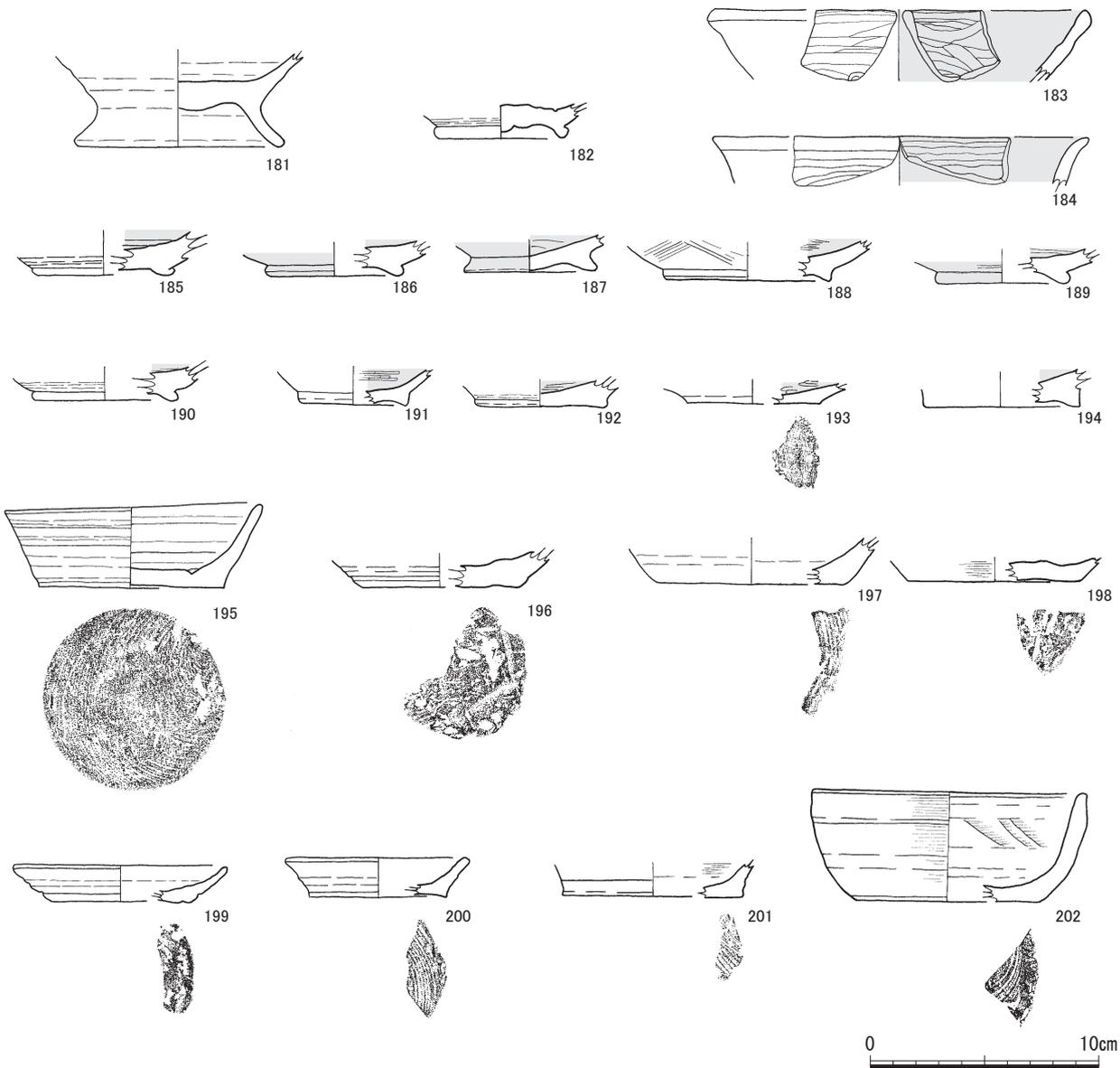
第48図 IV地区分布図

(ア) 土師器 (181 ~ 202) (第49図)

181は土師器の壺である。器形は高台の脚が高く裾が外反し、胴部の立ち上がりは直線である。高台の天井部は丸く膨らみ、坏部との接着部はやや挟られている。器面調整はロクロ成形と高台接着部のナデである。色調は見込み中央部と高台裾部が灰茶褐色で、他は明茶褐色である。胎土は細かい粘土を使用し、色調は器面と同じ明茶褐色である。182は土師器の壺の底部である。器形は高台が低く、やや外反している。高台の天井部には突起がみられる。器面調整はロクロ成形で、見込みに段がみられる。色調は外面が茶褐色で、内面が明茶褐色である。胎土は細かい粘土を使用し、色調は明茶褐色である。焼成は良い。

183 ~ 194は内黒土師器の壺である。

183は内彎する口縁部である。器面には主に横位のミガキがかけられ、色調は内面が黒色で、外面は口唇部が灰色である。胎土は色調が灰茶褐色で、粒子の細かい粘土を使っている。焼成は硬く



第49図 IV地区出土遺物(1) 土師器

て良い。184は外反する口縁部である。器面には主に横位のミガキがかけられ、内面は黒色で、外面は口唇部が灰色である。胎土は色調が灰茶褐色で粒子の細かい粘土を使っている。焼成は硬くて良い。185は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は面取りで作られている。器面調整は外面がナデで内面が弱いミガキをかけている。器面の色調は外面底部が灰黒色で、立ち上がりは明茶褐色である。内面は灰黒色である。胎土は色調が茶褐色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。186は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は丸く作られている。器面調整は外面がナデで内面が弱いミガキをかけている。器面の色調は内外面とも黒色で、胎土は色調が黒色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。187は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は三角断面に作られている。器面調整は内面が強いミガキをかけ、外面はナデがみられる。色調は内外面黒色で、胎土は色調が灰色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。188は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は三角断面に作られている。器面調整は内外面ミガキがかけられている。器面の色調は外面の底部が灰褐色で胴部は黒色である。内面は強い黒色である。胎土は色調が茶褐色で粒子の細かい粘土を使用している。189は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は丸く作られている。器面調整は内面が強いミガキをかけ、外面はナデがみられる。色調は内外面黒色で、胎土は色調が灰色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。190は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は面取りで作られている。器面調整は外面がナデで内面が弱いミガキをかけている。器面の色調は外面が茶褐色で、内面が灰色である。胎土は色調が茶褐色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。191は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は丸く作られている。器面調整は外面がナデで内面が弱いミガキをかけている。器面の色調は外面が茶褐色で、内面が灰黒色である。胎土は色調が茶褐色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。192は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は丸く作られている。器面調整は外面がナデで内面が弱いミガキをかけている。器面の色調は外面が茶褐色で、内面が灰黒色である。胎土は色調が茶褐色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。193は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は丸く作られている。器面調整は外面がナデで内面が弱いミガキをかけている。器面の色調は外面が茶褐色で、内面が黒色である。胎土は色調が黒色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。194は外開きで低い脚の底部である。脚の端部は丸く作られている。器面調整は外面がナデで内面が弱いミガキをかけている。器面の色調は外面が茶褐色で、内面が灰黒色である。胎土は色調が茶褐色で粒子の細かい粘土を使用している。焼成は良い。

195～201は坏、皿類である。195は糸切り離しの坏である。器形は体部が直に外向するもので、全体的に厚手で、高い。見込みは中央部が盛り上がり、段差がみられる。器面調整はロクロ成形である。色調は明茶褐色で、胎土も同じである。胎土は細かい粘土を使用している。焼成は良い。196は坏の底部である。器面調整は内面にロクロ成形の凹凸があり、糸切り離し底である。器面・胎土の色調は両面・胎土とも茶褐色を呈している。焼成は良い。197は底径の広い坏で、糸切り離し底である。器面調整は外面がロクロ仕上げの後下部にヘラキリを行っている。内面はロクロ調整後、ミガキを行っている。器面・胎土の色調は両面とも茶褐色を呈している。焼成は良い。198は底部の広いタイプで、ヘラ切り離し底である。器面調整は内外面ともナデで作られているが、内面はミガキがかかっている。器面・胎土の色調は両面・胎土とも赤茶褐色を呈している。焼成は良い。

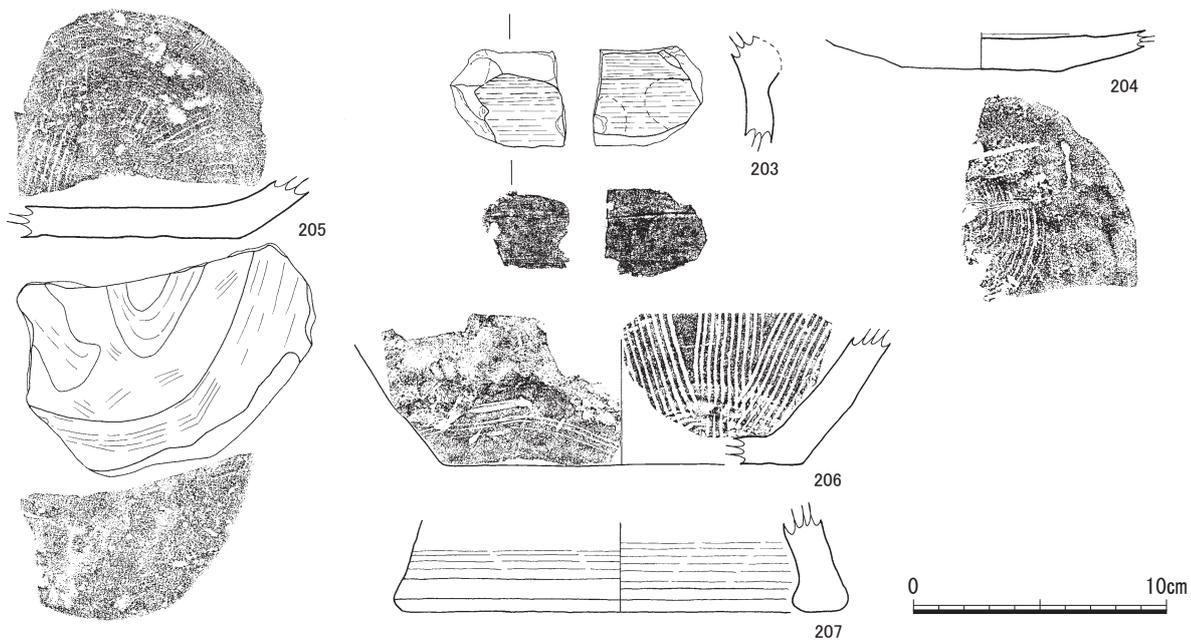
199は皿で、立ち上がりは大きく開く器形である。切り離しはヘラを使い、器面はロクロ引きの後ナデ調整をしている。器面・胎土の色調は両面・胎土とも茶褐色を呈している。焼成は良い。200は皿で、立ち上がりは少々開く器形である。切り離しは糸を使い、器面はロクロ引きの後ナデ調整をしている。器面・胎土の色調は両面・胎土とも茶褐色を呈している。201は皿である。底部は糸切り離しで、器面・胎土の色調は暗赤茶褐色と暗茶褐色である。焼成は良い。

202は鉢である。器形は糸切り離しの底部からマリ状に丸く立ち上がり、口縁部で直行している。器面調整はロクロ成形で、外面はヘラで仕上げている。色調は内外面に茶褐色で、口唇部や体部の一部にススが付着し、灯明皿の可能性がみられる。胎土は灰茶褐色、細かい粘土を使用している。焼成は良い。

(イ) 須恵器・瓦質土器 (203～207) (第50図)

203は須恵器の壺である。部位は壺の肩の部分と思われる。突帯上部は剥がれているが肩の部分に約1cm幅の突帯を施したものである。器面は外面がナデ調整で、内面は横位のヘラナデ調整である。内外面及び胎土の色調は灰色である。胎土は細かい粘土で焼成は良い。機能としては蔵骨器の可能性が考えられる。

204は瓦質土器の鉢である。糸切り離し底部で立ち上がりは大きく開いている。内面は弱いミガキで、外面はナデ調整である。胎土は粗い粘土を使用し、色調は暗茶褐色である。焼成は良い。205は瓦質土器の摺鉢である。摺溝は見込みにみられ使用されたため浅い。色調は内外面、胎土とも灰白色である。胎土は細かい粘土を使用している。焼成は弱い。206は備前焼の播鉢の底部である。内面の摺溝が明確である。色調は内外面、胎土とも燈茶褐色である。胎土は細かい粘土に粒の大きい土を混ぜている。焼成は良い。207は瓦質土器の火舎の脚である。器形は脚が立ち、底面を安定させている。色調は内外面、胎土とも明茶褐色である。胎土は細かい粘土を使用し、焼成は良い。



第50図 IV地区出土遺物(2) 須恵器・瓦質土器

(ウ) 磁器・陶器・鞆の羽口・石鍋 (208～215) (第51図)

208は青磁の盤である。部位は三角状の高台である。施釉は緑青色の釉を高台の天井部の途中から畳付けをまき腰部に至っている。見込みは施釉であるが無文である。胎土は灰色で、緻密な土を使用している。焼成は良い。

209は白磁の皿である。器形は中央に突起のある低い角高台から大きく外反するものである。施釉は高台から腰部までが露胎で、白色で胴部・見込みに施されている。器面は透明釉に貫入がみられる。胎土は白色で、細かい土を使用している。時期は15世紀前半と思われる。

210は碁笥底の磁器と思われる。施釉は畳付けから腰部と見込みに灰黄色の釉をかけ、底部の天井部は燈褐色の露胎である。胎土は黄茶褐色である。焼成は良い。時期は形的に15世紀後半から16世紀前半と思われる。

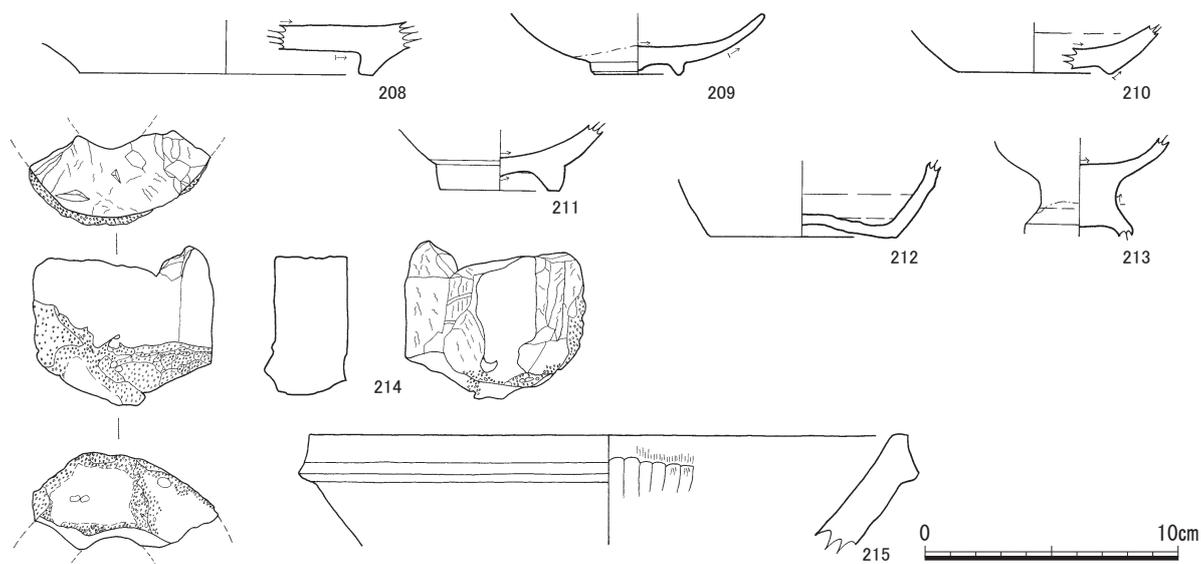
211は陶器の壺と思われる。部位は底部で、角高台である。器形は高台の天井中央部に突起があり、腰部で大きく彎曲している。施釉は灰茶褐色で、全面に認められる。胎土は灰茶褐色で、細かい粘土を使用している。焼成は良い。唐津焼と思われる。時期は16世紀末から17世紀と思われる。

212は徳利瓶の底部である。器形は若干上げ底で、球形の体部に向かう部分である。内面はヘラナデで、外面は薄い鉄釉である。胎土はやや緻密で暗茶褐色を呈し、焼成は良い。これは19世紀の薩摩焼で、苗代川と思われる。

213は灯明台と思われる。器形は高い筒状の高台で、坏部は皿状に開く。施釉は黒茶色の鉄釉を底部の筒部以上に施されている。見込みには円形の砂目が見られる。これは、19世紀の薩摩焼で、龍門司焼きと思われる。

214は鞆の羽口である。形は約3cmの土製筒で、中の風通しの孔は丸材を使用したため円形である。先端部には鉄滓が付着している。色調は孔部表面が灰茶褐色で、内部が明茶褐色である。胎土は細かい粘土を使用し、焼成は何度も焼けているので良い。鉄滓は先端部にあり、黒色で約1cmの厚みがみられる。この部分は磁石が付かないので鉄分が含まれていない。

215は滑石製の石鍋である。器形は口唇部が平坦で、鍋底に向かって斜めに削り込んでいる。口縁部は直向するが一段下がった外面に鑊をもうけている。ススは鑊の下側に厚く付着しているので、カマドに設置したことが考えられる。



第51図 IV地区出土遺物(3) 磁器・陶器・ふいごの羽口・石鍋

表9 土師器観察表（「3T」「4T」「6T」は平成21年度のトレンチ）

挿入 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土色調	胎土内混入鉱物				法量 (cm)			備考
										透明	白色	黒色	その他	口径	底径	器高	
35	57	I	— I	一括	—	土師器	碗	口縁部	橙			○	茶粒	12.4	—	—	
	58	I	— I	一括	—	土師器	碗	口縁部	にぶい褐				茶粒	—	—	—	
	59	I	— I	一括	—	土師器	碗	底部	浅黄橙					—	5.8	—	
	60	I	— I	一括	—	黒色土器	碗	底部	灰					—	6.0	—	
	61	I	— I	一括	—	黒色土器	碗	底部	灰				茶粒	—	6.3	—	
	62	I	— I	一括	—	黒色土器	碗	口縁部	浅黄橙	○				12.0	—	—	
	63	I	— I	一括	—	黒色土器	碗	口縁部	黒色				茶粒	17.0	—	—	
	64	I	— I	一括	—	土師器	坏	口縁～底部	茶褐色				茶粒	13.6	10.0	3.3	糸切底
	65	I	— I	一括	—	土師器	坏	底部	浅黄橙			○		—	7.4	—	
	66	I	— I	一括	—	土師器	坏	口縁～底部	暗茶褐色		○	○	茶粒	11.7	8.5	3.4	糸切底
	67	I	— I	一括	—	土師器	皿	口縁～底部	暗茶褐色				茶粒	9.5	7.5	2.0	糸切底
	68	I	D-3 II	77	一括	—	土師器	皿	口縁～底部	茶褐色			茶粒	8.0	6.6	2.4	糸切底
	69	I	D-3 II	99	一括	—	土師器	皿	口縁～底部	茶褐色			茶粒	7.0	5.6	1.7	糸切底
	70	I	— I	一括	—	土師器	甕	口縁部	黄茶褐色		○	○	細礫	—	—	—	
	71	I	— I	一括	—	土師器	焙烙	口縁～底部、取手	にぶい黄橙					16.8	13.0	2.8	スス付着、指匠痕
72	I	— I	一括	—	土師器	焙烙	口縁～底部	にぶい橙			○	茶粒	18.0	16.0	4.5		
73	I	— I	一括	—	土師器	焙烙	口縁～底部	にぶい褐			○	○		32.0	28.4	4.5	外面スス付着
42	117	II	F-14 II	180	4号炉跡	土師器	皿	口縁～底部	明茶褐色			○	茶粒	7.5	5.6	2.0	糸切底
	118	II	F-14 II	179	4号炉跡	土師器	皿	口縁～底部	茶褐色	○		○	茶粒	7.5	5.7	2.2	糸切底
43	120	III	— I	一括	溜池	黒色土器	碗	底部	黒灰色		○			—	6.2	—	
	121	III	— I	一括	溜池	土師器	坏	口縁～底部	茶褐色				茶粒	11.6	6.0	2.8	糸切底
44	130	III	9T II	一括	溜池	内黒土師器	碗	口縁部	黒				細粒土	13.8	—	—	
	131	III	H-18 II	110	溜池	内黒土師器	碗	胴部～底部	黒		○		細粒土	—	6.8	—	
	132	III	H-18 II	147	溜池	内黒土師器	碗	底部	灰				茶粒	—	5.8	—	
	133	III	3T II	一括	溜池	内黒土師器	碗	底部	黒				茶粒	—	6.6	—	
	134	III	G-17 II	122	溜池	内黒土師器	碗	底部	黒			○		—	6.8	—	
	135	III	— II	一括	溜池	土師器	碗	底部	灰	○				—	6.4	—	
	136	III	G-17 II	131	溜池	赤色土器	坏	口縁～底部	茶褐色		○			11.2	7.2	3.3	糸切底
	137	III	3T II	一括	溜池	土師器	坏	底部	茶褐色				茶粒	—	8.6	—	糸切底
	138	III	3T II	一括	溜池	土師器	坏	底部	茶褐色			○	茶粒	—	5.2	—	糸切底
	139	III	3T II	一括	溜池	黒色土器	坏	底部	灰茶褐色		○			—	4.2	—	糸切底
46	160	III	I-18 II b	156	沈殿 e	土師器	甕	胴部	明茶褐色	○	○	○	茶粒	—	—	—	
	161	III	I-18 II b	154	沈殿 e	内黒土師器	—	胴部	明褐色				茶粒	—	—	—	
47	165	III	I-18 II c	142	沈殿 f	土師器	坏	口縁～底部	明茶褐色			○	茶粒	9.2	7.4	2.5	糸切底
	166	III	H-17 II c	139	沈殿 f	土師器	坏	口縁～底部	暗茶褐色				茶粒	7.7	6.0	2.2	糸切底
	167	III	I-18 II c	157	沈殿 f	内黒土師器	—	腰部	明茶褐色と黒				茶粒	—	—	—	
	168	III	I-18 II c	164	沈殿 f	土師器	—	胴部	黒	○			茶粒	—	—	—	
	179	III	H-18 IV	145	沈殿 g	土師器	甕	胴部	暗茶褐色	○	○	○		—	—	—	

挿図 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土色調	胎土内混入鉱物				法量 (cm)			備考
										透明	白色	黒色	その他	口径	底径	器高	
49	181	IV	6T	一括	—	土師器	碗	底部	明茶褐色				茶粒	—	8.8	—	
	182	IV	4T	拡張	—	土師器	碗	底部	明茶褐色					—	5.4	—	
	183	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	口縁部	灰茶褐色					16.0	—	—	
	184	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	口縁部	灰茶褐色				茶粒	16.4	—	—	
	185	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	底部	茶褐色				茶粒	—	6.0	—	
	186	IV	4T	拡張	—	内黒土師器	碗	底部	黒色	○				—	5.6	—	
	187	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	底部	灰色	○				—	5.6	—	
	188	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	底部	茶褐色					—	7.2	—	
	189	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	底部	灰色					—	5.8	—	
	190	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	底部	茶褐色				茶粒	—	6.2	—	
	191	IV	4T	拡張	—	内黒土師器	碗	底部	茶褐色					—	4.6	—	
	192	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	底部	茶褐色					—	5.6	—	
	193	IV	4T	一括	—	内黒土師器	碗	底部	黒色			○		—	5.8	—	
	194	IV	4T II	一括	—	内黒土師器	碗	底部	茶褐色	○				—	6.8	—	
	195	IV	4T	1	—	土師器	坏	口縁~底部	明茶褐色		○	○	茶粒	11.0	8.0	3.5	糸切底
	196	IV	4T	一括	—	土師器	坏	底部	茶褐色			○	茶粒	—	6.7	—	糸切底
	197	IV	4T	一括	—	土師器	坏	底部	茶褐色			○	茶粒	—	8.2	—	糸切底
	198	IV	4T	一括	—	土師器	坏	底部	赤茶褐色				茶粒	—	7.6	—	ヘラ切離底
	199	IV	4T	一括	—	土師器	皿	口縁~底部	茶褐色					9.2	6.0	1.6	ヘラ切離底
	200	IV	4T	一括	—	土師器	皿	口縁~底部	茶褐色					7.4	6.0	1.7	糸切底
	201	IV	4T	一括	—	土師器	皿	底部	暗赤茶褐色				茶粒	—	7.8	—	糸切底
	202	IV	4T II	拡張	—	土師器	鉢	口縁~底部	灰茶褐色					11.6	8.0	4.9	糸切底、スス付着

表 10 瓦質土器・須恵器観察表 (「4T」「6T」は平成 21 年度のトレンチ)

挿図 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土色調	胎土内混入鉱物				法量 (cm)			備考
										透明	白色	黒色	その他	口径	底径	器高	
36	74	I	— I	一括	—	瓦質	搦鉢	口縁部	橙色		○	○		30.6	—	—	
	75	I	— I	一括	—	瓦質	搦鉢	口縁部	黒色					—	—	—	
	76	I	— I	一括	—	瓦質	搦鉢	胴部	灰白色		○			—	—	—	
	77	I	— I	一括	—	瓦質	火舎	口縁近く~頭部	灰色		○		細礫	—	—	—	
43	122	III	— I	一括	溜池	須恵器	甕	口縁部	白色			○		—	—	—	
	123	III	— I	一括	溜池	瓦質	火舎	胴部	白色	○				—	—	—	
44	141	III	G-17 II	129	溜池	瓦質	捏鉢	口縁部	桃色					—	—	—	
	142	III	G-17 II	116	溜池	瓦質	捏鉢	口縁部	灰色		○			—	—	—	
	143	III	G-17 II	128	溜池	瓦質	捏鉢	底部	灰色	○			茶粒	—	12.2	—	
	144	III	G-18 II	132	溜池	瓦質	火舎	口縁部	灰色		○		茶粒	40.2	—	—	
47	169	III	I-17 II c	136	沈殿 f	須恵器	甕	肩部	灰色					—	—	—	
	170	III	I-17 II c	138	沈殿 f	須恵器	甕	肩部	灰色		○			—	—	—	
	171	III	I-18 II c	159	沈殿 f	瓦質	搦鉢	口縁部	明茶褐色		○		茶粒	—	—	—	
	172	III	I-18 II c	160	沈殿 f	瓦質	搦鉢	胴部	茶褐色		○	○		—	—	—	
	180	III	I-18 IV	144	沈殿 g	瓦質	搦鉢	口縁~胴部	黄茶褐色	○		○		30.2	—	—	
50	203	IV	4T	拡張	—	須恵器	壺	肩部	灰色	○		○		—	—	—	
	204	IV	4T	一括	—	瓦質	鉢	底部	暗茶褐色	○				—	6.2	—	糸切底
	205	IV	6T	一括	—	瓦質	搦鉢	底部	灰白色		○			—	—	—	
	207	IV	6T	一括	—	瓦質	火舎	脚部	明茶褐色	○			茶粒	—	17.0	—	

表 11 銅銭・鉄銭観察表

挿図 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	時期	計測値 (cm)							重さ (g)	備考	
								a	b	c	d	e	f	厚さ			
41	107	I	— I	一括	—	銅銭	1368	2.36	2.33	1.83	1.84	0.70	0.74	1.46	2.21	洪武通寶	
	108	I	— I	一括	—	銅銭	1368	—	2.26	—	1.82	0.81	0.87	1.30	1.40	洪武通寶	
	109	I	— I	一括	—	銅銭	1697	2.34	2.34	1.99	1.99	0.72	0.68	1.05	2.25	寛永通宝?	
	110	I	— I	一括	—	銅銭	1668	2.54	2.53	2.04	2.03	0.74	0.70	1.43	2.52	寛永通宝	
	111	I	— I	一括	—	銅銭	1697	2.44	2.47	1.86	1.92	0.70	0.70	1.52	2.79	寛永通宝	
	112	I	— I	一括	—	銅銭	1697	2.35	2.35	1.87	1.85	0.76	0.76	1.00	2.36	寛永通宝?	
	113	I	— I	一括	—	銅銭	1697	2.33	2.33	1.87	1.86	0.68	0.66	1.39	2.65	寛永通宝	
	114	I	— I	一括	—	銅銭	1697	2.19	2.17	1.77	1.81	0.67	0.69	1.33	1.38	寛永通宝	
	115	I	C-3 III	28	—	銅銭	—	—	—	—	—	—	—	1.34	0.48	—	
	116	I	D-3 II	100	—	鉄銭	—	2.38	2.39	2.07	1.94	0.86	0.85	—	2.59	洪武通寶	

表 12 青磁観察表 (「3T」「4T」は平成21年度のトレンチ)

挿図 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土 色調	釉薬種類	施釉部位	文様	時期	法量 (cm)		備考	
														口径	底径		器高
37	78	I	C-5	IV	173	青磁	碗	口縁~底部	灰色	青みがかった緑	高台内天井部以外	蓮花文、飛雲文、雷文	14c中~15c初	14.5	5.5	7.3	
	79	I	—	I	一括	青磁	碗	底部	灰白色	青みがかった緑	高台内天井部以外	草花文、蓮弁の一部	14c中~15c初	—	6.0	—	
	80	I	—	I	一括	青磁	碗	底部	灰白色	青みがかった緑	残存部全面	蓮花文の一部	14c中~15c初	—	5.9	—	
	81	I	—	I	一括	青磁	碗	胴~底部	灰色	青みの強い緑	高台内天井部以外	花輪内「福」刻印	14c中~15c初	—	4.2	—	
	82	I	—	I	一括	青磁	碗	胴~底部	褐色	青みを帯びた緑	高台内部以外	花文の一部	14c中~15c初	—	—	—	
	83	I	—	I	一括	青磁	碗	胴~底部	灰色	青みを帯びた緑	高台内天井部以外	草花文	14c中~15c初	—	6.2	—	高台内天井中央部にも一部施釉
	84	I	—	I	一括	青磁	碗	胴~底部	青灰色	深緑	高台内天井部以外	蓮弁の片切彫り	14c中~15c初	—	5.0	—	見込み蛇の目釉剥ぎ
	85	I	—	I	一括	青磁	碗	底部	灰色	青みを帯びた緑	高台内以外	—	14c中~15c初	—	5.6	—	見込み蛇の目釉剥ぎ
	86	I	—	I	一括	青磁	碗	胴~底部	灰色	深緑	高台内底面	蓮弁の片切彫り	14c中~15c初	—	5.4	—	
	87	I	—	I	一括	青磁	碗	口縁部	灰白色	青みの強い緑	残存部全面	蓮弁	15c後半~16c前半	15.0	—	—	
	88	I	—	I	一括	青磁	碗	口縁部	灰色	青みを帯びた緑	残存部全面	山形状蓮弁	15c後半~16c前半	11.8	—	—	
43	89	I	—	I	一括	青磁	碗	口縁部	灰色	青みを帯びた緑	残存部全面	弧状の蓮弁文	15c後半~16c前半	13.3	—	—	
	90	I	—	I	一括	青磁	後花皿	口縁~底部	灰色	青みを帯びた緑	高台内面以外	—	—	11.2	4.8	2.8	高台内面一部施釉
	91	I	—	I	一括	青磁	後花皿	口縁部	灰色	青みを帯びた緑	残存部全面	—	—	—	—	—	
	124	III	—	I	一括	青磁	碗	口縁~底部	赤茶褐色	暗緑	高台内面以外	—	14c後半~15c前半	14.6	5.6	7.1	
	125	III	—	I	一括	青磁	碗	口縁部	白色	暗緑	残存部全面	雷文、広幅の崩れた蓮弁	14c後半~15c前半	13.6	—	—	
	126	III	—	I	一括	青磁	高台	底部	灰色	全体が緑、高台が茶	高台内面以外	目跡、花印	14c後半~15c前半	—	5.3	—	
	127	III	—	I	一括	青磁	盤	口縁~胴部	灰色	緑	残存部全面	削略化された節状の蓮弁文	15c末~16c前半	26.2	—	—	
	145	III	3T	II	一括	青磁	碗	口縁~胴部	灰色	青白	残存部全面	蓮弁文	13c初~13c前半	12.6	—	—	
	146	III	G-17	II	120,121	青磁	碗	口縁~胴部	灰色	外)暗緑、内)明緑	残存部全面	—	14c後半~15c前半	21.2	—	—	
	147	III	G-17	II	126,127	青磁	碗	口縁	灰色	淡緑色	残存部全面	—	14c後半~15c前半	22.4	—	—	
	45	148	III	3T	II	一括	青磁	碗	口縁~胴部	灰色	暗緑	残存部全面	—	14c後半~15c前半	12.6	—	—
149		III	H-18	II	111	青磁	碗	口縁部	灰色	灰緑	残存部全面	—	14c後半~15c前半	15.6	—	—	

挿入 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土 色調	釉薬種類	施釉部位	文様	時期	法量 (cm)		備考
														口径	底径 器高	
45	150	Ⅲ	G-17 II	123	溜池	青磁	碗	底部	灰黒色	暗緑	残存部全面	—	14c後半~15c前半	—	6.0	—
	151	Ⅲ	G-17 II	118	溜池	青磁	碗	底部	灰色	灰緑	畳付きから高台天井部以外	—	14c後半~15c前半	—	6.2	—
46	162	Ⅲ	F-18 IIb	162	沈殿e	青磁	碗	腰部	灰色	緑青	—	—	16c後半~17c初頭	—	—	—
	163	Ⅲ	F-18 IIc	167	沈殿e	青花	碗	口縁部	灰白色	青白	—	—	16c後半~17c初頭	—	—	—
47	173	Ⅲ	H-18 IIc	143	沈殿f	青磁	碗	腰部	灰色	灰緑	—	—	14c後半~15c前半	—	—	—
	174	Ⅲ	F-17 IIc	137	沈殿f	青磁	碗	腰部	灰色	灰緑	—	—	14c後半~15c前半	—	—	—
	175	Ⅲ	H-17 IIc	140	沈殿f	青磁	碗	底部	灰色	緑青	—	草花文	14c後半~15c前半	—	6.6	—
	176	Ⅲ	F-17 IIc	135	沈殿f	青磁	碗	底部	灰色	灰緑	底内畳付~天井以外	—	14c後半~15c前半	—	6.2	—
	177	Ⅲ	F-17 IIc	134	沈殿f	青磁	碗	底部~腰部	灰色	灰緑	底内天井以外	—	14c後半~15c前半	—	5.6	—
51	178	Ⅲ	H-17 IIc	141	沈殿f	青磁	碗	底部	明茶褐色	灰緑	底内天井以外	—	14c後半~15c前半	—	5.9	—
	208	Ⅳ	4T II	拡張	—	青磁	盤	底部	灰白色	緑青	高台天井部以外	—	14c後半~15c前半	—	11.4	—

表 13 白磁・磁器観察表 (「3T」「4T」「8T」は平成21年度のトレンチ)

挿入 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土 色調	釉薬種類	施釉部位	文様	時期	法量 (cm)		備考	
														口径	底径 器高		
39	104	I	— I	一括	—	磁器	高台付ハマ	完形	白	—	—	—	—	—	5.4	1.4	
42	119	II	8T	一括	—	白磁	皿	口縁部	白	透明	—	—	15c後半	—	9.6	—	
43	128	III	— I	一括	溜池	白磁	皿	底部	白灰	透明	高台から脚部以外	—	15c末~16c前半	—	3.6	—	
45	152	III	G-17 II	130	溜池	白磁	碗	口縁~胴部	白	透明	残存部全面	—	12c前半	—	19.0	—	
	153	III	3T II	一括	溜池	白磁	皿	底部	白	白	高台立ち上がりから高台内天井部以外	—	15c中頃	—	3.4	—	
51	209	IV	4 T	拡張	—	白磁	皿	口縁~底部	白	透明	腰部から上位	—	15c前半	—	9.8	3.4	2.6
	210	IV	— II	9	—	磁器	碗	胴~底部	黄茶褐色	灰黄色	—	—	15c後半~16c前半	—	6.0	—	

表 14 染付観察表 (「3T」は平成21年度のトレンチ)

挿入 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土 色調	釉薬種類	施釉部位	文様	時期	法量 (cm)		備考	
														口径	底径 器高		
38	92	I	— I	一括	—	染付	皿	胴~底部	灰茶褐色	透明	残存部全面	—	—	—	6.2	—	碁笥底
	93	I	— I	一括	—	染付	碗蓋	口縁~底部	灰白	やや青みがかった透明	残存部全面	—	—	—	8.8	4.0	—

挿図 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土 色調	釉薬種類	施釉部位	文様	時期	法量 (cm)		備考	
														口径	器高		
38	94	I	—	I	一括	—	碗	口縁部	灰白	やや青みがかった透明	残存部全面	—	—	10.2	—		
	95	I	—	I	一括	—	盤	胴～底部	灰白	灰	残存部全面	—	—	7.4	—		
	96	I	—	I	一括	—	仏花瓶	完形	灰白	灰	高台内面以外と内面の口縁部	栴木歸園文・雲文	—	5.0	3.8	6.8	
	97	I	—	I	一括	—	コンブラ瓶	肩～胴部	灰	灰	残存部外面	—	—	—	—	—	
43	129	III	—	I	一括	溜池	角皿	口縁～胴部	白	透明	残存部全面	唐草文	17C末～18C後半	—	—	—	肥前系
45	154	III	3T	II	一括	溜池	皿	底部	黄茶褐色	青みがかった透明	残存部全面(2度塗り)	—	15C末～16C前半	—	4.0	—	基筒底

表 15 陶器観察表 (3T)「4T」は平成 21 年度のトレンチ

挿図 番号	遺物 番号	調査 地点	出土地点・層	取上 番号	遺構名	種別	器種	部位	胎土 色調	釉薬種類	施釉部位	文様	時期	法量 (cm)		備考	
														口径	器高		
38	98	I	—	I	一括	陶器	皿	胴～底部	灰茶褐色	鉄釉	全面	印花文	—	—	9.1	—	
	99	I	—	I	一括	陶器	長頸壺	口縁～頸部	暗茶褐色	霽釉	外面全体と目につく内面	—	—	4.0	—	—	
	100	I	—	I	一括	陶器	短頸壺	完形	暗茶褐色	霽釉	外面全体と目につく内面	—	—	2.3	4.3	5.8	
	101	I	—	I	一括	陶器	長頸壺	口縁～頸部	暗茶褐色	—	外面全体に鮫肌	—	—	—	—	—	
	102	I	—	I	一括	陶器	長頸壺	頸部～底部	灰茶褐色	—	—	—	—	—	7.5	—	
	155	III	3T	II	一括	溜池	陶器	天目茶碗	胴部	外) 暗茶褐色 内) 灰茶褐色	鉄釉	外) 腰上 内) 全面	—	—	—	—	—
45	156	III	3T	II	一括	溜池	皿	底部	外) 明茶褐色 内) 灰茶褐色	灰緑色	腰部～底部以外	—	16c後半～17c前半	—	9.2	—	
	157	III	3T	II	一括	溜池	土瓶	底部	赤茶褐色	—	—	—	—	—	—	—	
	158	III	I-18	II b	155	溜池	陶器	鉢	赤茶褐色	緑灰色	—	—	—	—	—	—	
	164	III	I-18	II b	163	沈殿 e	陶器	碗	胴部	灰	鉄釉	—	16c後半～17c初頭	—	—	—	
50	206	IV	6T	I	一括	—	陶器	底部	橙茶褐色	—	—	—	—	14.0	—		
51	211	IV	—	II	8	—	陶器	底部	灰茶褐色	灰茶褐色	全面	—	16c末～17c	—	46.0	—	
	212	IV	4T	II	一括	—	陶器	底部	暗茶褐色	鉄釉	外面	—	19c	—	7.4	—	
	213	IV	—	II	3	—	陶器	胴部	黒茶	鉄釉	底部以外	—	19c	—	—	—	
	103	I	—	I	一括	—	陶器	完形	橙	—	—	内面) 蛇の目貼り付け	—	13.6	14.4	6.2	
45	159	III	G-17	II	114	溜池	—	羽口	—	—	—	14c後半～15c前半	—	—	—	外) 暗茶褐色 内) 明茶褐色	
51	214	IV	4T	一括	—	羽口	—	羽口	—	—	—	—	—	—	—	外) 灰茶褐色 内) 明茶褐色	

第4章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

山仁田遺跡で検出された1号炉跡の使用時期や木材を確認するために、炉跡内から出土した炭化材の自然科学分析を(株)加速器分析研究所に委託した。

第2節 山仁田遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

1 測定対象試料

山仁田遺跡は、鹿児島県薩摩川内市青山町（北緯 31° 46′，東経 130° 16′）に所在し、標高約 10m の河岸段丘の北側上に立地する。測定対象試料は、1号炉跡出土木片（8：IAAA-102874）1点である（表1）。

2 測定の意義

炉跡の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA：Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素と鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

3MV タンデム加速器 (NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HO_x II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) δ ¹³C は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age:yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期(5568 年)を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1 \sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2 \sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

1 号炉跡出土木片 8 の ^{14}C 年代は $320 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は 1521 ~ 1640cal AD の間に 2 つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は約 70%の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102874	8	遺構：1 号炉跡	木片	AAA	-26.68 ± 0.54	320 ± 30	96.11 ± 0.32

[#4127]

表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102874	350 ± 30	95.78 ± 0.30	318 ± 26	1521calAD - 1592calAD (53.7%) 1620calAD - 1640calAD (14.5%)	1487calAD - 1645calAD (95.4%)

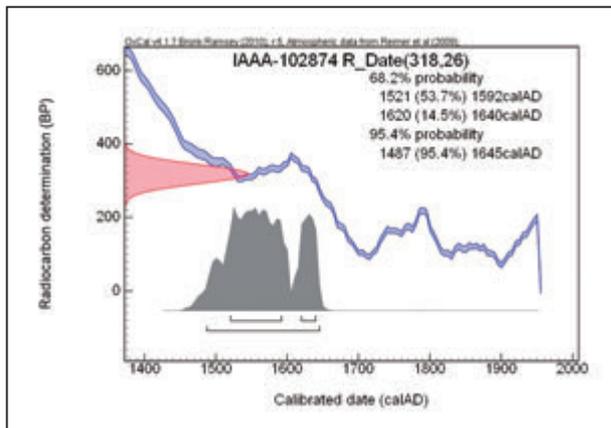
[参考値]

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150



[参考] 暦年較正年代グラフ

第3節 山仁田遺跡出土炭化材の樹種

はじめに

山仁田遺跡の1号炉跡から出土した炭化材を対象として、使用木材を確認するための樹種同定を実施する。

1 試料

試料は、C-6 1号炉跡から出土した炭化材1点(試料番号8)である。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

炭化材は、広葉樹のカキノキ属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・カキノキ属(Diospyros) カキノキ科

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2-4個が時に年輪界をはさんで放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、10-20細胞高で階層状に配列する。

4 考察

1号炉跡から出土した炭化材は、直径2cmの芯持丸木であり、カキノキ属に同定された。カキノキ属は、暖温帯に分布する常緑小高木のトクワガキや落葉高木のリュウキュウマメガキのほか、大陸から渡来したとされる栽培種のカキノキやマメガキがある。木材組織の特徴から、栽培種と野生種を区別することは困難である。木材は、いずれも重硬で強度が高い。

炭化材は、カマド跡で利用された燃料材の可能性があり、遺跡周辺に自生あるいは栽培されていたカキノキ属の木材が利用されたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三.1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫.1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫.1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所, 66-176.
伊東隆夫.1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所, 83-201.
伊東隆夫.1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

第5章 総括

1 縄文時代

(1) 遺跡の立地

分布はC～E-1～5区の尾根状の傾斜面にみられ、分布の空白地帯が方形で平坦面に近い。尾根部で空白地帯を中心に何らかの作業をした跡と考えられる。

ここは、中近世に溜池が造られた程の湧水が出ていたため、動植物の生育環境が良かった場所と思われる。遺跡の中心は一段上の所で、水場周辺と推定される。

(2) 遺物

土器は早期前葉の前平式土器から石坂式土器が若干みられるが、中心は中葉の押型文土器と平栴式土器系の時期である。注目される土器では格子目の押型文を施した土器である。器形は円筒土器で、文様は手向山式土器系であるため、南九州の円筒土器文化と北部九州の押型文土器文化が融合した土器である。

なお、縄文晩期の底部も出土しているので、その時期は調査範囲外に中心があると推定される。

石器については、石鏃の18～20が早期前葉の平基式で、21～23が早期中葉の凹式である。なお、24～27は粗く剥いで作っているので縄文晩期と推定される。

石匙は28にみられるように摘みの部分が3か所ある特徴をもったものが出土している。霧島市の上野原遺跡X地点では摘みが2か所あるものが多く出土しているが、3か所みられるものは例がない。おそらく県内初めてであろう。29は欠損品である。

特徴的な石器としては、31・32がエンドスクレイパーで縄文早期に出土するのが興味深い。

礫石器は41の石鎚や42～44の土掘り具的石器がみられる。また、45～48の磨石・敲石類もみられる。これらは42を除き縄文早期と思われる。42は縄文晩期の打製石斧である。

石皿は49～56で8点出土しており、遺物的には量が多い。特徴としては、自然面が残る石を使用した49～55と、剥いで加工した56に分けられる。49～55は縄文早期で、56は縄文晩期と推定される。

よって、遺跡としては、石皿、磨石、石匙やエンドスクレイパーの道具が出土しているので、抉ったり切ったりする作業場の要素が強いと推定される。

2 中世～近世

(1) 遺構

本調査により、縄文時代の遺物が出土し、中世から近世にかけての遺構・遺物が検出、出土された。それらの遺構や遺物から判断すると、中心は中世といえる。

中世の遺構は、炉跡・溜池遺構・道跡・竪穴建物跡・掘立柱建物跡があり、1つの集落を形成している。また、中世では溜池として利用していた場所を、近世になって水田に変えたことが読み取れる遺構も検出された。近世以降の開発により削平された部分が多く、調査により検出された部分は一部ではあるが、当時の集落の様子、特に生産活動を知るうえでの貴重な資料となると考える。

また、想像を膨らませることになるが、山仁田遺跡の炉跡・石組遺構と形状がよく似たものがいちき串木野市の柵城跡や日置市の向柵城跡で検出されていることや、山仁田遺跡周辺に都城跡や総徳城跡・二福城跡といった中世の山城に関する遺跡があることを考慮すると、山仁田遺跡が位置する台地は曲輪であった可能性も考えられる。

ここでは、炉跡・石組遺構・山仁田溜池・水田遺構について少し考察してみたい。

ア 炉跡

山仁田遺跡では、Ⅰ地区C-5区で1号・2号炉跡、Ⅱ地区F-14区で3号・4号炉跡の計4基の炉跡を検出した。形態や検出された位置を考慮し、次の2種類に分類が可能だと考える。

Ⅰ類 楕円形をしていて、搔き出し部を持つもの。1号・2号炉跡が該当する。

Ⅱ類 円形をしており、搔き出し部を持たないもの。3号・4号炉跡が該当する。

1号・2号炉跡、3号・4号炉跡はそれぞれ隣接して対で作られており、軸の方向がほぼ一致している。対の炉跡については同時期に同じ目的で使用された可能性が高いと考える。また、2号と3号・4号炉跡は床にカマ土があり、一方、1号炉跡はカマ土がないという差異も確認できた。2号炉跡の床面に炭を搔き出すときについたと考えられる工具痕が残っていたことから、1号炉跡の使用頻度が高かったことが考えられる。

炉跡の使用時期については、1号・2号炉跡は、Ⅰ層より15世紀から16世紀に作られた龍泉窯系の青磁が出土している点や、1号炉跡内の炭化物による科学分析の結果から、16世紀の可能性が高いと考える。炉跡周辺のピット内から14世紀末から15世紀前半に作られた龍泉窯系の青磁がほぼ完形で出土しており、炉跡との関係が気になるところであるが、結びつける根拠を見つけることはできなかった。3号・4号炉跡については、科学分析による情報がなく、炉周辺から出土した遺物も土師器が2点のみで、年代を特定することが困難な状況である。ただ、1号・2号炉跡と長軸の方位がことなることや炉の形態が違うこと、残り具合が1号・2号炉跡に比べて良くない点から、1号・2号炉跡とは時期が異なる可能性が高く、3号・4号炉跡の方が1号・2号に比べて古いと考えられる。ピット内から出土した14世紀末から15世紀前半に作られた龍泉窯系の青磁の時期と同じ可能性も考えられる。

ただ、4基の炉跡が同時期に使用されていたことも否定できない。同時期に使用された場合、1号・2号炉跡が3号・4号炉跡に比べて作りがしっかりとしていることや周辺にピットが多数検出されたことから、1号・2号炉跡が中心的な役割を果たし、3号・4号炉跡が補助的な役割を果たしていたことも考えられる。出口浩氏は川上城の報告書のなかで、次のような見解を示している。「中世山城の炉跡について平面形からA（円形）とB（長楕円形）の2つに分類している。Aタイプは、円礫・角礫が半円形か馬蹄形に並べられ、炉壁の高さ・灰出し部などが確認できないもので、臨時的あるいは短期的に使用したものとされた。Bタイプは、炉部・たき口部・灰出し部などが区別されるもので、炉壁等は凝灰岩礫を含む粘土で焼き締めてしっかりと作られる。床面にも焼土・灰の堆積が多くみられる。地域の拠点となる山城・城館や中心郭などにみられることから長期間に多くの人々が使用したものとされた。（鹿児島市教委1994）」

炉跡の使用目的については、炉跡内からの遺物が検出されなかったことや対で検出された炉跡の類例がないことからはっきりしたことは分からない。今後の類例の検出を期待したい。

イ 中世の石組遺構

山仁田遺跡で検出された石組遺構は「構成している礫が大きい」「礫が熱を受けている」「小さな炭化物が埋土に含まれる」という特徴がある。

本遺構と似たような石組遺構は、いちき串木野市の椿城跡の台地部で1基、山腹部で4基検出されている。台地部では土坑として、山腹部では時期・性格不明で掲載してある。不明なところも多いが、中世から近世にかけての遺構と予想される点や礫が縄文時代の集石に比べると大きい点、周辺で炉跡が検出されている点など共通点が多い。

本遺構の南、およそ3mの位置で2号掘立柱建物跡が検出された。中世のころの両遺構の関連についても今後検討していく必要がある。

ウ 山仁田溜池

山仁田溜池は伝承と文献で判明し、時期は不明である。今回の発掘調査の記録は、文献に出てくる山仁田溜池にあたる。この調査報告は藩政時代の農業史の一部であり、鹿児島県においても初めての記録である。

川内地方の藩政時代の溜池は72か所にも及んでいる。薩摩藩としては、ここ川内地方が開田政策の重要地点であったことがわかる。

調査においても、池底の確認はできたが、埋樋や尺八樋等の当時の排水口の高度な技術は確認できなかった。その施設は、調査区の東側に水田が広がっているので、調査区の東側にある可能性が高い。

なお、溜池廃池後は水田にされていた伝承があり、その一部が畦として確認できた。

エ 水田遺構

「藩政時代、新田開発が盛んに行われたが、このうち高江の新田開発は大規模なものであった。」(『川内市文化財要覧』)とあるように、近世になり、山仁田遺跡周辺でも生産力増加の手だてが行われたと考えられる。H・I-17・18区で検出された中世の溜池もその流れの中で、水田として開発されたのではないだろうか。溜池だったために地盤がゆるく、畦をつくるのが難しい状況の中で、石畳を敷いて通路としたと考えられる。出土遺物も中世・近世と層ごとに分かれて出土した状況も土地利用の変化を物語っているのではないだろうか。近世の新田開発を示す貴重な遺構と考えられる。

(2) 遺物

ア I・II地区

土師器としては、玉縁口縁や高台の低い壺と坏・皿・甕・焙烙があり、瓦質土器としては口縁部が直行する播鉢・火舎があり、青磁や染付としては雷文帯と蓮花文で代表される14世紀中頃から15世紀初めの青磁と、簡略化した鎬蓮弁で代表される15世紀後半から16世紀の碗や稜花皿、碁笥底染付があり、19世紀以降の物としては平佐焼の染付、龍門司焼及び苗代川焼の薩摩焼等の陶器や窯道具が出土している。

中世から近世は、時期的には14世紀中頃から15世紀初めが最初にあり、そして、15・16世紀がみられ、最後に山仁田溜池開田期の19世紀の近世が存在したと考えられる。

イ III地区

この地区は、地形的には谷頭にあたり、常時湧水が出ている所である。

ここの埋土は平坦地の第Ⅱ層にあたり、近代の表土である第Ⅰ層と攪乱層の下位の層にあたる。地形的に谷頭にあたり、湧水が盛んにみられ、雨水の流れ込みが多く、それらによって形成された沈殿層が5枚確認された。調査ではその層序ごとに分けて時期を判断した。

その結果、沈殿e層は陶器の薩摩焼・磁器の肥前系染付（平佐焼）が含まれているので、近世の形成が当てはまる。沈殿f・g層は中世の土師器、青磁、瓦質土器が出土し、14世紀中頃から15世紀初めの形成が当てはまる。

よって、14世紀中頃に谷頭を溜池として造り、その後の沈殿層を利用して、近世に水田化したと判断できる。

なお、近世から近代であるがⅠ・Ⅱ地区も溜池から水田化しているので同様の事が言える。

ウ IV地区

土師器は181の壺と195～198の坏、185～191の内黒土師器、199～201の皿が出土している。181は10世紀の古代で、他は中世と思われる。

須恵器は203の10世紀の壺が出土し、須恵器系の備前焼である206の播鉢が出土している。

瓦質土器は中世の209の火舎が出土している。

白磁は14世紀後半から15世紀の皿、染付は14世紀後半から15世紀の皿が出土している。

陶器は211の唐津焼、212・213の薩摩焼が出土している。

他に、石鍋がみられ、轆の羽口が出土している。

よって、この地区は10世紀と14世紀後半から15世紀の遺跡と思われる。性格的には轆の羽口が出土しているので製鉄関連の遺跡と思われる。

3 残存状況

山仁田遺跡周辺の残存状況は第52図のとおりである。北へ延びる舌状台地と南に延びる高台に遺構・遺物がある可能性が考えられる。北の舌状台地には主に中世の遺構や遺物が、南の高台には主に縄文の遺構や遺物が包蔵されていると考えられる。



第52図 遺跡の残存状況

引用参考文献

- | | | |
|----------------|------|--|
| 鹿児島県大隅町教育委員会 | 2000 | 「日輪城（恒吉城）跡」『大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書』20 |
| 鹿児島県郡山町教育委員会 | 2004 | 「油須木城跡」『郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書』4 |
| 鹿児島県大口市教育委員会 | 1982 | 「平泉城跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』1 |
| 鹿児島県大口市教育委員会 | 1996 | 「馬場 A 遺跡 辻町 1 遺跡 辻町 2 遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』15 |
| 鹿児島県出水市教育委員会 | 1999 | 「松尾城跡」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書』10 |
| 鹿児島県加世田市教育委員会 | 1980 | 「上ノ城遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』2 |
| 鹿児島県鹿児島市教育委員会 | 1994 | 「川上城跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』18 |
| 鹿児島県教育委員会 | 1981 | 「加栗山遺跡 神ノ木山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』16 |
| 鹿児島県教育委員会 | 1983 | 「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』28 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2002 | 「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2007 | 「持躰松遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』120 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2008 | 「向椿城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』129 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2010 | 「椿城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』155 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2011 | 「下鶴遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』163 |
| 川内郷土史編さん委員会 | 1976 | 『川内の溜池』 |
| 川内市歴史資料館 | 1985 | 『川内市文化財要覧』 |

写真図版



南方より遺跡を望む遠景



真上より遺跡を望む全景



北側から県道周辺を望む近景



県道より北側を望む近景



県道より南側を望む近景



県道より南側谷部を望む近景



縄文土器出土状況 1



縄文土器出土状況 2



1号(上)·2号(下) 炉迹出土状况



1号炉迹半截状况



1号炉迹完掘状况



1号炉跡の竈部



1号炉跡の煙道孔



2号炉跡 焚き口方向より



2号炉跡 竈方向より



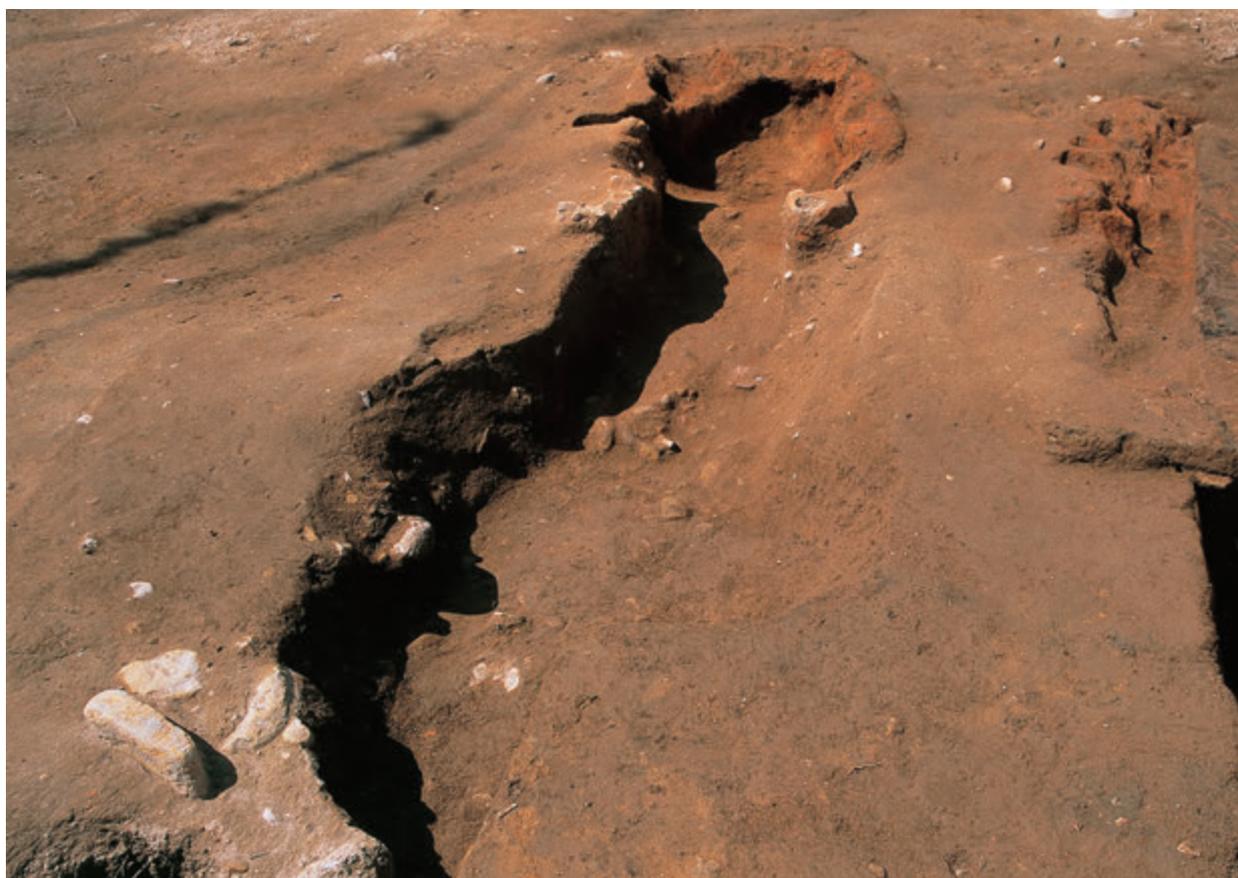
2号炉跡の竈部



2号炉跡の半截状況



3号(左)·4号(右)炉迹検出状況



3号炉迹完掘状況



4号炉迹半截状况



4号炉迹完掘状况



3号(左)·4号(右) 炉跡半截狀況



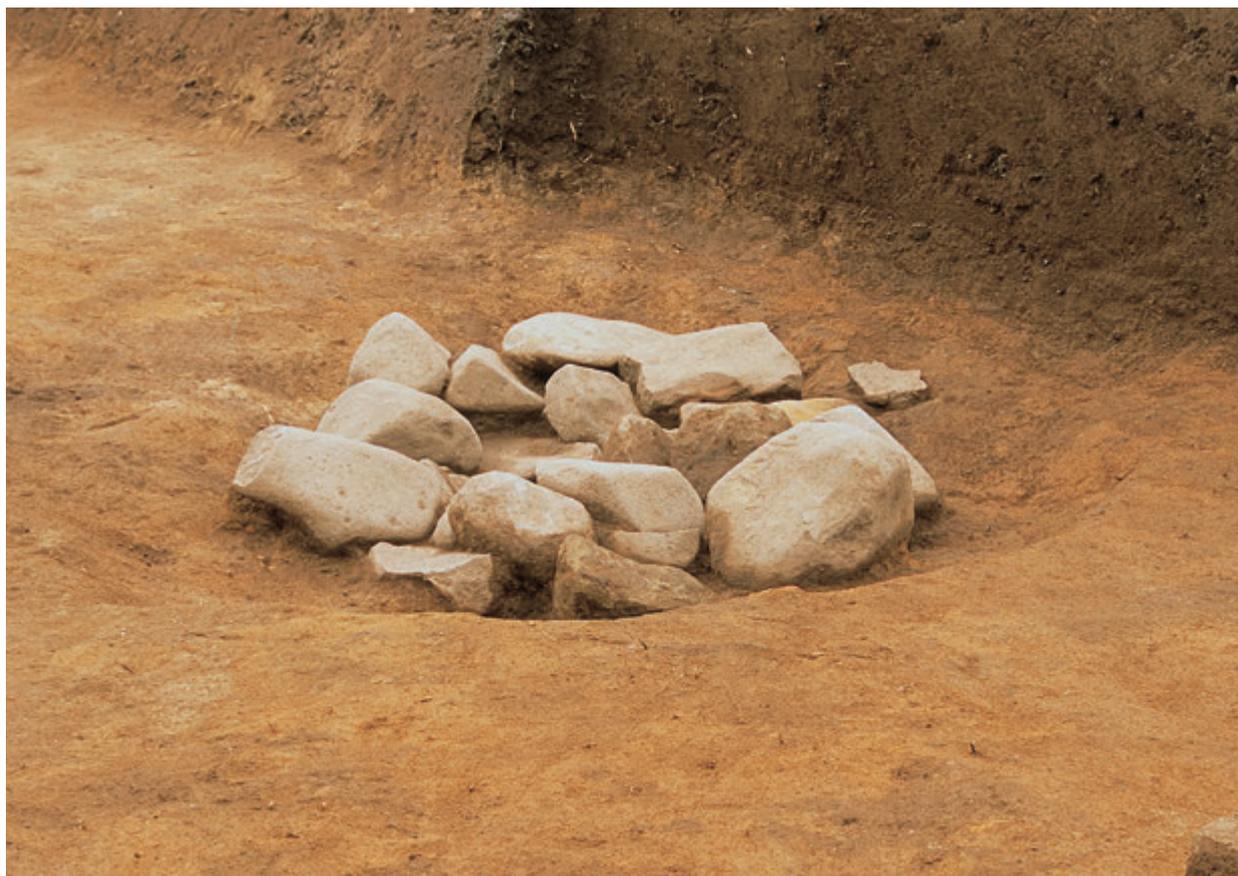
豎穴建物跡検出狀況



竪穴建物跡掘り下げ状況



竪穴建物跡完掘状況



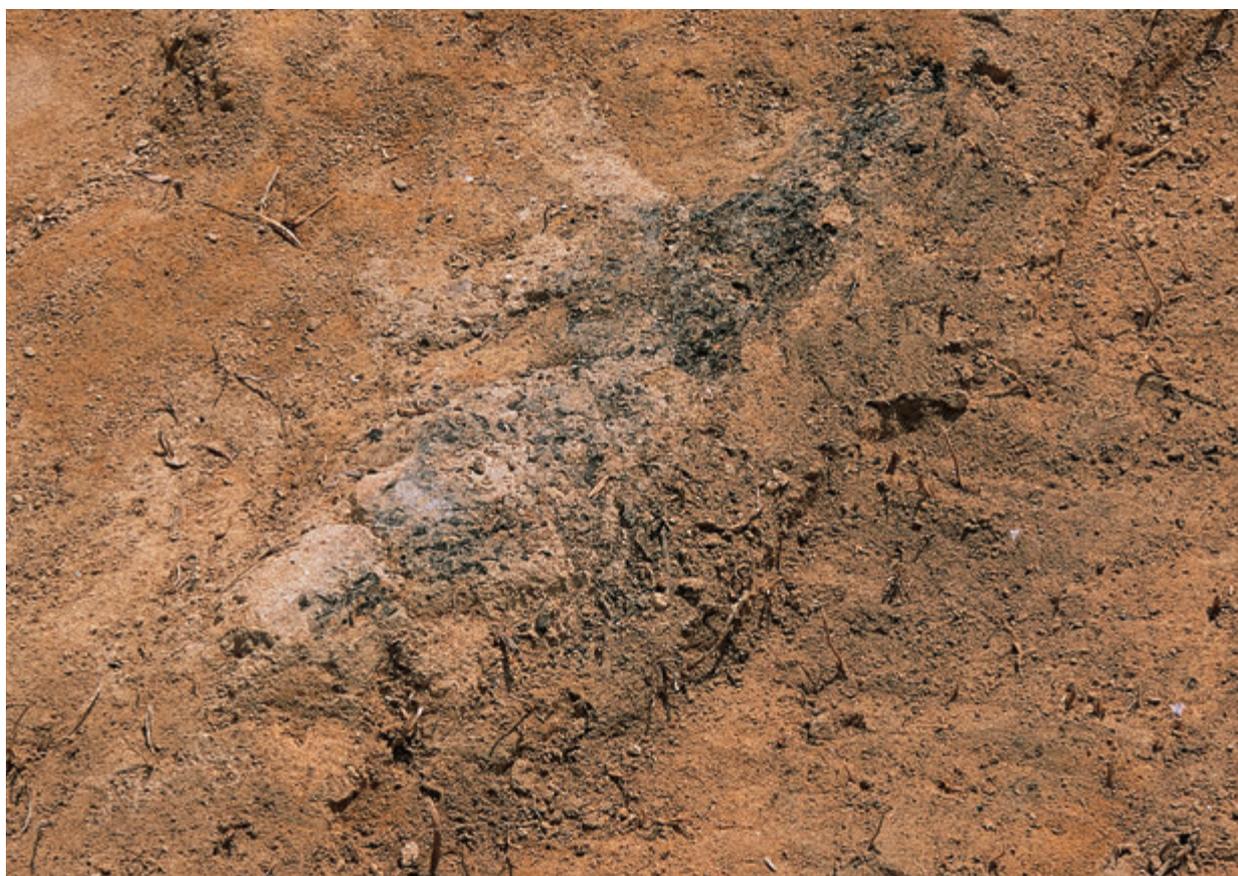
石組遺構検出状況と地層



石組遺構検出状況



道跡完掘状況東側（高位置）より



焼土を含む道跡硬化面



柱穴検出状況 (D-4区)



柱穴検出状況 (C-5区)



ピット 89 と青磁碗検出状況



ピット 89 断面と青磁碗出土状況



溜池遺構検出状況（中世）



溜池遺構淵部検出状況（中世）



溜池遺構底部 (中世)



溜池遺構中央部近く (中世)



水田遺構の検出状況（近世）



水田層断面状況（近世）



水田畦石組 (近世)



水田面と畦道石組 (近世)



近世土坑検出状況



近世水田と畦 (7T)



池底の泥炭と礫層 (7T)



池の2段底縁 (17T)



池の沈殿層と近世畦盛土 (7T)



池の北縁 (4T)



池の南縁 (24T)



池の北西縁 (5T)



池底と北東縁 (1T)



池の北縁 (19T)



池の沈殿層 (13T)



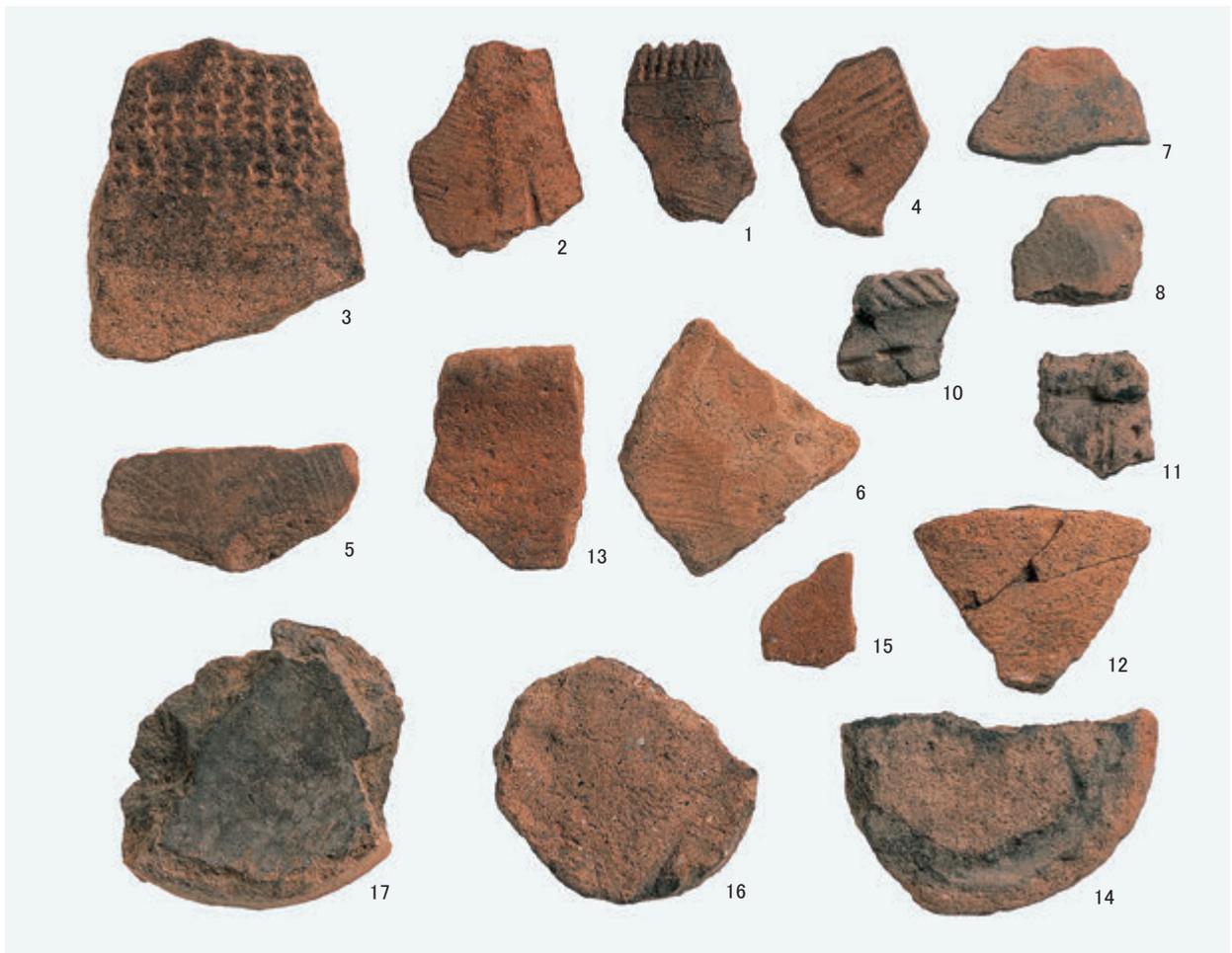
池の南東縁 (旧 14T)



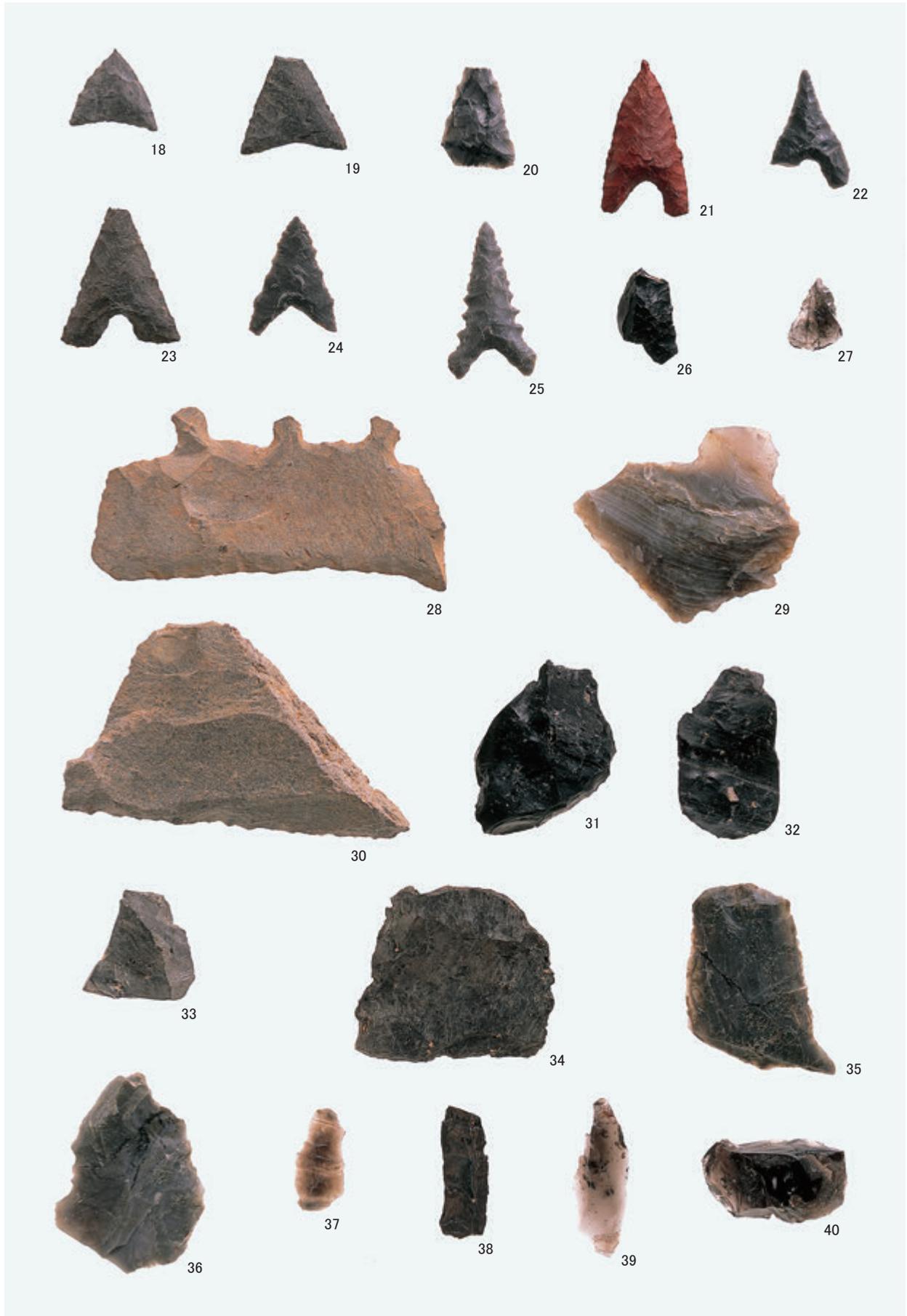
池の北東縁 (18T)



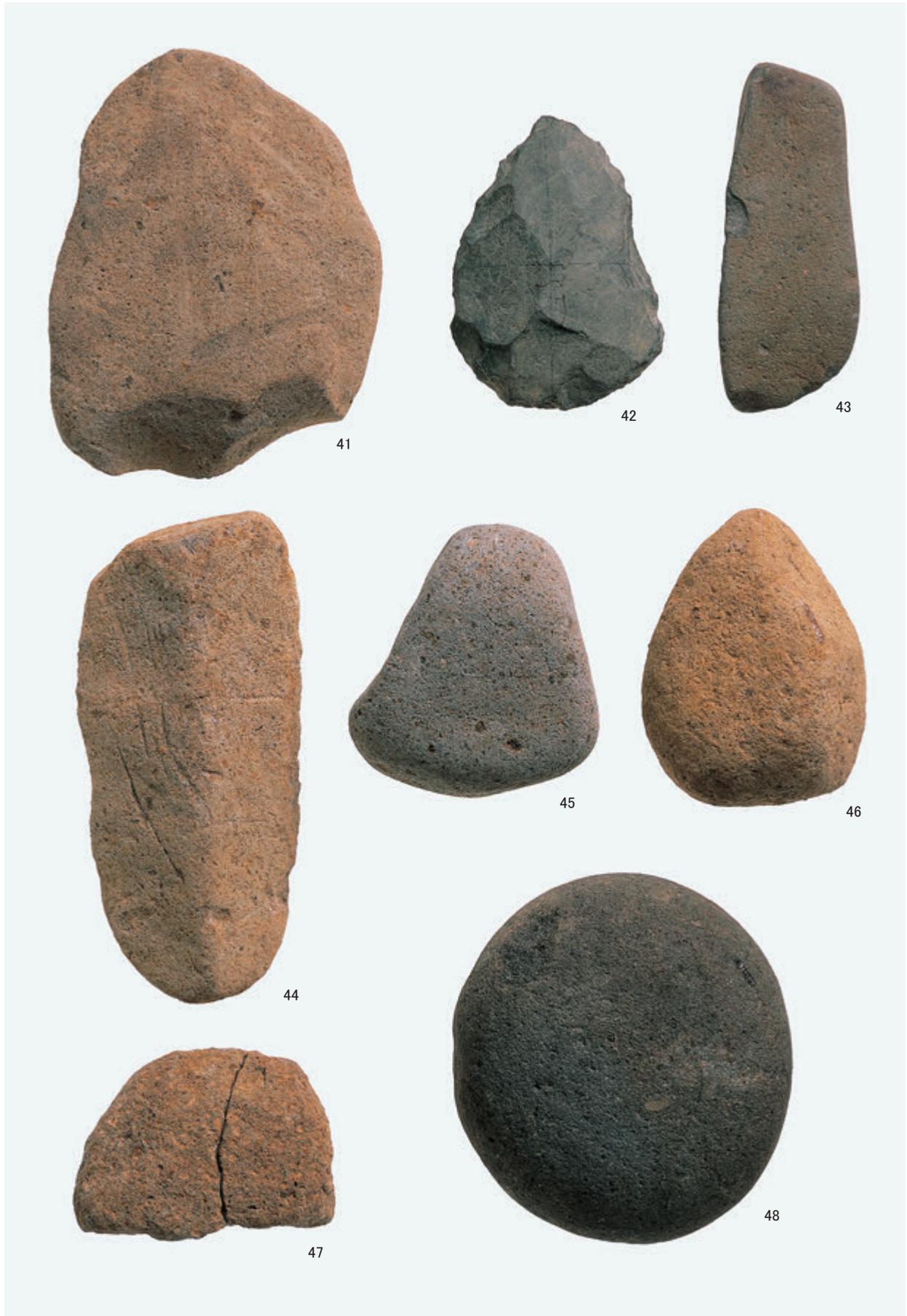
池の南東沈殿層 (旧 13T)



縄文時代出土遺物 (1)



縄文時代出土遺物 (2)



縄文時代出土遺物 (3)



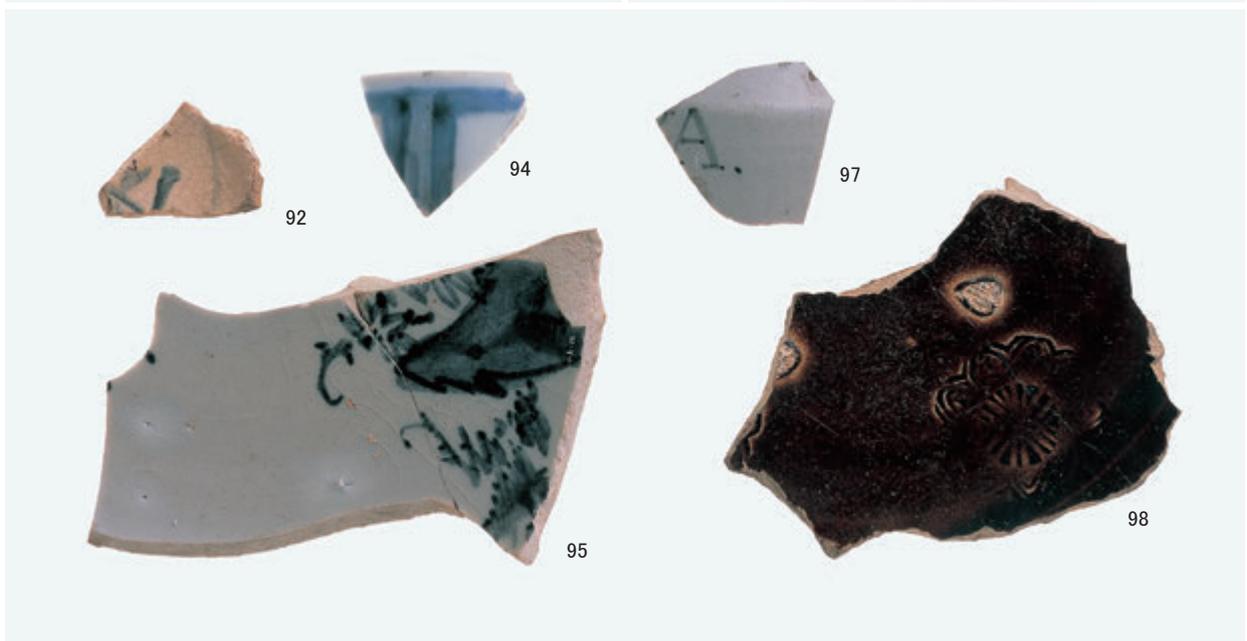
繩文時代出土遺物 (4)



中·近世出土遺物 (1)



中・近世出土遺物 (2)



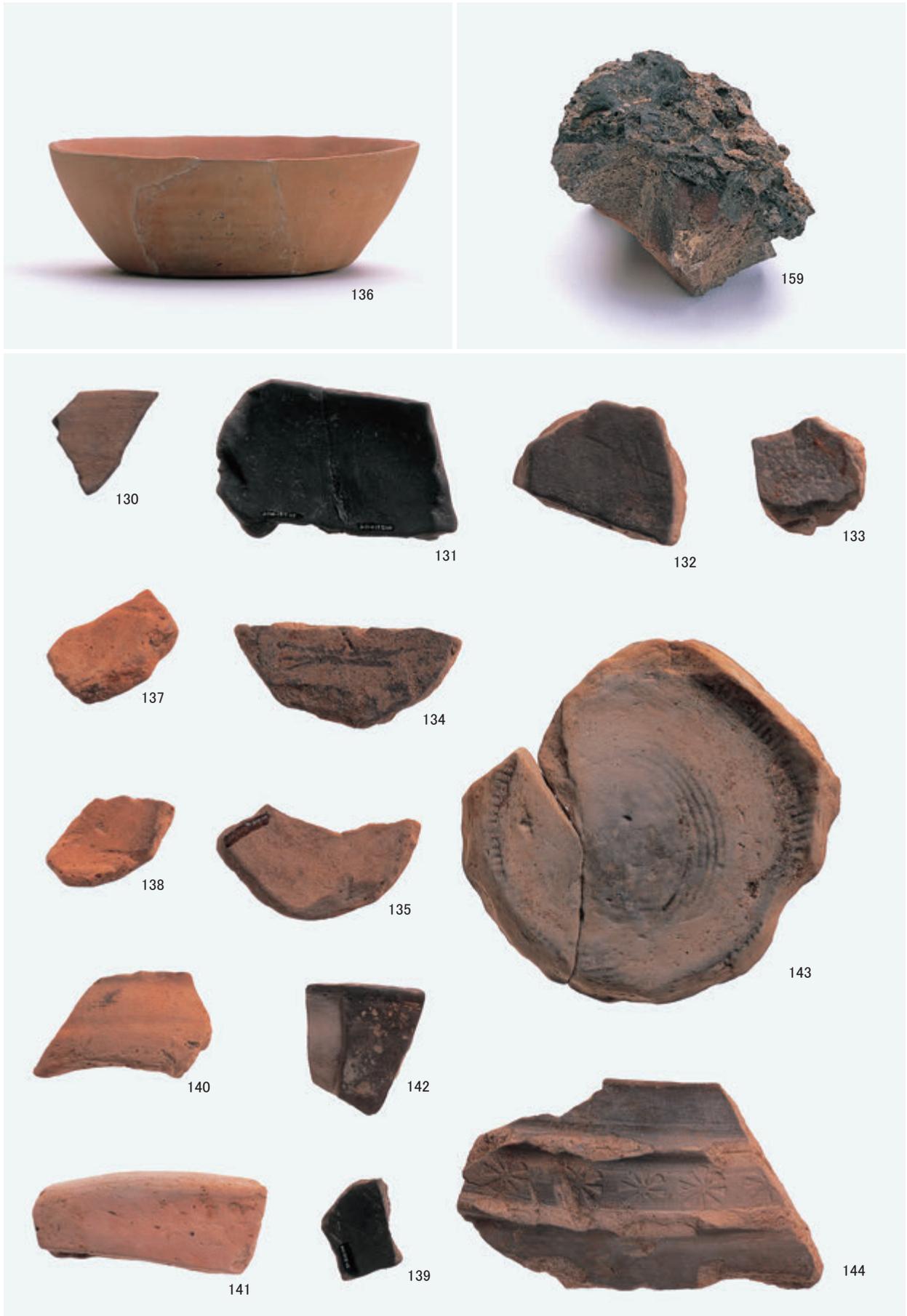
中・近世出土遺物 (3)



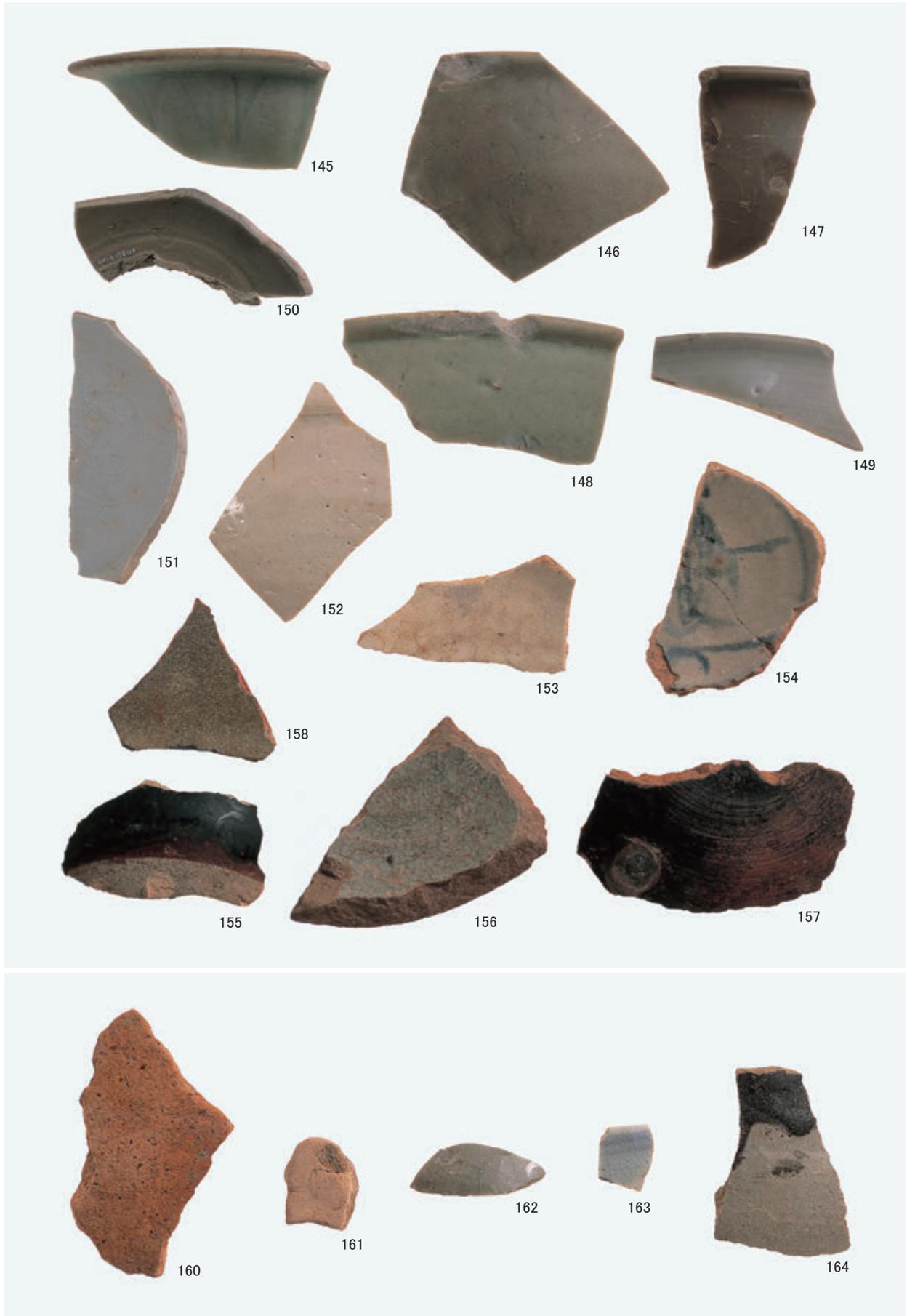
中·近世出土遺物 (4)



中·近世出土遺物 (5)



中·近世出土遺物 (6)



中·近世出土遺物 (7)



中·近世出土遺物 (8)



中·近世出土遺物 (9)



中·近世出土遺物 (10)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(174)

山 仁 田 遺 跡

発行年月 2012年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印 刷 (株)イースト朝日
〒891-0122 鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7
TEL 099-266-5522 FAX 099-266-5523